



2023年度 横浜市ESD推進コンソーシアム 実践報告書

令和5年度 文部科学省SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業



主な掲載内容

- ◆ 横浜市 ユネスコスクール・ESD推進校実践事例
- ◆ 横浜市ESD推進コンソーシアム委員寄稿
- ◆ 横浜市ESD推進コンソーシアム活動レポート
- ◆ 参考資料（講演レポート・横浜市ESDの変遷）

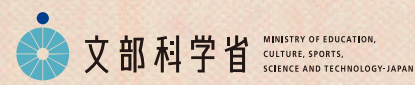
横浜市教育委員会

2023年度 横浜市ESD推進コンソーシアム実践報告書 2024年2月発行

横浜市教育委員会



【編集/発行】横浜市教育委員会事務局小中学校企画課
〒231-0005 横浜市中区本町6-50-10 横浜市ESD推進コンソーシアム
E-mail: ky-esd@city.yokohama.jp



本事業は文部科学省SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業として行われています。

この冊子は森林保全を目的として適切に管理された木材を使用した、FSC認証紙を使用しています

目次

はじめに 横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター
東京都大学大学院 環境情報学研究科 教授 佐藤 真久

本市の令和5年度ESD推進事業について

第1章 横浜市立 ユネスコスクール・ESD推進校の実践事例	6
1 永田台小学校 ユネスコスクール	7
2 幸ヶ谷小学校 ユネスコスクール	9
3 市ヶ尾中学校 ユネスコスクール	11
4 東高等学校 ユネスコスクール	13
5 みなとみらい本町小学校 ユネスコスクール	15
6 三保小学校 ユネスコスクール・キャンディデート	17
7 羽沢小学校 ESD推進校（継続校）	19
8 恩田小学校 ESD推進校（継続校）	21
9 荏田西小学校 ESD推進校（継続校）	23
10 大門小学校 ESD推進校（継続校）	25
11 中和田中学校 ESD推進校（継続校）	27
12 西本郷中学校 ESD推進校（継続校）	29
13 西柴中学校 ESD推進校（継続校）	31
14 中尾小学校 ESD推進校（継続校）	33
15 本牧中学校 ESD推進校（継続校）	35
16 小田中学校 ESD推進校（継続校）	37
17 中川西中学校 ESD推進校（継続校）	39
18 相沢小学校 ESD推進校（継続校）	41
19 旭小学校 ESD推進校（継続校）	43
20 本牧南小学校 ESD推進校（継続校）	45
21 新井中学校 ESD推進校（継続校）	47
22 南希望が丘中学校 ESD推進校（継続校）	49
23 豊田小学校 ESD推進校（継続校）	51
24 鉄小学校 ESD推進校（継続校）	53
25 並木中学校 ESD推進校（継続校）	55
26 希望が丘中学校 ESD推進校（継続校）	57
27 緑園義務教育学校 ESD推進校（継続校）	59

第2章 社会に開かれた教育課程における連携・協働の意義調査研究報告書 複雑性に向き合い、学びと協働の往還による探究モードへの挑戦	62
横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター 東京都大学大学院 環境情報学研究科 教授 佐藤 真久	

第3章 横浜市教育委員会としてのESD推進コンソーシアム活動	74
2023年度横浜市ESD推進校ステークホルダー交流会	75
2023年度横浜市教育センター研究発表会 「社会に開かれた教育課程における連携・協働の意義」	78
2023年度横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会	81
児童生徒の部 教職員の部	

参考資料

横浜市では、平成 28 年度(2016 年度)の文部科学省「グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業」の採択を受けて以来、全ての横浜市立学校で、ESD の理念に基づく教育が広がるような取組を展開してきました。事業の推進においては、多様な組織が参加・連携した「横浜市 ESD 推進コンソーシアム」を立ち上げ、以下のような ESD に関連するキーワードのもとで、取組が展開されてきました。

表:「横浜市 ESD 推進コンソーシアム」で活用されてきた ESD 関連のキーワード

- 持続可能な開発のための教育(ESD)
- ホールスクール・アプローチ
- 多様な主体とのパートナーシップ
- ESD のレンズ:見直す(批判的)、つなげる(統合的)、変わる(変容的)、地域で世界へ(文脈的)
- SDGs の特徴:普遍性、包摂性、参画性、統合性、透明性
- SDGs を学ぶ、SDGs に学ぶ、SDGs と学ぶ
- カリキュラムデザインと学校運営の連関
- 未来につながる、未来につなげる
- 「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会
- 学びの可視化、プログラムの評価

本取組では、当初から ESD を学校全体で取り組むこと(ホールスクール・アプローチ)を軸に据え、展開してきました。「ホールスクール・アプローチ」は、(1)学校におけるガバナンスと能力開発、(2)学校施設の運営、(3)カリキュラムの編成・実施と教授・学習活動、(4)学社連携の 4 領域に配慮をしたものであり、その相互性が強調されたアプローチと言えるでしょう。本取組においても、カリキュラムデザインと学校運営を連関させたアプローチを採用し、さまざまな取組を「見直す、つなげる、変わる、地域で・世界で」のレンズで考えることを、教職員、学校関係者、保護者、児童生徒とともに深めてきました。地域と世界、学級・学年と学校、教科と総合、能力と態度などのように、一見、異なる文脈で語られることが多い用語を関連づけ、学校全体が持続可能性に向き合う取組を深めてきました。

令和 5 年度(2023 年度)においては、文部科学省「SDGs 達成の担い手育成(ESD)推進事業」(多様なステークホルダーとの協働による人材育成)の採択を受け、協働と学習のプロセスの運動性の強化に取り組んできました。横浜市において進めている SDGs 達成の担い手育成事業と、「はまっ子未来カンパニープロジェクト」を含むキャリア教育事業は、これまで十分に事業間の連携がとられてきていませんでしたが、第 4 期横浜市教育振興計画において、一体的に進める方針が出され、この振興計画を具現化する取組として位置付けられました。まさに、事業間連携を通して、子ども自身が、自分に自信をもって、夢や希望を持ち、互いの力を持ち寄りながら、より良く生きていけることを目指していると言えます。本事業に関わる個性ある学校は、VUCA 社会に対応し、持続可能な社会の構築にむけて、当初から ESD を学校全体で取り組むことを軸に据えるという「ホールスクール・アプローチ」を採用してまいります。是非、本報告書を通して、横浜の学校における、「ホールスクール・アプローチ」の取組や、学習と協働の往還による探究モードへの挑戦を読み解いていただければ幸いです。

この冊子に見出される知見が、横浜の、国内各地の、ひいては世界各国の持続可能な未来に向けた教育のさらなる展開の一助になれば幸いです。

横浜市 ESD 推進コンソーシアム・コーディネーター
 東京都市大学大学院 環境情報学研究所 教授

佐藤 真久

本市の令和 5 年度 ESD 推進事業について

本市における ESD 推進事業は、平成 28(2016)年度の文部科学省の「グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業」に採択され、横浜市教育委員会として、横浜市 ESD 推進コンソーシアムを組織することに始まっている。それより昨年度までの推進事業については、巻末の参考資料に掲載しているので参照していただきたい。

令和 5 年度 事業の内容

本市では、平成 28 年度から、ユネスコスクールを中心として推進校を指定し「学校運営(ホールスクールアプローチ)」と「カリキュラムデザイン」の両面で ESD の実践に取り組んでおり、令和 5 年度の推進校は 27 校である。

また本市では、同じく平成 28 年度から、キャリア教育実践プロジェクト事業の 1 つとして、「はまっ子未来カンパニープロジェクト」を実施している。この事業は、企業・地域等の方々と横浜の児童生徒が連携し、商品開発・地域貢献に関する学習を行う中で、児童生徒の社会参画に対する意識を高める取組である。参加にあたっては、連携機関と連携していく際に、目標や活動内容の共有をしやすくするため、学習活動の中に SDGs の視点をもつことを提案しており、令和 5 年度の参加校は 73 校で、取組数は 171 取組である。

本市は、平成 30 年 6 月に SDGs 未来都市に認定され、「横浜市中期 4 年計画」では SDGs の視点を踏まえた取組となるように中長期ごとに SDGs の目標との関連付けをするものとしている。また、おおむね 10 年の本市の教育を方向付ける「横浜教育ビジョン 2030」で「自ら学び 社会とつながり ともに未来を創る人」の育成を目指し、「グローバルな視野をもち、持続可能な社会に向けて行動する力」を育むとしている。そのアクションプランである「第 4 期横浜市教育振興基本計画(2022~2025)」では、柱 2「ともに未来をつくる力の育成」施策 2「持

続可能な社会の創り手育成の推進」を掲げ、持続可能な社会の創り手を育成するために、地域・企業・NPO などと連携・協働して、教育を通してよりよい社会や新たな価値を創造することを目指すことを示している。

そして、実社会における課題の解決に向けて行動する人を育むため、「SDGs 達成の担い手育成(ESD)」と「自分づくり(キャリア)教育」を一体的な推進を目指すことにした。2 つの事業を一体的に推進していくために、2 つの側面から、多様なステークホルダーとの協働による人材育成を図っている。

「学校運営(ホールスクールアプローチ)」については、令和 2 年度に ESD 推進校に実施した東京大学の調査(対象:児童生徒 2,631 名、教員 683 名)から、「ホールスクール(学校全体)としての取組の方が児童生徒の知識・態度・行動に影響を与えている」という分析結果が出ており、ESD のホールスクールアプローチで学校運営を見直していくことを支援している。具体的には、図 1 のように学校教育目標と教育活動の関連付けをする、つまり、目的と手段の論理的なつながりをもたせるとともに、学校教育目標の実現に向けて育成したい資質・能力を教職員の中で議論し、共通理解を図った上で教育活動を実践していくということである。このことは「ESD for 2030」の優先行動分野とも一致している。



図 1 推進している教育活動の全体イメージ

そして、「はまっ子未来カンパニープロジェクト」も学校教育目標と関連付けて取り組むことで、明確な指標を示しながら地域・企業・NPO

などと連携・協働を進めていけるように支援している。これまでは、図2のように相互を補完する関係であった「向き合う協働」としての取組が多く見られていたが、ホールスクールアプローチを取り入れることで、共有ビジョンに向けてともに歩み続け、価値の創造をしていくといった「星見型の協働」を「はまっ子未来カンパニープロジェクト」でも実現を目指している。

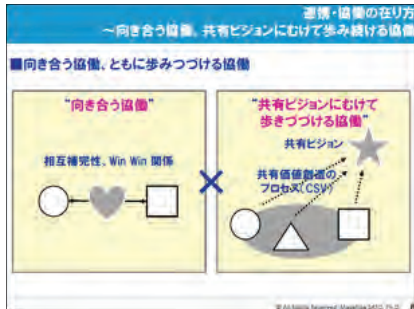


図2 向き合う協働、ともに歩み続ける協働

次に「カリキュラムデザイン」については、国立教育政策研究所が示している『「持続可能な社会づくり」の構成概念(例)』と「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」(以下「構成概念」「能力・態度」)を基に、各推進校でESDを通して育成したい資質・能力と関係付け、それらをどのように育成するか授業研究等を通じて明らかにしている。前述の質問紙調査で本市の児童生徒や教職員として改めて課題として明らかになった「学習を進める中で、SDGsの目指す環境・経済・社会の三側面の関連性をどのようにしてもたせるか」という点についても引き続き検討している。そして、「はまっ子未来カンパニープロジェクト」もSDGsと関連させて取り組むことで、地域・企業・NPOなどと共有ビジョンを構築する際の共通言語となるようにしながら、連携・協働を進めていきやすいように支援している。

みなとみらい本町小学校(以下MM本町小)は、ESDの推進を学校教育目標に掲げて学校運営を行っている。様々な教育活動が学校教育

目標(ESDの推進)と結びついているかどうかを可視化するために「ロジックモデル」を作成し、その実現状況を「協働型プログラム評価」を行うことによって、学校運営の見直しや改善に役立てている。令和4年度は「社会に開かれた教育課程の実現」という視点を軸に「学級でのESDロジックモデル」を活用したESDによるホールスクール(コミュニティ)アプローチの研究を行っている。従来、教職員や学校運営協議会委員で策定していた「ESDロジックモデル」(図3)について、児童が、「学級でのESDロジックモデル」の策定に関わる「当事者」として自らを変容させている。このMM本町小のホールスクール(コミュニティ)アプローチを基底として「ESDロジックモデル」を一般化し、簡易に活用できるようにさらに研究を進めて普及を図ろうとしている。



図3 MM本町小のロジックモデル(抜粋)

全市立小中学校(約500校)に対して実施している「教育活動実施状況調査」において、各学校のESDの取組状況について調査し、推進校も含めた経年変化を踏まえて本事業の方針を検討している。そして、本市実施の「学力・学習状況調査」の児童生徒を対象とした「生活・学習意識調査」に、ESDの学習意識に関連する設問を令和4年度から設定し、児童生徒個々のESDの学習意識を把握して分析している。

成果の普及については、本実践報告書及び「はまっ子未来カンパニープロジェクト」パンフレットを作成して取組内容を発信するとともに、年度末にESD交流報告会や「はまっ子未来カンパニープロジェクト」学習発表会を実施して、本市教職員のみならず、他地域のESD推進諸団体に対しても発信している。

第1章

横浜市立 ユネスコスクール・ESD推進校の実践事例

横浜市立永田台小学校

学校教育目標「一人ひとりが輝く永田台」

ESDを通して育成したい資質・能力

「人のこととのつながりを尊重する力」「未来を予測して解決する力」「協働的に取り組む態度」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) は連携・協働のパートナー



芽かきをすると、どんどん大きく育っていくんですね。

〇2年生 生活科「おいしいやさいになあれ」
昨年度の2年生が使っていた大きい植木鉢に出会い、「自分たちも野菜を育ててみたい。」という子どもたちの思いから好きな夏野菜を育てることになった。横浜植木さんからは「子どもで嫌いな人が多いピーマンを自分で育てて食べてみてほしい。」と言われ、ピーマンも育てることになった。苗を植えてすぐ病気ではないか、成長が遅いのではないかと心配事が出てきた。その度に、地域の方や詳しい先生に聞くなどして、野菜の種類によって世話の仕方が違うことを知り、教わったことを心がけて毎日大切に育てた。収穫して美味しく料理をしてもらって食べた喜びから、冬野菜も挑戦したいとまたすぐにチャレンジが始まった。



誘引することで、台風が来ても倒れないから安心なんだね。安心だな。

〇3年生 総合的な学習の時間
「パンの2わくわくけんきゅう王国」
「中がふわふわで外がカリカリのパンを作りたい!」という思いをもち、パン作りに夢になっていた本学級の子ども達。学校が50周年記念の年ということもあり、次第に「永田台小の50周年記念パンを作って、お世話になっている地域の方や家族にプレゼントしたい!」という思いが芽生えた。自分達の想いが伝わるパンにするにはどうしたらよいか、地域のパン屋さんと協働しながら、作り方やデザイン、味についてプレゼンをし、何度も話し合いを重ねていった。そして、「食べてもらう人が笑顔になってくれるパンにしたいな。」という相手意識の高まりから、見守り隊の方やキッズのスタッフ、そして高齢者の方が集まる団地のサロンの方へ実際にインタビューを行った。安心安全に、そして食べた人が笑顔になってくれるようなおいしいパンにするために、校内の先生だけではなく、地域のパン屋さんやお世話になっている地域の方等、見えない所でも子ども達を支えてくださる様々な方と繋がりが、50周年記念パンの実現に向けて活動した。



見て!発酵したらこんなに膨らんだよ!

学校のシンボル「カニキング」のデザインを入れたいです!



この中で、どの味のパンが好きですか?教えてください!



本物の花火はやっぱり迫力がすごいな!思わず拍手や歓声があがるような花火をぼくたちもつくりたい!



同じような花火がつつくとか飽きちゃうから、この順番を変えたほうがいいんじゃない?



「中がふわふわで外がカリカリのパンを作りたい!」という思いをもち、パン作りに夢になっていた本学級の子ども達。学校が50周年記念の年ということもあり、次第に「永田台小の50周年記念パンを作って、お世話になっている地域の方や家族にプレゼントしたい!」という思いが芽生えた。自分達の想いが伝わるパンにするにはどうしたらよいか、地域のパン屋さんと協働しながら、作り方やデザイン、味についてプレゼンをし、何度も話し合いを重ねていった。そして、「食べてもらう人が笑顔になってくれるパンにしたいな。」という相手意識の高まりから、見守り隊の方やキッズのスタッフ、そして高齢者の方が集まる団地のサロンの方へ実際にインタビューを行った。安心安全に、そして食べた人が笑顔になってくれるようなおいしいパンにするために、校内の先生だけではなく、地域のパン屋さんやお世話になっている地域の方等、見えない所でも子ども達を支えてくださる様々な方と繋がりが、50周年記念パンの実現に向けて活動した。

〇5年生 総合的な学習の時間
「学校と地域に感動を届けよう!創立50周年記念パッチャル花火」
「50周年をお祝いし、学校や地域みなさんに感動を届ける花火を打ち上げたい」という願いの実現に向けて活動した。本物の花火を実際に体験する活動では、人々が思わず拍手をしたり固唾をのんで空を見上げたりする様子を目の当たりにし、花火の魅力への理解を深めた。地域の夏祭りで花火を打ち上げている山田さんのお話を伺い、飽きないように「起承転結」を意識した構成にすることや、変化や緩急をつけることよいことを教えていただいた。花火づくりと上映の活動を繰り返していくことで、地域の人のために取り組むことの達成感や充実感を味わっていた。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) とことん追究する姿

身近な課題から自分達の成し遂げたい目的を設定することで、子ども達は切実感をもって活動をスタートしている。単元途中では充実した体験活動を行ったり、専門家と出会ったり、探究的に学びが連続していくようなストーリー展開を大切にしている。そうすることで時間を忘れて没入する姿、最後まで粘り強くとことん追究していく姿が見られた。

(2) 見通し、計画を立て、再構築する力

ゴールの姿や目的が明確になると、そこに向けて逆算的に計画を立てたり、必要な手段や学び方を考えたりする力がついた。また、実際の活動の振り返りを丁寧に重ねていくことで、「今、何のためにしているのか」目的に立ち返ったり、必要な目標を立てたりしながら、子ども達の実現への道を切り開き、ゴールに向けて歩んでいく力がついた。

(3) 多面的・総合的に考える力

目的意識と相手意識を明確にしていく中で、必要に応じてアンケート調査やインタビュー活動、専門家との連携を単元に位置付けている。そうすることで自分本位だった考えや視点を客観的に捉えることができたり、実社会の営みから本質的な価値に触れたりすることを通して、子ども達は多面的に物事を捉え、状況や文脈に応じて総合的に判断していく力が伸びている。



3 ESDの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1) 学校教育目標をESDで育む資質能力の三つの柱で整理し、位置付けた



研究年度始めに、具体的な子どもの姿で育てたい力を共有した。そして、育てたい力は、ユネスコスクールの理念(平和、国際理解、環境、ESD、SDGsの推進)を教育実践していくこととも重なる部分は大いにあることが分かった。永田台小学校の学校教育目標からユネスコスクールとしての意義とつながりのあるところに色付けてみると、ほぼ網羅していることに気付く。このように、学校教育目標の実現を目指すことが、ESDを通して育成したい資質・能力と紐づいていることを共通理解し、スタートした。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 自己肯定感の高まり

横浜市学力・学習状況調査の生活意識調査6年生の結果では、「自分にはよいところがあると思いませんか」の質問に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童の割合が4年間で15ポイントも増えた。必要感のある学びを職員が共同研究として進めていくことで、地域の役に立ちたい、こんな風になりたいと夢や願いをもって取り組んでいる。その結果、誰かに「ありがとう」と声をかけられたり、学級の中で役割を果たして達成感を感じたりすることを通して、自己肯定感の高まりと結びついているように考えた。これは生活・総合を柱にしたESDの実践を積み重ねてきた成果ともいえる。

横浜市立幸ヶ谷小学校

学校教育目標「自分 友だち 社会の幸せをつくる子ども」

ESDを通して育成したい資質・能力

※ 各学級、学年の実態に応じて、本校の資質能力表をもとに策定（別紙参照）

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体（例） は連携・協働のパートナー



2年生の様子



4年生の様子



6年生の様子

2年生「生活科」
「ぐんぐんそだて！おいしいサツマイモ！」
学校花壇で育てるサツマイモの育成を通して、子ども達は地域とのかかわりを深め、サツマイモそのものへの愛着を深めた。
サツマイモの育成と食事にあたっては、**地域の農園**や**学校調理員**、また**苗を譲り受けた外部講師**などとの協力を頂き、特別授業も繰り返し行った。子ども達は育成の工夫を学ぶだけでなく、実際の調理のアイデアを出して実践したり、オリジナルの歌を作ったりと意欲的に活動を行い、学習は大きな展開をみせた。

4年生「総合的な学習の時間」
「海水槽大人気プロジェクト」
本実践では、本校内に数年前からある海水槽に、自分で取ったり釣ったりした生き物を海水槽に入れることで、色々な人が魚の面白さや生態に興味をもち、海水槽を大人気にするという目的のもと、学習を深めた。
活動では、**高島水際線公園**や**横浜湾空港技術調査事務所**にて、干潟体験や釣り活動を通して、横浜の海の豊かさや生き物の魅力を感じる姿が見られた。また、海水槽にたくさんの魚を入れたせいか、海水槽の魚が全滅してしまい、その失敗を2度と起こさないように、原因と対策を調べ、魚を入れる数や種類を話し合った。
さらに、クラスで海水槽を作ったり、学校内の海水槽に入れる生き物をもらったりと、実践している。様々な大人の人達に海水槽の環境整備方法やどのくらいの生き物を入れたらよいかなどを教えてもらいながら学習を深めていくことができた。

6年生「総合的な学習の時間」
「幸ヶ谷の歴史幻灯を映し出せ！～神奈川名物『亀の甲せんべい』をこのまちにもう一度～」
本実践では、「SDGs11 住み続けられるまちづくり」をテーマに、神奈川宿跡が学区に広がるまちの魅力の発信を目指した。まちの歴史を調べる中で、江戸時代からこのまちにあった名物「亀の甲せんべい」を最後につくっていたお店が14年前に閉店してしまったことに、子ども達は目を向けた。「地域が懐かしさを感じたり愛着が深まったりすることにつながるのでは」と、型を見つけ、レシピを調べ、名物復活に挑むことができた。
区役所や**神奈川宿盛り上げ隊**とともに企画した「神奈川宿フェス」では、300枚の亀の甲せんべいを販売した。子どもたちはアンケート結果から「地域の人の心の変容」を感じるとともに、まちへの愛着を深めることができた。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働

により引き出すことができた価値

6年生の実践例を通して

本校では、生活科・総合的な学習の時間を中心に地域や企業等に多くつながりをもって学習を展開している。

6年生の総合的な学習の時間では、江戸時代からまちにあった「亀の甲せんべい」の復活というテーマに向けて区役所や地域の有志と連携を図り、実際の制作、販売に結びつけることができた。現在、存在しないまちの名物を復活させたことだけでなく、その学習過程において調べ学習を通して自分たちの住むまちの歴史を知り、人と会うことで思考を深めることができた。また制作、販売の過程においても地域の方々と協働することで子どもたちの変容を生み出すことができた。

3 ESDの価値を引き出すために

試行錯誤したこと

本校の重点研究について

本校では、「自分 友だち 社会の幸せをつくる子ども」という学校教育目標を掲げており、ESDを柱に学校教育目標の達成に向けて力をつくしてきた。特に、総合的な学習の時間、生活科の実践においては、長年にわたって積み重ねてきた経緯があり、その成果は内外に高く評価されている。

本年は、近年積み重ねてきた「リフレクション研究」を引き継ぎながら『効果的なりフレクションをベースにした問題解決的な学習の充実～誰ひとり取り残さない社会の創り手の育成を目指して～』というテーマで行っている。

研究にあたっては、3つのion(イオン)というものを視点として共有している。具体的には、Question(問いの質)、Communication(協働的な学び)、Reflection(振り返り)である。

また、研究を進めるにあたり、毎年、幸ヶ谷小学校で育てたい資質能力(系統表)を作成し、年度途中にワークショップ形式で見直す時間を設けており、職員からも効果的であるとの

図1 本校の資質能力表

肯定的な意見が多く出ている。3つのionも資質能力表も、学校教育目標を達成するために、大切な視点であり、ESDを具現化したものであると考えている。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことにより引き出すことができた価値

本校ではリフレクション実践に取り組み始めてから、協働的な研究会の在り方を模索してきた。また毎年、全職員が参加しての業務の見直しの研修会を設けることで、単なる業務改善でなく職員同士のつながりを意識した運営を重ねてきた。

本年度は、業務改善の必要性を強く感じ、年度途中でも複数回、上記のような取り組みを行った。このように職員が自発的に改善を目指し、つながりをつくらうとしているのも、ESDを柱にホール・スクールアプローチで実践を重ねてきた歴史があるからだと考えている。ホール・スクールアプローチ実践は単に学校業務や活動をESDの視点で捉え直すだけでなく、職員同士のつながりや同僚性を高める価値があるのだと考えている。ま



職員研修の様子

た、課題として行動変容まで至る児童とそうでない児童の差がある。こうした課題の解決に向けて、授業実践においても、子ども同士のつながりや協働性を高められるよう引き続き実践を重ねていきたい。

横浜市立市ケ尾中学校

学校教育目標 「〇自分で解決する力を大切にします。(知・公・開)

〇心豊かに生きる力を大切にします。(徳・体) 」

ESDを通して育成したい資質・能力 「他者や社会との関わりを大切に協力する力」

「ものごとを多面的・総合的に考える力」「協働して課題解決するためのコミュニケーション力」

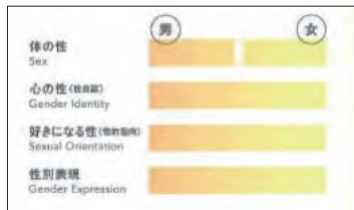
1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) 東高校 は連携・協働のパートナー



東高校自作のワークショップの様子



生徒会本部主催のクイズ大会



「性の多様性」について人権感覚を磨く



職業講話当日プレゼンテーションの様子

【生徒会本部役員「ユネスコスクール東高校と交流」】
他校種と体験を分かち合い、自校におけるSDGsのフロンティアを開拓する目的として、生徒会本部役員と中央委員会有志生徒で東高校「サステナブル研究部」と交流した。「サステナブル研究部」による自作のすごろくやゲームを実際に体験することで、楽しく活動しながらも社会課題に自然と意識することができた。市ケ尾中の取組は、「環境」分野が主であるが、貧困などの社会的・経済的分野にも視野を広げられることに気づくことができた。結果、今後の活動の幅を広げようとする生徒の意欲的な姿が見られた。

【全校集会「水について考えよう！クイズ大会」】
生徒会本部では全校生徒に現代の水の課題や知識を知り、考えてもらいたいという思いの下、クイズ大会を企画した。学年問わず、縦のつながりを大切にしたいと考え、どの学年でも取り組みやすいよう、2択クイズを考えた。「安全な水にアクセスできる国の数」にも注目してもらおうお題も設定し、東高校との交流で得た「誰もが楽しんで取り組める活動」「環境分野以外も開拓すること」について、学校のリーダーとして具体的に行動することができた。

【全学年「道徳」「人権特設授業」】
本校では、「道徳」での学びを活かし、様々な課題を「自分事」として捉えて、議論し行動できる人の育成を目指している。6月には、一つの物事も独自の価値判断で異なって捉えられることや日常の何気ない会話に偏見や差別意識が潜んでいることに気づかせるワークショップを行った。人権が自分たちの身近にあることを意識した上で12月、「あってもいいちがいがいい」「あってはならないちがいがいい」や性の多様性について全校で考え、「なぜそう考えたのか」の理由について共有することで、各自が他者の視点を理解し、自己の価値観を見つめ直すことができた。(2参照)

【1・2学年「職業講話・課題解決学習」】
「働く方々の生き方から多様な価値を学ぶ。課題解決学習から他者と社会とのかかわりを学び、将来に向けて自分が出発点となることを考える」をねらいとして、NPO法人アスリードのご協力の下、企業から事前学習としてSDGsにつながるビジネス課題を頂き、グループで解決策を考え、講話当日に企業講師にプレゼンをした。「お客様に必要な『水』を考えて提案しよう！」など現実社会の課題解決を仮想体験することで、働くことがSDGsの達成につながるだけでなく、他者と協力して複雑な問いにチャレンジしていく楽しさ、異なる意見を受け入れて一つにしていく面白さにつながることを実感することができた。(2参照)

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) リーダーの変容

東高校との交流後に目を輝かせて、「こんな活動をうちでもやってみよう」「自分たちの活動は自然環境に対するものが多いと気づくことができた。」という言葉があり、それが生徒主体の全校集会につながった。高校生から興味をもって自分たちの活動に質問を受けることで、自分たちの想いを今後はどうつなげていきたいか、考えを深めることができた。

(2) 「性」に対する人権感覚の変容

「性」をテーマとした12月の人権特設授業でお互いの違いを受け入れ認めあう意識や態度を育むためには、教職員一人ひとりが豊かな人権感覚を身に付けることが大切だと考えた。7月には特定非営利法人SHIPを講師に迎え、職員研修を行った。そこで、「LGBTQ」というマイノリティを区別する言葉ではなく、誰の状況にでも汎用できる「SOGI」＝「性の多様性(グラデーション)」(1の図参照)を学び、本校としては「SOGI」を生徒に認識してもらい、「性」の当たり前を見直し「性の多様性」を自分事にすることを目標とした。結果生徒の感想には、「人は皆異なるものだから、変だとは思わないようにしたい」「自分はそんなことはないと思わず、周りで性について悩んでいる人がいたら安心して自分を出せる世界にしていく必要があると思った」などの記述が見られた。

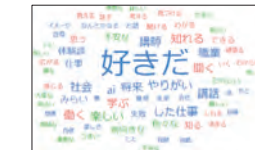
(3) 将来働くことの価値観の変容

NPO法人アスリードのコーディネートにより、各社から多様なビジネス課題を中学生のために提示して頂くことが可能となった。その結果、「考えるのはとても大変だったが、班の人と考え、解決案が出たときや、褒められたとき達成感がありやってよかった」「普段生活して自分では気づけない新しい見方や価値観を学べました。いるだけじゃわからないこと、感じられないこと、取り組めないことにチャレンジできたのが楽しかった。」「SDGsだからやろうではなく、〇

〇したいからやった。それがSDGsにつながった。」といった生徒の感想が印象的であった。

3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

本年度もプロジェクト型の生徒会活動を展開し、活動を先輩から後輩へと継承しながら、「持続可能な社会の創り手」としての資質・能力を育て、同時に教職員も全教育課程の中でESDの価値を捉え直し、生徒の変容を見とり視覚化することを意識してきた。例年、前期と後期に委員会アンケートを実施し、7つの資質・能力の個人の成長点を視覚化し校内に掲示している。今年度は、職業講話実施前に、「働くことのイメージ」を生徒の現在地として職員に提示し、実施後にも同様の質問をすることでその変化に着目させるように工夫した。



職業講話実施前(上)と後(下)の生徒アンケート「働くことについてのあなたのイメージ」のテキストマイニング

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

多様な人々と協働しながら様々な社会的変化に対応できる力が必要とされる社会では、他者との違いを認めることが大前提である。今回、道徳を含めた教育課程の中で、自分の考えに理由をもち、様々な価値基準をもって問題を捉え直すことを意識できることを目標としてきた。結果、そのような姿を見とることができた。本校の生徒は、卒業しても、個人の中に内在化した多様性の視点をもって、地域や社会に変容を促していくことができると考えている。

横浜市立東高等学校

学校教育目標

- ・自ら学び、熱心に学習する生徒を育成します（知）
- ・社会の一員として自ら役割を果たすとともに、国際社会の発展に貢献できる生徒を育成します（公・関）

ESDを通して育成したい資質・能力

「言葉の力」と「聞く力」を身につけ、論理的な思考力と高いコミュニケーション力
「主体的な学び」の成果をもとに、より高い進路目標の実現に向けて挑戦する力

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体（例） は連携・協働のパートナー 1年生「グローバルシチズンシップキャンプ」(GCキャンプ)



「グローバル」とは「グローバル」と「ローカル」を合わせた言葉で、世界を見る目をもってまずは地域で活躍していく人材の育成を目標としたイベントである。1年生の6月下旬に設定し、これから本格化する課題探究学習の最初の一步となるように内容も工夫している。

留学生を40人ほど招き、留学生1名に対し生徒7名ほどのグループを作り、英語でSDGsを題材としたワークショップを2日間行っていく。GCキャンプの前後でアンケートや振り返りを実施することで、生徒の変容を可視化し、それを自分自身で自覚させるよう工夫している。

今年度のイベントは一般社団法人グローバル教育推進プロジェクトの協力で実施しており、留学生の募集や運営進行のファシリテーターをお願いしている。それにより、教員の負担軽減と新しい学びを得ることが可能となっている。教員向けの事前研修も充実しており、教員、生徒ともに学びの深まるイベントとなっている。

1年生「ESD day」



10月中旬、関東学院大学金沢八景キャンパスにおいて実施するイベントである。学長小山巖也先生による基調講演のあと、同大学の先生方による分科会に参加する。大学での学び、それがSDGsに深くつながっていることを学ぶ。生徒は、実際に大学のキャンパスでオープンキャンパスでない普段の大学の姿を体験することができ、またすばらしい施設での実験等を体験することができる。今年度は、20の分科会があり、「乃木坂46と日本の貧困～どうしたら貧困がなくなる?」「環境に優しいめっき技術を目指して～ファインパブルの活用」等幅広い内容であった。また、大学の先生方からは、このイベントを通して高校生からの刺激が新しいSDGsとの関わりを発見につながると評価をいただいている。

1・2年生「プレミアムプログラムⅡ」

12月中旬、横浜市内のSDGsに関わる企業を招き（令和5年度は30社）、分科会を通して、企業の取組を学ぶイベントである。本校はユネスコスクールであり、SDGsを軸に多くの企業とつながることができている強みを発揮したイベントである。企業からも、高校生と意見交換をしたり、SDGsに取り組む他社と情報交換をしたりすることのできるイベントとして好評である。



2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働 により引き出すことができた価値

本校は2018年7月にユネスコスクール認証を獲得し、その前からESD推進校として様々な取組を行ってきた。その際大切にしていたことは、生徒に本物の体験をさせることである。それを本校では「知識のシャワー」とよび、多くの外部機関とつながっている。

(1) 大学

関東学院大学における「ESD day」のほかにも「プレミアムプログラムⅠ」という高大連携のイベントも行っている。今年度は20の大学に参加していただいた。

(2) 近隣の商店街、NPO、地域ケアプラザ

高校は、地元から通学している生徒ばかりではなく、なかなか近隣との交流が難しい面もあるが、東高校では、ボランティアという形でそれを実現している。



鶴見銀座商店街とは、毎月の商店街のイベントに生徒を運営スタッフとして参加させている。またサステイナブル研究部が

フードドライブの活動を継続的にしている。

NPO法人つるみままづとは、ESD委員会がつながっており、ウェルカムベビープロジェクトの取組のボランティアを行っている。

馬場地域ケアプラザとも多くのボランティアでつながっている。学んでご飯やスマホ講座のサポート等、今では東高生がいないとイベントが成り立たないと言っていただけである。

(3) 横浜市の多くの企業

12月に実施するプレミアムプログラムⅡには、毎年30社前後の企業にご参加いただいている。企業側にとっても、このイベントをきっかけにつながりができたり、生徒用の分科会を他企業の方が受講したりと企業の新しい取組につながると好評である。

(4) SDGsに取り組む教育団体

今年のGCキャンプを実施してくださった一般社団法人グローバル教育推進プロジェクトとは、生徒だけでなく教員も多くの学びをいただいている。メディア総合研究所福田訓久氏には、生徒個々の探究活動を深めるワークショップを行っていただいている。福田氏には、1月のユネスコスクール講演会においても「学びの意義」というワークショップを1、2年生全員に実施していただく。

3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

ESD推進校やユネスコスクールの認証を受けて6年がたち、問題点はかなり整理できている。その上で、特に今年度は、現在行っているイベントと日々の探究学習が効率よくつながり、互いに相乗効果が生まれるような仕組み作りを努力した。高校は今年の4月から全校生徒にクロームブックが配付されたので、それを使って調べ学習をしたり、プレゼンテーションをしたり、有効に活用することもできている。

また教員の負担軽減も考え、イベントの開催時期を移動させた。それにより、新しい効果が生まれ、教員の負担軽減だけでなく、イベントの価値も増やすことができた。来年度さらに良くしていけるよう継続的に検討していく。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むこと によって引き出すことができた価値

「東高校はユネスコスクールである」という価値

学校の中でいろいろなことを相談する際、「ユネスコスクールである」ということが軸となることが多い。それにより、現在の様々な取組が、矛盾なく、一つの筋を通したものととなっている。東高校は今年度創立60周年を迎えることができたが、今までの歴史に新しい価値を加え、さらに発展していきたいと考える。

生徒においても、ユネスコスクールにおける様々な取組や活動を目指して入学する生徒も増えてきた。また、進路においても、高校3年間の取組を軸に進路決定をする生徒や実際に総合型選抜入試において、自身の探究活動を用いる生徒も増えてきた。探究活動のレベルがさらに上がるよう努力していきたい。

横浜市立みなとみらい本町小学校

学校教育目標「**「みな」と「みらい」を創る子**」

ESDを通して育成したい資質・能力

「**多様性を認められる**」「**多面的・多角的に物事を捉える**」「**問いを見い出して学び続ける**」

「**まちに愛着をもつ**」「**豊かな心をもつ**」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) は連携・協働のパートナー



6年生 「総合・国際交流」

「**モンゴルの小学校と交流し、SDGsを深めよう**」

世界を笑顔にする歌を作りたいという思いをもち、5年生の頃よりCYO(シティーネット横浜)による協力のもと、モンゴルのウランバートル小学校と交流を進めてきた。2年目となる今年度は、互いの学校で行っている身近なSDGs達成のための取組を情報交換したり、出来上がった歌を披露したりして感想をもらった。3回の交流を進めていく中で、日本の課題とモンゴルの課題は違うことに気付いたり、課題は違っても目的は同じであることに気付いたりすることができた。そんな中、もう一度自分たちの足元を見つめ直し、これから自分が意識していきたいことを互いに話し合うことができた。世界に目を向けることで、多面的に物事を捉えたり、多様性を感じたりすることができた。

学習室(特別支援教室) 「生活単元・総合」

「**メガもりレモンサイダー**」

もっと地域の人と関わりたいという思いをもって、よこはま観光資源開発のがんばレモンプロジェクトに参加し、1年半レモンの木を育ててきた。クラスで考えたオリジナルレモンサイダーを様々な場所で販売してきた。近隣のスーパーや大学、市庁舎での販売と発表を通して、相手意識を高め、互いに認め合いながら一つの目的に向かって活動を進めていくことができた。また、「リユース瓶とは何か、リユース瓶の良さ」について広め、リユース瓶回収の呼びかけもしてきた。呼びかけを聞き、クラスに空き瓶をもってきてくれた友達や保護者の方々が出た。子どもたちは、自分たちの想いが他の人の意識を少し変えることができたということに喜びを感じていた。

1年生 「生活科」

「**ねんちょうさんとなかよし**」

高島中央公園での出会いをきっかけにして、地域の保育園の年長児と交流を重ねた。初めての交流では、自己紹介や簡単な遊びをした。自己紹介では、名札作りを一緒に作り、知っている字を伝え合ったり、教え合ったりする姿が見られた。遊びでは、年長児と1年生が互いに楽しめるように、簡易なルールを工夫して考えることができた。

2回目以降の交流では、入学する前の年長児の「不安」を「安心」に変えるため、小学校のことを紹介する「なかよし作戦」を繰り返し行った。年長児との交流計画を考え、繰り返し活動することで、1年生の子ども達に、相手意識をもって人と接する力(多様性を認められる力)が少しずつ身に付いてきた。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働
により引き出すことができた価値

モンゴル交流

モンゴルとの交流を通して、大きな価値を引き出したことは、実際に交流を行うことで、実際のモンゴルの様子や、モンゴルの子どもたちの考えが理解できたことである。交流前にインターネット等を活用してモンゴルのことについて事前に調べたが、調べただけでは見えてこないものが多く見られた。日本では海のゴミ問題やマイクロプラスチック問題が深刻化しているが、モンゴルでは、森林におけるゴミの問題や家畜がそれを食べてしまう問題などを知った。それぞれ環境が全く違う中で、違う課題をもちつつも、目指すゴールは同じであることに気付くことができた。

何度も交流を繰り返すことで、次に向けたフィードバックを行った。その中から子どもの発言や記述を捉え、そのよさを価値付けしていった。また、SDGsログとして、一人ひとりが交流を重ねるたびに感じたことをログとして残し、自分の考え方がどのように変わっていったかも捉えられるようにした。

3 ESDの価値を引き出すために
試行錯誤したこと

ロイロノートを利用したSDGsログ

自分、生きるってどんなことだろうという問いに最初は答えが見つからなかったけど真剣に考えて自分なりの答えを出せたことが良かった。モンゴルは、生きるとはどのようなことなのか、またゴミ問題についてはどのように考えているのかを知りたい。

モンゴルと交流した時に、クラブについてや委員会についてなど国ごとに違う学校の仕組みを伝えることができて、視野が広がったと思う。モンゴルの発表であった録日記は一つ一つSDGsとの関連性があり、日常でもSDGsを考える機会があると思うことができた。こっから紹介するときに、モンゴルに事業を紹介するために海を見に行ったことは良かったと思う。また、そこで見に行った時に私的にゴミがあらさまにあつてびっくりした。このことをモンゴルに伝えて、モンゴルの方でも考えてもらえるといいと思う。そんな感じで地球全体のことを色々な国の全ての人たちで考えていけたらいいかなと思った。

17番 モンゴル交流でモンゴルの知らないことを教えてもらいさらに関心が深まったから、SDGsを知らない人たちにSDGsのことを教えてSDGsを広げていきたい。

5番 日本ではジェンダーがまだ広まっていないけど、モンゴルはもうかなり進んでいるから、日本にも広げていきたい。だから、日本から女子から男子だからという差別をしないようにしていきたい。

13番 13番は世界共通の課題だから、世界みんなを取り組んでいかなければいけないから、私も少しの力だけけど節電や、節水、環境に良いものを選ぶなどの工夫をしていきたい。

交流の難しさは、オンライン上になってしまいがち、なかなかつながらず回数を増やせないことや、一緒にGOALを目指す協働学習にもっていくことが難しいことである。そんな中、シティーネット横浜の協力のもと、2年間を通して5回の交流を行うことができ、子どもたちの学びにも深まりが見えた。価値を引き出すために有効なのは振り返りの行い方とそれに対する価値付けであると考えられる。価値付けも、教師や担任が行うだけでなく、校長や外部の方を巻き込んで行っていくことが有効である。さらに、様々な場で自分たちの活動を発表することで、活動のよさに気づき、自信をもって次の活動に取り組むことができると考える。今後は、グローバルな視点を持ちつつも、身近な生活でどのようなことができるか具体的なアクションを考えていきたい。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことにより引き出すことができた価値
ロジックモデルを活用したビジョンの共有と
クラスロジックの活用

開校当初からESDを通して目指す子どもの姿を明確にしている。そのためどのような活動を行うことができるかを教員全体で研究している。今年度はそのために学級でどのようなことができるかを考えてきた。1の資質能力の具体にもあるように低学年は園児、中学年(個別支援学級)でまち、高学年で世界と一つひとつ学年が進むにつれ、ESDの取組や考え方が変化してきている。持続可能な社会の担い手を育成するためにも学校としてのESDに対する視点、価値観を共通理解し、子どもの指導にあたるのが大切であると考えられる。

横浜市立三保小学校
学校教育目標「進んで学び 高め合う子」

ESDを通して育成したい資質・能力 【ESDテーマ】 ④ らいをつくる ⑤ んきのまなび
<持続可能な社会づくりを担う力>
○興味・関心を広げ、主体的に学び続ける力。(②未来) ○他者を思いやる心を持ち、自他を大切に
する態度。(1多様性の尊重) ○社会の一員として、自分の役割をこなして果たす態度。(⑦参加)

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) は連携・協働のパートナー



5年生 「総合的な学習の時間」

「No more 食品ロス!!」

本実践では、身近な食品ロスの問題についての現状や要因を調べ、解決に向けた取り組みとしてフードバンクという活動があることを知った。また、実際に、フードバンクかながわの事務局長の方のお話を聞いたり、学校給食による食品ロスの量の多さを知ったりしたことから、給食プロジェクト、フードバンクプロジェクトの2つを立ち上げて取り組んだ。活動を通して、身近なことから自分たちができることを考えたり、自らの生活を振り返ったりする姿が見られた。



2年生 「生活科」

「竹とあそぼう」

毎年2年生では、地域にある「新治市民の森」の中にある竹を使った活動を、新治市民の森愛護会の協力のもと行っている。まず、遠足として「竹の切り出し体験」、後日「竹ぼっくり・竹でっぽう」に仕上げ遊んでいる。限りある資源を活用しようとしたり、愛護会の方や友達とかかわる中で、自分の思いを伝えたりする力の高まりを目指した。



個別支援学級 「総合的な学習の時間」

「もっと学校たんけん」

本実践では、昨年度のお店屋さん体験をした経験を生かして、小中交流日に他校の先生方にホットケーキをふるまい、その売上金を使って放課後のお楽しみ会を企画・運営した。見通しをもって自分の明確な役割に取り組んだことで、一人ひとりが自信をもち、次はこれをしてほしいという子どもたち自身の思いを多く引き出すことができた。



2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働
により引き出すことができた価値

- (1) 5年生の実践では、プロの方のお話を聞いたことで、児童が食品ロスの問題についてより切実感をもって取り組み、全校にフードバンクについて発信する際にも方法や内容について話し合いながら吟味していた。これは、物事を批判的に考える姿と捉えられる。また、実際に校内テレビ放送で説明をした際には、「食品ロスを減らすためには、一人ひとりの行動が大切です。」と熱く訴える子どもたちの姿が見られた。連携・協働したことにより、児童がより自分事として捉えて行動できた。
- (2) 2年生の実践では、実際に生えている竹林を見てから自分達の手で竹を切り分けることで、限りある資源であることを実感し、資源を有効活用していきたいという思いを育てることができた。また、活動中での愛護会の方とかかわりや、1年生に「竹ぼっくり・竹でっぽう」を紹介し、遊び方を伝えようとする中で、自分からコミュニケーションをとろうとする力の高まりが見られた。
- (3) 個別支援学級の実践では、他校の先生方を店員としてもてなすという経験を通して、一人ひとりが自分の役割を全うし、結果喜んでもらえたという達成感を得た。その成功体験から、その後の話し合い等の活動にも主体的に活動に取り組む姿が見られた。

3 ESDの価値を引き出すために
試行錯誤したこと

(1) 本校の重点研究について

本校は、地域の豊かな自然を活用しながら「持続可能な開発のための教育」(ESD)を推進しカリキュラム開発と授業実践を進めてきた。持続可能な社会づくりを担う児童の育成を目指し、環境やキャリアなどの教育課題をクロスカリキュラムにより整理し、全教科等において授業実践を進めてきた。

今年度は、1・2年生は国語科、3年生以

上は総合的な学習の時間で研究を進め、年間2本の研究授業実践を各学年で行っている。1・2年生で培った表現する力を土台として、総合的な学習を通して、進んでまちと関わりながら、目的を意識して様々な表現方法を活用する力(中学年)、様々な表現方法から目的や意図に応じて効果的な方法を選択して表現しようとする力(高学年)の向上を目指している。

(2) ESDを通して育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点化

昨年度に引き続き、ESDを通して育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」を学年別に重点化を図り、1年間を通しての変容を探っている。

学年	構成概念	能力・態度
1年生	I 多様性 多様性を尊重する態度	①(参加) 進んで参加する態度
2年生	II 持続性 ものを大切に作る態度	②(伝達) コミュニケーションを行う力
3年生	V 連携性 互いに連携し協力する態度	③(協力) 他者と協力する態度 ④(伝達) つなぐ(伝達)する態度
4年生	II 持続性 つながりやかわりかわりを大切に作る態度	③(多面) 多面的、総合的に考える力
5年生	III 責任性 責任と義務を自覚し、自ら進んで行動する態度	⑤(批判) 批判的に考える力
6年生	IV 公平性 公正・公平に振る舞う態度	⑥(未来) 未来像を予測して計画を立てる力

▲「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことにより引き出すことができた価値

どの学年でも「まち」の人・もの・こととかかわりを大切にし、繰り返し三保の自然やまちの人と関わることで、まちを知り、愛着をもつ児童が増えている。

校内には、各学年や委員会でのESDの取り組みを生かした掲示が多くあり、日々SDGsを意識しながら自分たちの生活にいかそうとしている姿が見られる。

今後も、指導方法の一層の工夫や改善を図るとともに、「ESDの指導と評価」についてさらに研究を深めていきたい。



▲昨年度の6年生制作「三保小学校版SDG ロッカー」

横浜市立羽沢小学校

学校教育目標「笑顔いっぱい すこやかいっぱい 大好きはざわの人とまち」

ESDを通して育成したい資質・能力

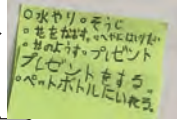
「自ら課題を見つけ主体的に最後まで取り組む力」「コミュニケーションを行う力」

「他者と協働する力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体 **は連携・協働のパートナー**

【2年生の実践から】

水やりが大変なんだって！

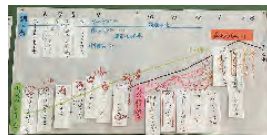


なかよし大作戦！喜んでもらいたいな。

「お礼だよ」ってお花をもらっちゃった！



【3年生の実践から】



羽沢のキャベツの甘味やシャキシャキ感、新鮮さを知ってもらいたいな。農家の方のすごさも広めたいな。



2年生 「生活科」 「もっともっとまちたんけん」

「まちに住む人たちや、そこで働く人たち」と繰り返し関わることで、児童のまちへの関心が高まった。普段の生活から、「まちの人とあいさつができたよ！」「地域のお祭りで〇〇さんに会ったよ！」と地域とのつながりを意識する児童が増えていった。また、地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、「相手のことを想像したり、伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。」ということを目指した。

3年生 「総合的な学習の時間」 「広めるぞ！羽沢のじまん おいしいキャベツ」

児童は「多くの人に羽沢のキャベツの味や農家の方の努力や工夫を広めたい」という思いをもち学習を進めた。繰り返し地域の農家・料理専門家・教員・保護者と関わり体験をすることで、主体性が高まった。児童は、自分たちの活動が地域活性化につながる価値のあることに気づき、「自信がついた」と実感した様子が振り返りに表れていた。また、自分たちがしたいことを叶えるだけでなく限られた時間や育てたキャベツの数を考えながら計画しようとする姿も見られた。

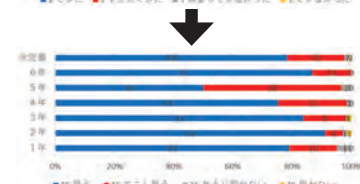
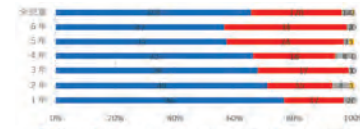
6年生 「総合的な学習の時間」 「大好きな羽沢のまちをPRしよう」

児童は、「地域の方のまちの良さを伝えることで愛着をもってほしい」という思いをもち、活動をしてきた。「はざわのまち」の捉えとして、それぞれが魅力だとしていたのが実は、『人』でつながっていることに気付くことができた。また、農業を営む方の話から今の自分だけでなく、将来仕事についた時も『人』のつながりが大切だと気付く児童もいた。人から話を聞くことや人と関わることの重要性を感じることができたのではないかと考える。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 粘り強く行動する子の育成

「むずかしい課題にもいろいろ試したり、工夫したりしてあきらめずに取り組もうとしましたか。」の項目で、夏休み明け（9月）と冬休み前（12月）に実施したものを比較した。問いに対し、「できた」「すこしできた」と肯定的に捉えている割合はほとんどの学年で増加しており、高い数値を示している。



（「はざわの時間」学習アンケート 対象 全校児童）

(2) 自己肯定感を高め主体的に行動する子の育成

本校の児童はどの学年も肯定的な意見の割合が9割以上と非常に多い（アンケート項目「地域の方々と一緒に学習することは、自分たちの学習を高めたり、地域のために役立ったりすると思いますか。」）。大人に見守られていることを実感したり、プロから評価されたりすることが嬉しい気持ちや充実した学びにつながってきている。3年生の実践「広めるぞ！羽沢のじまん おいしいキャベツ」では、プロと関わることで自信をつけたり、次にやりたいことを自ら生み出したりする様子が見られた。以下の振り返りは、繰り返し関わってきた農家の方や神奈川区長に調理したものを試食してもらい感想をもとに次の活動に繋げようとした時のものである。

区長の日比野さんや内田さんが「風味がある」とか色々なおいしさのことを言っていて自信ができました。（M・Rさん）

ぼくはキャベツがきらいだけどとてもおいしかったです。…羽沢地区のキャベツを使っているのがいいと内田さんが言っていました。…ぼくは羽沢の地産地消がすごいと思いました。…今度サラダを作るときにこの間よりキャベツの味がぐらいい強くてよりおいしくしたいです。…内田さんにもう一回アドバイスしてもらいたいです。…校長先生や源保苑の森山さんと調理員の牧山さんに食べてもらいたいです。（A・Hさん）

3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

本校では、総合的な学習の時間を核とした「横浜の時間」の呼称を「はざわの時間」とし、重点研究として研究を行っている。児童は身近な人や事象に触れ、課題に対して自分の事として考えることで、切実感をもった本気の学びが生まれる。課題へ取り組む過程で意欲を持続し、あきらめずにやり遂げようとすることができると考えている。さらに、令和7年度から菅田中学校ブロックで新教科を始めるにあたり「自分の力でよりよい生き方を切り拓いていく子どもを育てる」ために、「非認知能力」に着目した。例えば「忍耐力」「思いやり」「自尊心」「知的好奇心」などは、テストでは図りにくく数値で示すことは難しいものの、自分と向き合い、他者と関わりながら前向きに生きていくことに強く影響するものであり、上記の子ども像を目指すために必要と考える。ESDの理念を生かした新教科を構想することで、双方を一体的に捉えて、より確かな資質・能力を育てていくことを目指している。

4 学校全体（ホールスクール）でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

職員全体で児童の教育活動を支援する意識ができた。担任だけでなく技術員や調理員、司書などが連携して学校全体を見守っている。児童の様子や職場環境について共有する機会「ここにはざわの会」を年に3回開催した。レクを取り入れて、職員のつながりも大事にした。

横浜市立恩田小学校

学校教育目標「自ら学び ともに豊かな生活を創り出す子どもの育成」

ESDを通して育成したい資質・能力

【知識及び技能】Ⅰ多様性 Ⅱ相互性 Ⅴ連携性

【思考力、判断力、表現力等】①批判的に思考し、判断する力 ③多面的・総合的に考える力

④コミュニケーションを行う力

【学びに向かう力、人間性等】⑤他者と協力する態度 ⑥つながりを尊重する力

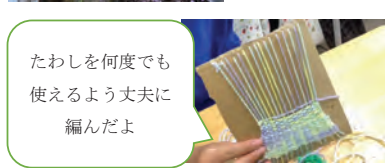
1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体



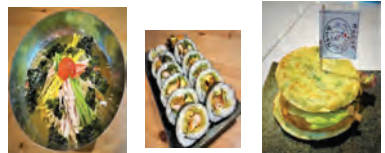
来店してくれたお客様にたくさん見てほしいな



色や香り、形にこだわってパスボムを作ったよ



たわしを何度でも使えるよう丈夫に編んだよ



6年生 「総合的な学習の時間」

「みんなの笑顔をクリエイト大作戦」

6年生では、**クリエイトSD桂台店**と連携して、「恩田のまちに住む人が笑顔にしたい」という目標をもって活動に取り組んだ。クリエイトSDには子ども達が作ったオリジナルパネル、ポップ、ポスター、塗り絵を掲示した。恩田小とクリエイトがコラボした掲示物を見て、たくさんの方が喜んでくれた。

活動をしていく中で、自分たちが作ったものをプレゼントしてみんなを笑顔にしたいという想いが強くなった。そこでお風呂で使用できる「バスボム」と、アクリル毛糸から作成できる「アクリルたわし」を自分たちで作成した。初めのうちはバスボムの形が上手にできなかったり、アクリルたわしの糸がほつれてしまったりと苦労した。友達と協力して試行錯誤を繰り返し、よりよいものに改良することができるよう努めた。クリエイトに来たお客さんに、バスボムやアクリルたわしを渡したとき、たくさん笑顔を見ることで、子ども達は大きな達成感を得た。使用してくれた人にGoogleフォームでアンケートを取り、良かった点や悪かった点を教えていただくことで更なる改善を見出すことができた。

5年生 「総合的な学習の時間」

「あいりん新メニュー開発プロジェクト」

5年生では、地域の飲食店（韓国料理パリュウダイニングあいりん青葉台店）とコラボレーションをして活動することで、「地域に笑顔を増やそう、幸せを増やそう」という目標を立てて、単元を構想した。

材の決定に向けて、「地域と関わり、みんなが笑顔になれるようなもの」というテーマを設定した。材を決定する際には、児童から「今年は、飲食店とのコラボがしたい。」と全会一致で、飲食店との活動を進めていくことに決まった。

活動初期の頃から、児童は夢中になって取り組んでいた。韓国料理について調べたり、子どもから大人までに喜ばれるメニューを考えたりした。保護者の協力や友達同士で試作をしてみたり、店長さんからのアドバイスをいただいたりする中で、多くの人の支えのおかげで学びを深めることができた。「自分たちがやりたいことをやるだけでなく、相手に喜んでもらうことが大切なんだな。」「力を合わせて、関わるすべての人が幸せな気持ちになるような活動にしよう。」このように前向きに取り組んだことでメニュー作りもチラシ作りも販促活動でも児童の主体的に取り組む姿が見られた。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働

により、引き出すことができた価値

- (1) 今年度、学校の外部の企業や団体と連携して総合的な学習に取り組んだクラスは全クラスの8割で、いずれも他者と協働することで自己満足ではなく、相手意識をもった活動を行うことができた。
- (2) 外部の企業や団体との連携を通して、児童が主体的に活動できたこと、積極的に地域に目を向け活動したことはとても大きな収穫となった。
- (3) 毎時間の振り返りや発言からも、児童にとって外部との連携は魅力的な活動となっていた。

3 ESDの価値を引き出すために

試行錯誤したこと

○ESDの構成概念と視点を取り入れた重点研究

本校では昨年度と同様に「生活科」「総合的な学習の時間」「算数科」を重点研究の教科とし、評価規準にESDの構成概念と視点を取り入れて研究を進めている。生活科・横浜の時間では、問題解決学習中心となり、その学習活動の中でESDの視点を取り入れやすく、その視点を明確なものとして研究を進めることができた。算数では思考・判断・表現の観点でESDの視点を取り入れた。特に問題の練り上げの際に、①批判的に考える力や③多面的・総合的に考える力を見取る単元構想が多かった。しかし、ESDの視点を意識しすぎてしまい、算数科として児童に身に付けてほしい力をつけさせることが疎かになってしまうという懸念もあった。これを受けて、ESDの視点の受け止め方・解釈の仕方を教職員でしっかりと行う必要性があり、指導案検討や事後研究会の際にはESDの視点をどのように盛り込んでいけるかを話題に挙げていくように努めた。研究を進めていく中で、先にESDの視点を意識して単元構成を考えるよりも、単元構成を考え後に、ESDとつながる部分を見つけていくほうが自然な流れで取り組むことができた。

4 学校全体でESDを取り組むことによって

引き出すことができた価値

○児童アンケートによる価値の見取り

本校がESDの視点をもった学び作りを始め、今年度で7年目に入る。また、昨年に引き続き今年度も、児童の委員会活動をSDGs17の目標とつなげて展開してきた。

そういった活動を進めてきたことで児童の中でどのような変化があったのかを探るため、「SDGs17の目標につながる活動についてのアンケート」を全校児童にロイロノートを活用して実施した。

- ①: SDGs17の目標について知っていますか？
3年生以上の児童の多くが理解しており、高学年ではほぼ全ての児童が理解していた。
- ②: SDGsを知って自分の気持ちや行動に変化はありましたか？
電気をできるだけ使用しない、節水を意識する、食べ残しを減らす、ゴミの分別をする、もう一度使えるものを見直す、エコバッグを使用する等、前年度よりも多くの児童が、SDGsを達成するための行動を考えていることができていた。
- ③: 授業で、SDGsに関係する学習をしたことがありますか。→あります。
5年生で出前授業として、講師の方に来ていただいて、「未来カルテワークショップ」を開催した。
- ④: それはどんな授業でしたか。
ワークショップ形式で日本の将来についてみんなで考える学習だった。以下内容
・急激な人口減少、少子化
・異次元の高齢化の進展
・都市間競争の激化などグローバル化の進展
・巨大災害の切迫、インフラの老朽化
・食、水、エネルギーの制約、地球環境問題
・ICTの劇的な進展など技術革新の進展
・ポストコロナの新しい生活様式
- ⑤: その学習でうれしかったことや楽しかったこと、できるようになったことは何ですか。
○自分が住んでいる町にもSDGs達成のために解決しなければならない社会課題があることを知れて嬉しかった。
○住んでいるこの町の未来にとっても興味をもち、よりよくしていきたいと感じた。

横浜市立荏田西小学校

学校教育目標「心豊かにかかわり、互いに高め合いながら学び続ける子に育てます」

ESDを通して育成したい資質・能力

「知」課題解決能力 「徳」認める心の育成 「開」視野を広げ考えを深める

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体 は連携・協働のパートナー



公園で土木事務所と愛護会の看板を見つけたよ。公園とどんなかわりがあるのかな？



お菓子のゴミが多いよ。持ち帰らないといけないよね。小さい子が遊ぶときに、木の枝が落ちてると危ないね。



土木事務所の人たちが公園を作っていることを知らなかったよ。



折り紙の折り方には、色々な意味があるんだね。



贈る相手の喜ぶ姿を想像しながら折ることが大切なんだね。自分も嬉しい気持ちになったよ。

2年生 「生活科」

「こうえん大好き！こうえんたんけんたい！」

身近な公園の四季の変化を追うために公園探検を繰り返す行中、子どもたちは公園にある看板に目を向けた。「公園愛護会で花を育てています。大切に見守ってね！」という看板を見て「公園愛護会ってなんだろう？」「看板の周りには、パンジーやピオラなどの花がきれいに咲いているよ。」と興味を高めたため、愛護会の方と繋がりをもった。春には、花植えやゴミ拾いを一緒にいき、冬は、樹木プレートの作成と取り付けを行った。愛護会の方々と交流を通して、自分たちがいつも使っている公園が安全できれいに保たれているのは、愛護会の方々のおかげだと知ることができた。

また、土木事務所と書かれている看板も複数見つけた。他の公園にも看板があることに気付くと、「土木事務所は何をしているところなのだろう？」「愛護会と関係があるのかな？」と疑問が浮かんだため、土木事務所の方をお願いして話を聞くことにした。自分たちが使っている公園の立ち上げに関わっていることを知り、徐々に公園が作られていく様子を写真で見るときは、大変驚いていた。公園完成後は、愛護会の方と一緒に公園の管理や整備をしていると教えてもらった。

愛護会と土木事務所との交流を通して、「公園を大切にしたい」「きれいな公園を保ちたい」という公共心と、「自分たちが知ったことを学校みんなに伝えたい」という次の活動に繋がる意欲が芽生えた。

3年生 「総合的な学習の時間」


「ナイスな折り紙で、サンキューをとどけよう！～ぼくたちでつくる安心のまち～」

休み時間に折り紙に夢中になる中で、「折り紙って、実はいろいろな所に飾られているよね。」と「見ている人を楽しませたり、喜ばせたりする力があるんだね。」という子どもたちからの気付きがあった。クラス全体で話題を取り上げると、自分たちが得意な折り紙で、学校みんなやまちの人々に日頃の感謝の気持ちを伝え、荏田西のまちを盛り上げたいという想いが出てきた。プロが紹介している折り紙の本や動画で研究していくうちに、実際に折り紙の先生に教えてもらいたいという思いが芽生えたため、地域の折り紙先生を学校に招いてお話を聞き、コツを伝授してもらったことにした。折り紙先生から学んだことを生かしながら、まずは身近な家族に折り紙とともに感謝を伝えた。「次は1年生にも伝えたい。折り紙で6年生の卒業をお祝いしたい。」という他学年との繋がりや、まち全体に広げていきたいという活動意欲が膨らんでいった。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働

により引き出すことができた価値

【6年生「総合」「もったいない（おいしいに!）」の実践から】

本校は特に野菜の残食が多い、という実態を踏まえ、「野菜入りスイーツ」を校内に提供し、野菜嫌いを減らしたい、と探究活動を行った。商品開発の中で、スイーツに入れる野菜の塩梅という課題と出会い、はまふうどコンシェルジュ 中尾真紀子氏を招いた。「野菜の本当の魅力とは」「色々な種類や味の野菜がある。簡単に好き嫌いを決めないで欲しい」など新しい視点をいくつか頂いた。

その結果、野菜の魅力を知るために農家を訪問しよう、となり、土EN FARMに協力を得て、生産者の話を聴き、採れたて野菜の試食を行った。「野菜は思った以上に甘かったこと」「たくさんの方の工夫や苦労があって食卓に届いていること」に改めて気づき、「単に残食の量を減らすのではなく野菜に興味をもってくれる人が増えることに意味がある」という思いのもと、野菜の風味を取り入れたスイーツ開発に取り組んだ。

今後、中尾氏の協力を得てマルシェで販売してもらおう。活動を通して、野菜嫌いだった児童も振り返りカードに食への感謝の気持ちを記載するようになり、小さな変容も見られた。

3 ESDの価値を引き出すために

試行錯誤したこと

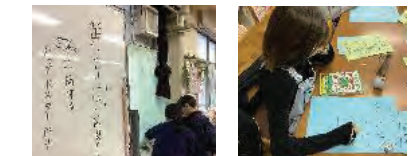
(1) ESDを意識した重点研究

本年度から、重点研究を「生活科」「総合的な学習の時間」とした。生活科は学年ごとに進め、総合は学級ごとに単元を立ち上げた。本校では、身に付けたい力として、特に「④コミュニケーションを行う力」の育成を目指している。共に課題にぶつかり、話し合いを重ねて解決策を模索する活動を増やすことで身につけさせたいと考えている。学級によっては、ぶつかっ

たり、うまくいかなかったりすることもあったが、重点研究を通して、部会ごとに教員同士が話し合い、授業や児童の課題を共有したり解決したりできた。また、高学年では互いに連携協力して社会が構築されているという「連携性」に気付くよう単元を構成した。地域の企業や各分野の専門家など、人との繋がりを通して、自分の生活を大切に思えるよう学習を進めた。それにより児童同士のコミュニケーションも活発になり、自己肯定感を高めた児童もいたと考えられる。

(2) SDGsを意識化できる学校図書館

図書館にSDGsに関する図書を紹介する特設コーナーを設けた。図書委員会の活動として、委員自らSDGsに関する本を探し、ポップやポスターを作成し掲示した。学校司書とも連携を図り、児童がSDGsを意識化できるように図書館の環境を整えている。



4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組む

むことによって引き出すことができた価値

本校は、クラスみんなで一つの活動を協力して進めることで、自分を認め、他者を認められる児童になってほしいと願い、重点研究を「生活科」「総合的な学習の時間」に決めた。今年度は1年目である。生活総合の時間では、児童が生き生きと輝く姿も見られ始めている。課題を見つけ、興味をもち、課題解決のために話し合ったり、調べたりするなどの活動は「生活科」や「総合的な学習の時間」の醍醐味といえるだろう。引き続き、ESDで身に付けたい力「④コミュニケーションを行う力」を発揮し、学校教育目標の「心豊かにかかわり、互いに高め合いながら学び続ける子」に育てていきたい。来年度は2年目となる。今年度の児童の姿や変容を見取り、持続可能な重点研究を進めていきたい。

横浜市立大門小学校

学校教育目標「**大門大好き いい仲間 進んで学ぼう 元気な子**」

ESDを通して育成したい資質・能力

「**地域の人と関わりながら、自ら課題解決をめざす力**」

「**世の中の難しい課題と真剣に向き合い、自分たちでできることを実行していく力**」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) は連携・協働のパートナー

① 50周年電子記念誌作成



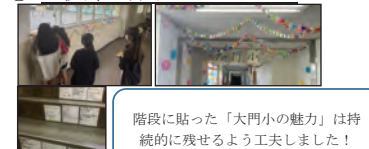
大門の魅力/各クラスの生活科・総合の様子/未来の大門小の子どもたちへ一言などのページを作りました!

② 50周年式典



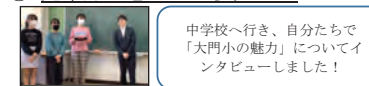
6年生が「つながり」を意識して式典を企画・運営しました!

③ 全校飾り付けプロジェクト



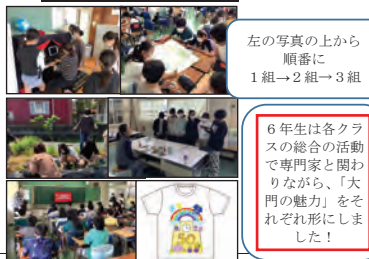
階段に貼った「大門小の魅力」は持続的に残せるよう工夫しました!

④ 先輩方の思いを全校児童へ



中学校へ行き、自分たちで「大門小の魅力」についてインタビューしました!

⑤ 50周年記念品づくり



左の写真の上から順番に
1組→2組→3組

6年生は各クラスの総合の活動で専門家と関わりながら、「大門小の魅力」をそれぞれ形にしました!

＜大門小学校創立50周年記念

SMILE 大門小 未来にはばたけプロジェクト

未来へつなげる大門小のよさ～学校と地域のつながり～

「SDGsの視点と周年行事を合わせた取り組み」

今年度、大門小学校は50周年を迎えた。同時に、今の6年生が1年生の時からESD推進校として取り組んできた。6年生は、毎年SDGsの視点を意識して生活科や総合的な学習の時間の学習に取り組んだことで、持続することの大切さに気付けた。それと同時に、地域の人とつながることで、地域への思いに気付いたり、専門家とつながることで、世の中の難しい課題と真剣に向き合い、自分たちでできることを実行していきなりする力が特に高まった。そんな6年生が以下の「50周年記念プロジェクト」を企画運営し、50周年行事を大いに盛り上げた。この活動は、SDGsの視点を意識し、生活科・総合的な学習の時間を中心に取り組んだ。

6年生 「50周年記念プロジェクト」

① 50周年電子記念誌作成

→地域の良さや大門の魅力を取材しながら電子記念誌に児童手作りですとまとめた。

② 50周年式典

→今までお世話になった方や地域の方を招待し、大門の魅力映像で紹介したり、お祝いを言葉で表現したりしながら、全校で50周年をお祝した。

③ 全校飾り付けプロジェクト

→6年生が50周年を祝うために校内を装飾した。「持続的な装飾」を意識しながら、全校に協力をお願いした

④ 先輩方の思いを全校児童へ

→6年生が大門小の卒業生にインタビューに行き、情報を収集し、整理して映像としてまとめて全校児童に伝えた。

⑤ 50周年記念品づくり

→6年生が総合的な学習の時間で、専門家と関わりながら、50周年として大門小に残せる記念品を作った。

- 1組: 50周年記念ソングづくり (音楽家)
- 2組: 大門の畑で取れた野菜を活かした、新メニュー開発 (レストランのシェフ)
- 3組: 50周年記念Tシャツづくり (株式会社グラニフ)

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働

により引き出すことができた価値

(1) 本気の学び

本気の学びを引き出すために、今年度、6年生は3クラスとも「総合的な学習の時間」の活動の中で専門家との関わりを大事にしてきた。音楽家の方の歌詞にかける思い。レストランのシェフの素材を大切に思い。デザインTシャツクリエイターの「デザインを通して人と人をつなげたい」という思い。どの活動も、専門家の思いが子どもの本気の学びにつながったと考えられる。

6年3組のTシャツづくりの実践を例に考えてみる。「大門の魅力を手にとって残したい!」という思いから、「地域と大門小の魅力が伝わるオリジナルデザインTシャツ」づくりに励むことになった。大門の魅力を集めたり、集めた情報を整理分析したりする中で、専門家の方のアドバイスの必要性に気付いた。本単元で連携した専門家「株式会社グラニフ」は、グラフィックを通して新しい絆やコミュニケーションを創り出し、より良いカルチャーや習慣を創り暮らしを彩っていくのに、力を入れている企業である。繰り返しデザインを製作していく中で、プロの方から次のような言葉をいただいた。

「小学生が考えたデザインとしては素晴らしい。でも、ここからはプロの目線でアドバイスするね。デザインを通して、一番伝えたいことが分りにくいなあ」

すると、次のような振り返りが生まれた。

＜児童①＞

今回のお話で、完成までの一通りの流れを聞いて、完成までの見通しが立ってきました。例を聞いて、自分も早くやりたいなどワクワクします。

グラニフさんが「何を伝えたいか」と言っていたのが大事だと感じました。私は、大門小が建て壊し?になってしまつたら、黄色い校舎を自立させたいと感じました。他にも、50周年のめでたい感じを表現したいと思いました。

＜児童②＞

グラニフさんの話を聞いて自分たちもまだまだ未熟だと痛感した

児童①に関しては「ワクワク」という言葉から次の活動の意欲の高まりが感じられる。これは専門家の言葉から自分たちの活動をメタ認知すると同時に、プロに近づきたいという思いに変容していることがわかる。

児童②に関しては、キャリアの視点の厳しさを学んでいることがわかる。このように、専門家と関わることで「本気の学び」が生まれて、よりよい活動につながった。

また、様々な方へインタビューを繰り返す中で、大門小に携わってくれた方々や地域の方が多様な価値観をもっていることにも気付けた。地域の方と関わることで、自分たちのまちや、大門小をずっと大切にしていることを実感することができた。さらに、何をもちも重要な魅力としてデザインに表しにいけるかを考えることを通して、複数の情報から目的にあったものを選ぶ思考力も高まった。

3 ESDの価値を引き出すために

試行錯誤したこと

(1) 校内研修と校内掲示

年度当初に教職員間で生活科、総合的な学習の時間の年間見直し確認するとともに、これまでのESD推進校としての取組の共通理解を図った。

校内ESD担当者を中心に、総合的な学習の時間と生活科の基本的な考え方について、全体研修を行った。また、大門小のこれまでのESD推進校としての取組を振り返り、学校全体で本年度の見直しを確認した。

また、校内に以下のような掲示を行い、過去の実践なども紹介しながら、ESDの価値を引き出した。

過去の生活科や総合的な学習の時間の取組の紹介推進校として活動が始まった6年前の取組から掲示



4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組む

むことによって引き出すことができた価値

(1) 周年行事とESD

今回、50周年行事をESDと結び付けて取り組んだことで、全校児童が地域の人や、大門小の卒業生、先生などの協力があって「今の大門小学校」があることに気づき、この先も「自慢のできる魅力あふれる大門小学校を継続したい」という思いに変わった。

また、学校と地域のつながりを視点を置きながら、学習経過を大門フェスティバルで発表する大切さに気付けた。50周年をみんなで祝うことで、学校に対する愛着を育むことができた。

さらに、6年生は、地域の人や、大門小の卒業生、先生、全校児童などに取材をしたり、それを全校児童に伝えたり、全校で50周年を祝う取組を考えたりする活動を通して、目的に応じた表現力や情報の整理分析能力を高めることができた。このようなことから、SDGs11の視点「住み続けられるまちづくり」の意識が特に高まったと考えられる。今後、大門小の特色である「ESD」の意識を高めていきたい。

横浜市立中和田中学校

学校教育目標「自ら学び、自他を大切にして、社会に貢献する生徒を育てます」

「自ら学び」(知)

「自他を大切にして」(徳)(体)

「社会に貢献する」(公)(関)

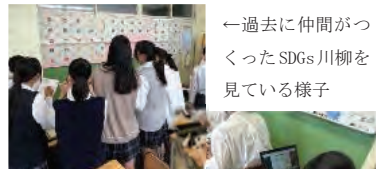
1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) は連携・協働のパートナー



けが予防のためのストレッチを行う様子



SDGs すごろくを行う様子とすごろくシート



←過去に仲間が作ったSDGs川柳を見ている様子

ロイロを活用して自分の考えをまとめる様子→



歩道のゴミ拾い活動を行うボランティア部

2学年 「総合的な学習の時間」
「横浜マリノスによる食育教室」

プロスポーツに関わるコーチの実演や食育の話に触れることで、健康と食事の関わりを理解し、自らの健康に対する意識を高めた。また、スポーツ時の栄養や水分補給の仕方、補食の取り方、試験時の食事の摂り方など、将来に向かっての食習慣づくりや食生活の改善につなげることができた。また、コーチとともに、けが予防のためのストレッチ体操を行った。

2学年 「特別活動」
「SDGs すごろくの実践」

NAGANO SDGs PROJECTのWEBサイトに掲載されるSDGs すごろくゲームを行った。「身近なSDGs」をテーマとして、17の目標ごとに出来事を書き込みながらすごろくゲームを制作した。自分たちで作る、楽しめるオリジナルのSDGs すごろくゲームとなった。「苦手な食べ物があつたが給食を残さず食べた。2マス進む」や「エコバッグを家に忘れてきてしまった。1マス戻る」など、自分たちが普段行っている活動が、SDGsに繋がっていることに気付く、地球規模の課題解決に向けて自分たちができることを考えたり関心を高めたりするきっかけとなった。

3学年 「社会科(公民)」

「SDGsを通して現代社会の課題を解決するために国民として何ができるのかを考える」

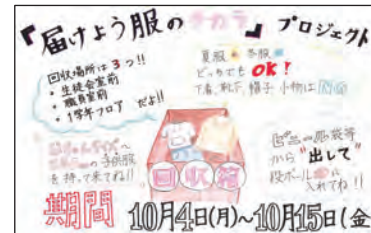
日本がSDGsの17の目標をどの程度達成できているかを考え、ニュースや文書をもとに現代社会の課題を考察し、2050年の日本が課題解決に向けてどのような取り組みをしていくべきなのかを考えた。これらについて、自分の考えをロイロノートにまとめ、クラスの仲間と共有したり、発表したりした。

全学年 「ボランティア部」
「道路清掃と募金活動」

泉土木事務所と連携し、ハマロードボランティアとして、学校から最寄りの駅(立場駅)や近隣の和泉第2公園までの歩道のゴミ拾いを行った。また、泉区社会福祉協議会と連携し、12月に泉区内にあるボランティア団体への助成金を集める募金活動を行った。いこいの家の運営費や宮の前テラスでの子ども食堂の補助費など様々な団体に利用されている。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 3年間に1度、ユニクロが主催する『届けよう、服のチカラプロジェクト』に参加している。ユニクロ社員から出張授業を受けたのち、子どもたちが主体となって、校内や地域で着なくなった子ども服を回収する。回収した服は、難民などの服を必要とする人々に届けられる。このような世界規模の活動には、校内で取り組むことは難しいため、企業との連携が不可欠だと感じた。誰もが知っている衣料品の企業であるため、生徒の関心も高く、近隣の小学校とも協力したため、1000着以上回収することができた。中心となって活動した生徒会本部役員の様子を見ると、企業や近隣小学校との連携という点、また多くの服が集まったという点から、社会への貢献度を大きく感じている印象であった。



(2) 横浜マリノスによる食育講座では、プロのスポーツに関わるコーチによる講演であったため、生徒の関心も高く、普段の生活と照らし合わせ、自分事として捉えながら参加することができた。実際に体を動かしてストレッチを行うことで、体を健康に保つための知識がついたり、スポーツをやっている生徒は、今後の自分の姿勢に生かしていきたいという意欲につながりやすかった。滅多にない機会ではあるが、どの分野においても「プロ」に教わる機会というのは、生徒の興味関心をひきつけるものであると感じた。

3 ESDの価値を引き出すために試行錯誤したこと

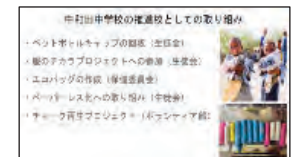
(1) SDGsへの貢献意識を高めるための活動
これまでの活動を振り返ると、ESD推進校として、エコバッグづくりや服のチカラプロジェクト、チョーク再生などさまざまな活動に挑戦してきた。これらの活動は、生徒の関心度も高く、高い成果が得られた。一方で、「SDGsへの貢献=何か特別なことをする」というイメージも学校全体に広がった。
そこで、「普段、当たり前に行っていることが、SDGsにつながっている」ということに気付くような取組を試みた。内容としては、SDGs すごろくを通して、『身近なSDGs』をテーマに、各目標に合った出来事を考える活動をした。ゲーム形式にすることで、前向きに取り組ませることができ、他の班がつくったシートでも遊ぶことで、さまざまな考え方に触れることもできた。目的でもあった「多くの生徒にSDGsを身近に感じさせる」という点でも効果を感じられた。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 「ペーパーレス」
令和4年度に学校全体の重点取組としてペーパーレスを進めたことをきっかけに、保護者向けのアンケートで二次元コードを活用したり、生徒会活動でも評議会や選挙公報をクロームブックで共有したりする活動が、今年度も継続できた。教職員、生徒ともに資料のデジタル化が進められている。

(2) 教職員メンターチームでのESD理解

これまでの中和田中学校の取組や今後の展望について共有することで、異動してきた教職員とも足並みが揃い、学校全体でESD推進を図ることができた。



横浜市立西本郷中学校

学校教育目標

「自ら挨拶・自ら判断・自ら行動、人とのつながりを大切に思いやりある西本中生」
ESDを通して育成したい資質・能力
「コミュニケーション力」「つながる力」「行動する力」「情報活用力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) 連携・協働のパートナー



1年 学校図書館を利用した情報収集

1年生「総合的な学習の時間」 「地域学習（防災）」

横浜市の防災について各班で家庭、地域、都市型災害など与えられた課題から問いをたて、テーマを決めて調べ学習を行った。学校図書館や新聞資料、インターネット資料を活用して情報収集し、その成果をまとめた。その後、地域防災拠点運営委員長を務める方から講演していただき、栄区の防災や地域防災拠点についての内容、中学生に取り組んでほしいことを聞き、自分ができることを探究した。



2年 1年生のフロアで聞き取り調査

2年生「総合的な学習の時間」 「会社経営体験プログラム」

沖縄のアンテナショップを栄区に作るというテーマに沿って、魅力を伝えるグッズを作製・販売する活動を通して、自分づくり（キャリア）教育を行った。

起業家講演会から、課題を解決する起業についての意識を高め、社長・宣伝・仕入れ・製造・販売・会計などの役割を体験した。顧客を1年生に想定し、休み時間に各班が1年生のフロアで聞き取り調査を主体的に実施したことは、自分の得意・不得意を改めて見つめなおす機会となった。

また、銀行員の方と連携して融資相談会の授業を実施した。生徒は、融資をお願いするために自分たちの考えや商品の良さを銀行員の方に理解してもらえるようにプレゼンを行った。普段の学校生活では体験できない活動を通して、コミュニケーション能力を高める機会となった。



2年（右）銀行の融資を前にメンバーで相談

（下）実際の融資相談会

3年生「総合的な学習の時間」

「修学旅行 SDGs 体験コース」の事後学習

沖縄の修学旅行ではSDGsの4つのゴールを意識した体験コースを設定した。ゴール11では、沖縄の歴史保存について、ゴール14ではプラスチック問題、ゴール15ではサトウキビ栽培、ゴール17では共同売店の経営について、グループごとにそれぞれの問いを立て、「持続可能な沖縄」のために個人で、地域で、国でどのようなことができるかを探究した。現地では、博物館、環境研究情報センター、農業生産法人などでレクチャーを受けたり、インタビューを実施したり、横浜に戻ってからは、内容をポスターにまとめたりした。さらにポスターセッションで保護者にも参加してもらい相互に発表を行った。



3年（左下）ポスターセッション発表会
（右下）成果物のポスター

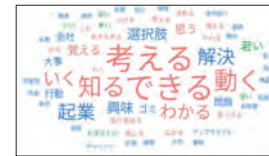


2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働 により引き出すことができた価値

(1) 振り返りから生徒の変容をみると

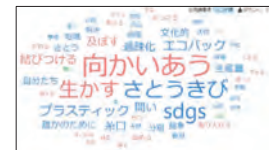
<起業家講演会の振り返り>

「自分たちの身の回りにもできることがあるかもしれない考えるようになった」「ゴミに価値をつけるアップサイクルはとてもいい考え」「誰のどんな問題をどのように解決するか、深く考えたい」など、考えて行動することの大切さを認識したことが読み取れる。



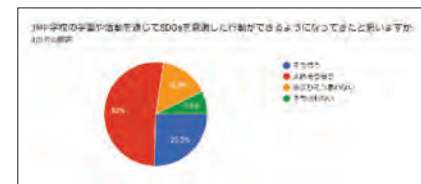
<修学旅行の振り返り>

「課題に向かいあって、どのようにして解決するかを主体的に考えることができた」「問いを立てて解決のための糸口を見つけ、その結果発見したことから再び新たな問いを立てる、という思考の循環を身につけた。」など、成長を実感する振り返りが見られた。



(2) 学校評価アンケート

昨年度の「SDGsの取り組みができていくか」という質問を、「SDGsを意識した行動ができていくか」に変更し、より意識して行動するかを問うようにした結果、8割近くが「そう思う」「大体そう思う」の回答となった。



3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

(1) ESD推進委員会発足

本年度、校務分掌として正式に「ESD推進委員会」が発足した。今までは「ESD担当」が単独で存在するだけだったが、特別委員会としての位置づけで、体育祭や文化祭と同等の組織となった。メンバーは10名で、教科・領域等の学習内容をSDGs17の目標で価値づけ、「持続可能な担い手」育成を意識した学校運営、授業、地域との連携を図った。

また、生徒会活動等も、身近な課題や社会課題の解決に向けた活動につながるよう検討していく組織を目指している。

組織化したことで、定期的に会議が設定され、情報を共有する時間も確保可能になった。この報告書の作成にあたっては、会議の時間にPCを持ち寄って共同編集した。今年度の活動を振り返ることができると同時に、業務の効率化も図れた。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むこと によって引き出すことができた価値

(1) 生徒会活動

生徒会本部をはじめ、各委員会の目標を決めるときに、SDGsの17の目標を決定したことで、自分たちの活動がSDGsのどの目標と結びついているかを確認した。保健安全委員会では、食品ロス話題を取り上げ、少しでもSDGsを意識できるよう、全校で取り組んだ。年度末には、自分たちの取組に対する振り返りアンケートを予定している。アンケートの結果をESD推進委員会で検討し、次年度の計画に生かしたい。

(2) 各教科・領域等

各教科・領域の中でもSDGsの意識付けを行い、生徒がSDGsを知るきっかけをつくり、主体的に行動できるための環境づくりを行った。今後はこれらの取組を視覚化する工夫をし、持続可能な実践にすることが求められる。

横浜市立西柴中学校

学校教育目標 「共に学び、たくましく、豊かな心」をもった生徒を育てます。

(知・開) (体) (徳・公)

ESDを通して育成したい資質・能力

「生徒一人ひとりが自他を尊重し、心豊かに向上心を持って学ぶことができる学校」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) JCOCAは連携・協働のパートナー



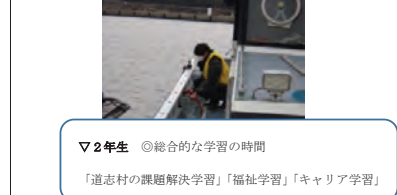
▽全校 ◎総合的な学習の時間
「JCOCA国際理解教育 地球市民講話」
 海外で働いた経験がある人の話を聞くことにより、視野を広げ、勤労観・職業観を形成することにつながった。国際社会への興味関心をもたせ、様々な生き方を学ぶことができた。



▽1年生 ◎総合的な学習の時間
「ボッチャ体験」「(株) パーソナルキャリア教育講話」
 「ボッチャ体験」を通じ、健康者も障がいのある人も、同じ社会で一緒に生きていくために自分に何ができるかを考えることができた。「キャリア教育講話」により、企業のSDGsを含めた様々な取り組みについて学び、自分たちの学校や地域での生活の中で「今、できること」を考えることができた。



▽2年生 ◎総合的な学習の時間
「道志村の課題解決学習」
「福祉学習 (金沢区社会福祉協議会 他)」
「キャリア学習 (職場体験 受け入れ先)」
 自然教室で行った「道志村」の現状を「名産品」「地場野菜」「林業」のテーマで探求し、地域の力になれる中学生を目指した。併せて、国語科で説明文「100年後の水を守る」を扱い、水資源の現状や大切さを知った。「福祉学習」では各種体験学習や、様々な人と自主的・意欲的に関わる機会を通して的確な支援の方法や自分にできることを考え、実行できる心を育てた。「キャリア学習」では自分を見つめ、現在の関心や将来の生き方について考えを深め、社会で必要とされる力について考えた。



▽3年生 ◎総合的な学習の時間
「地域のSDGsの取組み調べ・体験学習」
(YOKOHAMAリビングラボ、金沢シーサイドFM、アサバアートスクエア、カナかる、アマンドリーナ)
 3年間のまとめとして、地域での活動を通して新たな発見や気づきをまとめ、多角的な考え方を知り、SDGsの取組の未来の担い手になれる中学生になることを目指した。より身近なSDGsを実感するために、地元である「金沢区」で実践されている取組を体験した。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

総合的な学習の時間の中で地域での活動を通して人とのつながりから「よさ」を再発見し、校内や地域に発信する取組を行っている。

2年生は、福祉学習で「金沢区社会福祉協議会」にお世話になった。多面的・多角的に考えることで、福祉の大切さや幅の広さを知ることをねらいとした。車いす利用者の講話や体験といった「からだの不自由な人のための福祉」だけではなく、「私たちが関わる福祉」を知るために区社協や地域ケアプラザ、区役所福祉課のほか、地域で活動する「親子の広場」「スペース谷津坂」「谷津坂文庫」「にししば土曜塾」「中部でつながるふれあいマルシェ」の各代表にご協力いただき、地域調べやインタビューを実施した。学習のまとめ発表の際には地域の方や講師の方々をお招きし、学習から考えた地域のよさを発信した。今回の学習活動をきっかけに、ボランティアに参加するなど、地域とのつながりを深めた生徒も多かった。



3年生は昨年に引き続き地域の探究学習を行った。YOKOHAMAリビングラボの河原様にコーディネートしていただき、「横浜」にある企業のSDGsの取組を調べ、内容をバネル化して文化祭で展示発表した。また「地域(金沢区)」で実践されているSDGsの取組(ラジオ収録、アート作品作り、ご当地かるた体験、農作業)を体験した。体験をもとに「中学生の自分たちができるSDGs」を検討し、まとめとして文化祭でステージ発表を行った。発表方法は、オリジナルラジオの放送や劇、アート作品作りなど多岐にわたり、創意工夫がなされていた。



3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

(1) 教育活動をSDGsと関連付ける

昨年までは取組の中心は「総合的な学習の時間」がほとんどであったが、今年度は校外学習(遠足や自然教室)などのスローガンや事前・事後学習との関連づけや、国語科(説明文読解)や英語科(SEPRO GLOBAL)の学習にも取り入れ、教科等の横断的な学びになった。また、地域で取り組む学習との関連も図ることで、学びの場が広がりが様々な相乗効果を生み出している。以上のことは、生徒の「日々の生活がSDGsと関連している」という気づきにつながったと考えられる。今後は教科等の学習活動だけではなく、生徒会本部役員や専門委員会での取組の導入も検討したい。

(2) 長期的学習として定着させるための工夫

年間職員反省の中で「長期的な学習や大きな目標達成になるからこそ、教職員全体で計画を共有し、展開すべき」という意見があった。本校のESDの取組の中心である「総合的な学習の時間」のカリキュラムを軸に、今ある教育活動の骨組みを再確認しつつ、教職員内でもSDGsやESDの価値を捉えなおし、啓発や推進を行いたい。そのために、今後は職員研修や講師の招聘などを検討する。生徒の資質・能力や意識の向上のために、まずは教職員の働き方改革の視点ややりがい、校務分掌も含めた学校教育全体、学校運営組織を再度見直していきたい。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り込むことによって引き出すことができた価値 中期学校経営方針における重点化

本校では中期学校経営方針において、ESDの推進は重点取組分野のひとつである。地域社会で行われる各種取組に興味関心をもち、積極的な関わりをもつことができるよう、自らが地域における担い手になるという意識を育み、自助・共助・公助の必要性を学ぶ機会をつくるための活動ができた。引き続き、持続可能な社会の担い手の育成につなげていきたい。

横浜市立中尾小学校

学校教育目標「なかよく かがやいて おたがいに高め合う子」

ESDを通して育成したい資質・能力

「問題発見・解決能力」「自分づくりに関する能力」「持続可能な社会の実現に資する能力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) 横浜市資源循環局は連携・協働のパートナー



4年 NPO法人海の森・山の森
出前授業



4年 臨港パークでの
マイクロプラスチック拾い



6年 学校歯科医の講演

4年生 「総合的な学習の時間」

「4 You 3R プロジェクト～ゴミマスターズ43+2」

本実践では、海の環境問題について探究的なプロセスで課題解決していく姿を目指した。

横浜市資源循環局の方から、横浜市の環境問題や具体的な取組について話を聞いた。実際にどのような問題があるのかを、NPO法人海の森・山の森の方に教えていただいたり、臨港パークへマイクロプラスチックを拾いにいったりして確かめることができた。

このような体験から、自分たちにできることがあるのではないかと話し合い、学区の清掃や身近な人への周知活動など、自ら行動していく姿勢が見られた。

6年生 「総合的な学習の時間」

「自分の夢に向かって進もう！～My Dream Project～」

本実践では、自分づくり(キャリア)教育の観点から、インタビューや体験を通して働く人の生き方にふれることで、自身の未来について自信をもつ姿を目指した。様々な職業の方の生き方や考え方にふれることができるように、東京電力で人材育成を担当されている方や消防士、エンジニアの方などにインタビューを行った。また、学校歯科医の講演も聞き、自身の将来について考えを深めることができた。

このような体験から、卒業文集等で自身の将来について自信をもって語る姿が見られた。

SDGs委員会「委員会活動」

「フードドライブ活動」

本校では、一昨年度より継続して、SDGs委員会が中心となってフードドライブ活動に取り組んでいる。食品ロスを減らし資源を大切にしたり、地域と協働して問題に取り組んだりする姿を目指した。

フードドライブ活動を行うために、横浜市資源循環局の方と連絡調整を行って学校内で食品を回収できるようにしているところである。また、回収した食料品を地域の頒布会で出せるように、地域の連合町内会長と連携をする予定となっている。

本活動を通して、資源を大切にするために具体的な問題に取り組むことの重要性を実感している姿が見られた。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働 により引き出すことができた価値

(1) 子どもの必要感・切実感

4年の実践「4 You 3R プロジェクト～ゴミマスターズ43+2」では、横浜市資源循環局の方やNPO法人海の森・山の森の方の話を聞くことによって、環境問題について具体的にとらえることができ、「どうにかこの問題を解決したい。」という子どもの必要感・切実感の伴った問題意識をもつことが引き出すことができた。

6年の実践「自分の夢に向かって進もう！～My Dream Project～」では、様々な業種の方との関わりをもつ中で、「自分の将来について考えて、今後の人生に生かしていきたい。」という強い思いを引き出すことができた。

(2) 対話が生まれる授業

6年の実践「自分の夢に向かって進もう！～My Dream Project～」では、様々な業種の方にインタビューをすることで多くの対話が生まれた。今まで関わりのなかった大人との対話、話を聞く中で考えたことを話し合う子ども同士の対話等、多くの形態の対話を引き出すことができた。

SDGs委員会の実践「フードドライブ活動」では、資源循環局の方や地域の連合町内会長と連携をする中で、「校内に対してどのように周知していくか。」という問題が生まれ、話し合いを重ねていた。様々なアイデアについて、メリット・デメリットを出し合い、よりよい方法について対話する姿を引き出すことができた。

3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

(1) 本校の重点研究について

本校では、「なかよく かがやいて おたがいに高めあう子」を学校目標に掲げ、その実現

に向けて重点研究ではESDの構成概念や問題解決に必要な能力・態度の育成を大切にしている。

その中でも今年度は、「子どもが必要感・切実感をもって学ぶこと」と「対話が生まれる授業づくり」を柱に、生活科・総合的な学習の時間を中心に取り組んだ。

(2) 総合的な学習の時間の単元構想

総合的な学習の時間の単元を構想する上で、探究的なプロセスで課題解決ができる学習の流れになっているか、子どもの活動を適切に評価していただける企業やNPO、地域の方と関わりをもつことができる単元になっているかを大切にしたい。外部講師を招き、単元構想についての研修も行った。

(3) 重点研授業研の成果と課題

各重点研授業研を受けて、「子どもが必要感・切実感をもって学ぶこと」と「対話が生まれる授業づくり」について成果と課題をまとめた。それぞれの授業について迅速に成果と課題をまとめることで、次回以降の重点研授業研へ生かせるようにした。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むこと によって引き出すことができた価値

以上の取組から引き出すことができたものは、教職員の単元構想に関わる意識の変容である。単元を構想する上において、企業やNPO、地域と連携しようという意識が向上したように感じる。外部機関と連携することで、子どもの学びの質が上がり、「子どもが必要感・切実感をもって学ぶこと」と「対話が生まれる授業づくり」に確実につながるという実感をもつことができた。今後も、持続可能な社会の創り手の育成に向けて、本校の実践を高めるよう努めていきたい。

横浜市立本牧中学校

学校教育目標【「見つめ」「認め」「高める。」】

ESDを通して育成したい資質・能力

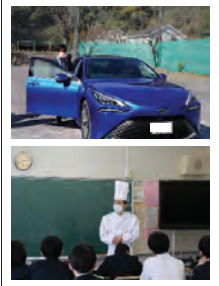
「身近な課題の解決に取り組むことで、社会課題へも目を向けさせ、更なる行動化を促す。」

- ・人権、平和への認識を上げる → 世界を知る
- ・「働く」ということへの目覚め → 目的意識の向上
- ・自らを高めるための進路 → 質の高い教育 など

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) は連携・協働のパートナー



全学年 「留学生との交流」
今、世界はどの方向へ進んでいるのか？自分たちと同じ世代の人たちはどのような文化の中で生活しているのか？人種、文化が異なるけど、しっかり受け止めて人権意識や平和への想いを身につけているのか？
そんな正解のない問題に無意識のうちに触れ、自ら感じ・考えて、グローバルな感覚を身につけていくことを目的とした企画である。横浜市国際学生会館、JICAとのコラボで年間を通じて交流を継続している。本牧の地域としても国際色豊かな地域であり、子どもたちは留学生たちに自然と溶け込み、国境の隔たりが感じられない交流を実現することができた。
留学生の母国での問題を知り、それを解決するために日本に留学し学んでいる姿は、本校生徒にも大きな刺激を与えていると感じている。



1、2年 「キャリア学習」
「学習する目的は何か？」「進学するのは何のためか？」「働きがいは何か？」そんなことを考え、自分を知り、次につなげていく目的で実施した。従来の訪問型の職業体験を一新し、新しい内容を模索している段階である。
今年度は、1年生で職業についての事前学習を行い、まとめとして、パナソニック様のご協力のもと、講演会を実施した。2年生は5社の企業の皆様にご協力いただき、本校で出前授業を開催した。リスクマネジメント、投資、ものづくり、研究販売等、それぞれの企業が世界で今の地位を確立し、経営努力されている一面を感じ、生徒自身がこれからのような進路を選択すべきか考える礎になればと考えている。



3年生、全学年保護者 「高校フォーラム」
近隣の進学先(公立・私立・全日制・通信制高等学校、高等専修学校、高等専門学校)25校に来校していただき、20分1コマ×3回の説明会を開催した。対象は3年生生徒と全学年の保護者で行った。
目的は、偏差値や大学への進学率だけにとらわれず、進学するという様々な可能性を知ること、そして保護者が経験してきた時代との違いを保護者も感じ、子供にとって最適な進学とは何かをつかんでもらうことであった。
結果的に、本校の生徒の進学先の数の多さにつながってきていると考察できる。学費等の経済的な負担の問題もあるが、一般的な全日制高等学校のみならず、「高等専修学校で専門知識を学びたい」とか「高等専門学校で5年間じっくりと学びたい」など、進学先選びに変化が表れ始めている。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 常に新しい考えや発想を大切に、時代の流れを敏感に感じとりながら仕事を進めている企業の方々の仕事に対する姿勢は、我々教員とは明らかに異なっている。

生徒にとって一番身近な大人である教員と異なる社会人の話や雰囲気はとても重要な刺激になっていると考えている。

このような企画が継続されていくことで、我々教員の意識にも変化が出てくることを期待している。

(2) 1で示したような企画が生徒に与えた成果は数値的なデータや結果としては、なかなかすぐには判別できないと考えている。日頃の生徒との会話の中に変化が生まれ、最終的には、世界を知った上で、自らについて考え、進路選択につながっていくと考えている。そのプロセスを持続的・継続的に行いながら、尚且つ、毎年必ず企画内容の見直し、変化をつけながら更新していくことが大切だと考えている。

3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

現在のSNSが普及している時代の中で、子どもたちは、簡単に世界の状況や問題点を知ることができる。ただ、それに関心が低いために、よく理解していないのだろうと考えている。もし、子どもたちが関心をもった場合には、教員もそれに応えていけるようにすることが大切である。

このような状況の中で、ESDを教育課程に位置付けるときに考えたことは、問題を見つけ、解決するという前提を、生徒だけでなく、教員側にも刺激を与えてくれる内容にし

たということだった。教科書に載っていることをそのまま伝える教員と、教科書に載っていることをそのまま覚える生徒が集まっている学校ではだめだという課題意識である。

生徒は、一人ひとりがキャラクターを発揮しながら、自分の長所を理解し、自らの道(進路)を選択できる。教師は、そのような生徒を認めることができる。このような環境を作り出すことが理想だと考え、試行錯誤しながら取り組んだ。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

学校全体で取り組んでいるという意識が教員、生徒にあるかどうか分からない。こちらは何も発信していないからである。

発信し、知らせ、実践したふりをする。それでは価値がないと感じている。行事やイベントを行っていく中で、自然と考え方が変化してきたという流れが理想だと考えている。

ESDを進めていくためには「言われたからやる」ではなく、教師も生徒も自然な流れの中で行動することができたという理想に向かって、企画を進めている。

横浜市立小田中学校

学校教育目標

1. 個性が発揮できる学校生活 (知) 自ら学び、自分らしさを発揮し、生きる喜びを実感できる生徒を育てます。
2. 誰もが尊重される学校生活 (徳・体) 自らの心と体を健やかに育み、互いの立場を尊重しあえる生徒を育てます。
3. 地域とともにつくる学校生活 (公・関) 地域との交流を積極的に進め、地域の一員としての自覚を育てます。

ESDを通して育成したい資質・能力

「コミュニケーション力」「課題発見・問題解決力」「持続可能な社会の創造に貢献する力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) は連携・協働のパートナー



ジャージ登校継続の課題について話し合う姿

全学年「特別活動」

「議論する生徒総会へ～原稿を読み上げて拍手するだけって意味あるの?～」

生徒会本部役員が従来の「形式を重視する生徒総会」よりも、自分たちの生活をより良くしようとする意識を全校で高めるために、当日の意見交換を行う「議論する生徒総会」にしたいと提案してきた。普段なら肅々と進んでいたが、自分事として活発に議論する姿が見られた。また、ジャージ登校継続にあたっては、過ごしやすさや着替えの時間短縮といった効率面だけでなく、標準服の意味も理解して継続するために、学生服メーカーに機能や用途について問い合わせたり、チクマ・服育 net 研究所の方から講義をいただいたりした。

2 学年「総合」

「杉田梅ゼリーをバズらせる!」

地域にある「杉田梅」を題材にパッケージを製作する実践。後世に杉田梅を残そうと活動する横浜 旬・菜・果の方から生産への想いや梅の特徴を伺い、美術科を中心に教科横断的に学びながらパッケージを作成した。そのうえで、杉田梅の商品を扱っているスーパーマーケットのスズキヤさんと連携して実際に選んでもらい、店舗での販売につながっている。生徒たちは自分たちで定めた商品のターゲット層に届くために、どのような課題があり、どう工夫すればよいかを話し合う姿が見られた。

3 学年「総合」

「平和のために何ができるか」

修学旅行の事前、事後学習の中で、平和学習を探究的に行った。生徒は、長崎で被爆者から直接お話を伺ったり、政治家と手紙のやりとりをする中で、「戦争は良くない」「平和のためにできることを考えようと思った」といった道徳的な認識にとどめるのではなく、戦争の悲惨さを心で理解しながらも、現状を批判的に分析したり、安全保障を多面的・総合的に捉える姿が見られるようになった。また、自国だけで平和は成立するのではなく、他国との連携が必須であり、あまりの複雑さに思考停止することもあった。しかし、粘り強く探究をすすめ、少しずつ理解・思考を深めていった。



被爆者手帳の訴訟を題材に

核兵器を巡る様々な考え方について説明する生徒

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 説得力、専門性の向上

原爆の被害は自分もYoutubeとかある程度知っていたつもりだったけど、それを実際に体験した人の話は迫力が違った。(生徒の感想)

平和学習の実践では、被爆者の体験や想いを直接聞くことにより、ネットや本から得られる知識以外のことも感じているようだった。この体験が、その後の主体的な探究活動につながった。

自分たちや先生たちが伝える言葉だと、「そうは言っても…」という反発が起こったりする。だから専門家からの発言はみんなもより受けとめてもらえると思う。(生徒会本部役員の発言)

生徒総会の実践では、ジャージ登校という生活指導にも関わる内容がある。「マナーやルールを守る」ということは生徒もわかっているが、なんとなく教員からの言葉は形骸化してしまう場合がある。しかし、服育 net という専門家の言葉では、学校内の人とは違う言葉として説得力をもって伝えられると感じている。

(2) 社会とつながり、学ぶ意味を実感

生徒にとって学校での学びは「成績のため」にやるものであり、何のためにやるのか分らないと感じている場合もある。しかし、社会につながることで、学ぶ意味を感じることができた。杉田梅の実践では、実際に製作したパッケージが地元のスーパーに並ぶのである。そこで消費者の手にとってもらえるかは、いかに自分たちが魅力的なパッケージをつくるかにかかっているのである。そこで初めて、言葉で表現することや色やフォントの与える印象などを学ぶ必然性が生まれる。各教科でもその内容を学ぶ理由を生徒が感じられるように導入や教材研究を工夫しているが、学校外とつながることで得られる力は非常に強いと感じた。それは生徒の反応を見て教員自身がハッとさせられたことで

もある。外部人材と連携・協働することのメリットを感じられるきっかけにもなった。

3 ESDの価値を引き出すために

試行錯誤したこと

いかにホールスクールアプローチにしていくかこの一点に限る。これまでも良い取組を行ってきたと考えているが、それはESD推進担当だけで、生徒会本部といった一部の活動にとどまっていた。そこで、どうやって学校全体を巻き込むのか。生徒会本部もその課題を感じていたからこそ、生徒全体に関わる生徒総会を改革しようとした。また、教職員間の差をうめるために、ESDを軸とした独自教科のカリキュラム作成を教員研修で行ったりしている。このような学校全体にかかわる部署でESDについて考える機会を作ることで、意識合わせが少しずつ進んでいる。



ESDの視点から内容と資質・能力をどう各教科でつなげて独自教科を作成するかを考える研修

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

ESDの生徒交流会で生徒会長が「僕たちにとってのESDは当たり前を疑うことです。今回はジャージ登校から標準服の意味やルールの必要性について考えています。でもこれを拡大して考えていけば、環境とか平和とか地球のことを『このままでいいの?』と疑う姿勢につながっていくと思うんです。それが持続可能な社会をつくっていくことにつながると思うんです。」と語っていた。この発言が成果である。また、ESDにつながる杉田梅のような実践も出てきた。このような取組を今後も広げていきたい。

横浜市立中川西中学校

学校教育目標「自立と貢献」「健康と思いやり」「対話と融和」

ESDを通して育成したい資質・能力

「問題解決能力」「自己理解と他者理解」「コミュニケーション力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) ユニクロ・GUは連携・協働のパートナー



ユニクロの授業では生徒が主体的に考える時間が設けられた



ポスターを作成し、全校へ呼びかけた



コスモス祭当日! 多くの服が寄付された



キャップフェス啓蒙ポスター

全学年・ボランティア同好会「総合的な総合の時間」 「届けよう、服のチカラ」プロジェクト

本校卒業生が昨年度横浜市のピースメッセンジャーとして、国際連合本部(ニューヨーク)を訪ね、今後の世界のために私たちに何ができるかを考えた。卒業後の活動になってしまったが、在校生へと活動を引き継ぎ、今年度の7月にユニクロ・GUより講師を招き、Google classroomを活用し講演会を開いた。

「服のチカラ」とは何か、回収された服がどのように活用されていくのかを、クイズや動画を用いて主体的に学ぶことができた。授業を通して、自分でできることには取り組んでみたいと考える姿が見られた。

夏休み明けからはボランティア同好会を中心に有志も募り、服の回収プロジェクトが始まった。全校生徒へのアンケートなどを参考に、10月に保護者主催で行われているコスモス祭という行事で服の回収を行った。PTAにも協力していただき、多くの服を回収することができた。11月にユニクロ・GUに回収品を収め、今回のプロジェクトを終了した。

活動を通してSDGsの目標である「つかう責任つくる責任」について主体的に学び、実際に活動することができた。他校でも取り組んでいるがなかなか継続するのが難しい、という声も聞き、どのように「持続可能な活動」にしていくかを今後検討することが必要である。

全学年・生徒会

「エコキャップ回収フェス」

以前からペットボトルのキャップ回収を本校では行ってきたが、生徒会本部ではどのようにしたらさらに全校生徒がキャップ回収に協力できるかを考え、定期的に「キャップ回収フェス」を始めた。テーマを決め、キャップを投票権として活動を進めている。PR動画を作成するなど全校生徒への意識づけも行っている。回収されたキャップは回収業者を通じて、ワクチン代として寄付している。

2 地域や企業、NPOなどの連携・協働

により引き出すことができた価値

Think Globally, Act Locally

(1) 「服のチカラプロジェクト」を振り返って
ここ数年間、総合的な学習の時間を通してSDGsについて理解を深めてきた。今までは世界や日本の状況について思考する場面が多かった。今年度は学んできたことを活かし、ユニクロ「服のチカラプロジェクト」に参加し、実際に活動を行うことができた。知識を得るだけでなく、自分たちに何ができるのかを考える機会となった。

生徒感想文より

今日の授業を受けて、どのように服が届いているかを知ることができ、安心しました。もっと効果的に難民へ服を届ける術を考えてみたいと思いました。

自分の着られなくなった服を渡すだけで1日1日の生活が変わっていくならすぐに協力したいです。

(2) 生徒会新聞での啓発活動

月一で発行されている生徒会新聞の裏面には、各SDGsの目標の解説や今の自分たちにできることを掲載している。



3 ESDの価値を引き出すために

試行錯誤したこと

ICTを活用し、個別最適で、創造性を育む教育

これからのSociety 5.0時代の中で、個別最適な学びの効果的な支援が必要となる。今までは各学習の取組として、紙媒体で行われることが多かったが、プロジェクト型学習を行うことで、ESDを通して育成したい資質・能力の「問題解決能力」「自己理解と他者理解」「コミュニケーション力」

を育むことができるようになってきた。また、読み書きに苦手意識がある生徒などもデジタル機器を使用することで、まとめ学習などを平易化することができた。「誰一人取り残さない」という視点においてもデジタル機器を使った授業は有効的である。昨年度よりもデジタル端末の有効的な使い方を教員間で共有し、行事の事前事後学習や授業の中でGoogle classroom等が積極的に活用されるようになってきている。また、Google スライドの共有機能を使用することで今までは難しかったグループでの作業も行うことができ、着実に生徒たちの表現能力も向上している。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことにより引き出すことができた価値

Chromebookの導入によって、同学年の横のつながりだけでなく、縦の繋がりも生まれ、より良い教育活動ができている。例えば、生徒たちの作品をクラスだけでなく、学年を越えて共有できるようになり、「持続可能」かつ「より完成度の高いもの」を作りあげることができるようになってきた。

委員会活動でもデジタル機器が活発に使われるようになり、ペーパーレス化も図られている。今までは印刷など細かなところに時間が割かれ、担当職員の負担も大きかった。また、職員だけでなく生徒達もアンケートの集計などにも膨大な時間を要していた。しかし、デジタル機器の使用によって、データを簡単に共有できたり、整理できたりすることで、活動や仕事の負担も軽減され、持続可能な取組につながっている。また、ペーパーレス化によって余分な紙を使用することが減り、SDGsにも貢献することができている。



文化祭では3年生が修学旅行の事前事後学習をスライドを活用し、発表した



横浜市立相沢小学校

学校教育目標「学びあい 認めあい 支えあい 夢をはぐむ あいざわっ子」

ESDを通して育成したい資質・能力

「自分の考えをもつ力」「思いや考えを表現する力」「伝え合うことで自分の考えを深化させる力」

「進んでコミュニケーションを行う力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) 地域・協働のパートナー

どうしたらおいしい野菜が育てられるかな？



地域に住んでいる野菜博士

ちょっとした段差でも移動が大変...



外の道は、すごくタガタする。怖いなぁ。



地域の方や技術員さんへインタビュー



危険な道が多いな。

どうしたらたくさんの人に伝えられるかな？



2年生「生活科」

「やさいとおもちゃでがんばりUP! どうぶつランド2年生」

生活科を通して、身近な学習経験の中から「野菜」と「廃材のおもちゃ」の二つのチームに分かれて活動した。「野菜グループ」は「地域の野菜博士」と交流を積みかさね、野菜の栽培に興味をもち、進んで気付きを伝え合おうとする力が身についた。「おもちゃグループ」は身近な廃材を使った遊びの楽しさを実感し、試行錯誤しながら交流することで伝え合おうとする力が身についた。

6年生「総合的な学習の時間」

「レベルアップ6年生！ 私たちの未来を守るために私たちができること！」

6年生は、SDGsについて、興味や関心をもったテーマについて調べ学習を進めた。飢餓やジェンダー、エネルギー問題、海洋汚染、福祉と様々な分野に分かれて、「現状」「行われている取組」「私たちができること」の3つの段階に分けて調べた。身近な相沢のまちにも焦点を当て、SDGsをより身近な課題として捉え、課題解決をするために、自分たちができることを、グループで話し合った。地域にある「社会福祉協議会の方」に協力していただき、車いす体験を行ったことで、障がい者の方々の視点に気づき、活動が発展していった。学習を通して学んだことを、下級生にもわかりやすい言葉や資料を作成して、相手を意識した伝える力を身につけてきた。

個別支援学級「生活単元学習」総合的な学習の時間

「一人ひとりがハッピースター☆～みんなニコニコ作戦！～」

個別支援学級では、2つのグループに分かれて活動を行った。「理想の相沢のまち」をテーマに、総合的な学習の時間の時間で「公園環境」「交通安全」「身近なまきり」について調べた。「地域の人」や児童支援専任にインタビューをしたり、実際に公園や地域の道路へ行き調査したりした。活動を通して、自分たちの住んでいる地域に関心をもち、「誰もが安心して楽しく暮らせるまちしよう」という考えがもてるようになった。公園環境グループでは、拾ったごみの分別を行う際に、技術員さんに分別の仕方を教えてもらった。自分たちの考えを校内の友達や家の人だけでなく、地域の人たちにも広めるにはどうしたらよいかを考えるようになり、発信する手段や活動内容を工夫しようとする力が身につけてきている。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働

により引き出すことができた価値

(1) 繰り返し交流することで見られた価値

2年生の生活科では、野菜の栽培活動を通して、地域の方と交流を重ねてきた。野菜づくりで出てきた疑問を地域の方に質問し、分かったことを自分たちの活動に生かした。その中で、交流をしてきた地域の方を「いろいろな人を知ってもらいたい」と、あいざわっ子発表会で発表した。国語の「お話の作者になろう」の学習を生かし、子どもたちからのアイデアで地域の方を主人公にした物語を考えた。



今回地域の方との連携を通して、学習やものごとの繋がりを意識して自分たちの活動を考える姿が見られた。また、繰り返し交流することで、自分事として捉え、進んで参加する態度が育ってきた。さらに、活動の過程で友達や地域の方と協力しながら、活動に取り組む力を身につけていった。

(2) 今年度の活動で引き出せなかった価値

活動の幅がなかなか広がらず、校内だけで活動が完結してしまったり取組も多くあった。その結果、子どもたちの取り組む姿勢に積極性が欠けてしまった。(1)で表記した活動とは異なり、自分事として捉えられず子どもたちに「やらされている感」が出てしまい、活動の目的やゴールが明確にもてずに活動してしまったりととらえられる。子どもたちが活動を自分事として捉えられるよう、教職員がものやことと繰り返し関わる時間を十分に確保したり、振り返りを生かして次の活動を計画したりする必要がある。また、子どもたちが様々な人やものなどつながるよう、計画的に指導していきたい。

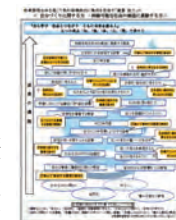
3 ESDの価値を引き出すために

試行錯誤したこと

(1) 教育課程全体を通じて教科等横断的に育成を目指す

「資質・能力」の見直し

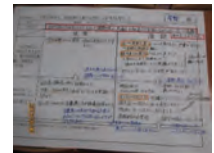
新たにESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度を取り入れ、教育課程全体を通して教科等横断的に育成を目指す資質・能力の見直しを行った。学校教育全体で



ESDの視点を取り入れた指導を意識的に行えるようにした。

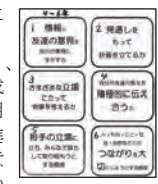
(2) ESD部会と重点研部会との連携

重点研部会と連携し、ESDの視点を取り入れた授業力の向上を図った。本校の子どもたちに身につけさせたい資質・能力は何かを明確にし、手立てや指導内容を検討した。今年度の育成したい資質・能力を「進んでコミュニケーションを行う力」とし、振り返りでは子どもたちが自分の考えを自分の言葉で表現できていたかなどを話し合った。



(3) 「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」カードの作成

ESD部会では、授業中に教職員も児童も育成したい資質・能力を意識できるように、「資質・能力カード」を作成に取り組んでいる。まだ実用できてはいないが、検討を進める中で、部会の教職員の意識が徐々に変化し、ESDの視点を取り入れた授業づくりの考え方や、ESDへの理解が深まった。来年度は全校で活用できるようにし、学校全体でESDへの取組がさらに推進していきたい。



4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組みることによって引き出すことができた価値

(1) ESDの推進を図るための校内研修

年度はじめに校内研修を行い、ESDとは何か、本校で育成したい資質・能力はどのようなものを教職員全体で共有した。各学年のESDカレンダーを見ながら、どのような教育活動を設定していくか、どのような教科等でどのような資質・能力が育成できるのかを話し合った。昨年度から始めた研修で、徐々に教職員へのESDの理解が深まってきた。



今後はよりESDの視点を意識した指導が全教職員で行えるよう、引き続きESD部会を中心に情報の発信や研修を実施していきたい。



横浜市立旭小学校

学校教育目標「思いをもつ力 関わる力 やりぬく力」

ESDを通して育成したい資質・能力

「思いをもつ力」「やりぬく力」「関わる力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) は連携・協働のパートナー



保護者の方や地域の方に総合の取り組みを発表する姿



保護者会福祉協議会の方の話聞く姿



3年生 「総合的な学習の時間」 「三角公園を盛り上げよう」

本実践は、「まちを明るくしよう」という意識をもち、公園愛護会、消防署、地域活力支援施設と協力して地域を盛り上げるイベントの企画・運営を行った。イベントでは、ランタンを作って公園に飾ったり、地域に関するクイズを作って、ポイントラリーにしたりした。多くの地域の方々が来てくれたため、模擬店の手伝いなど意欲的に行き、様々な人と関わることができた。「イルミネーションイベント」では、竹ランタンを設置したり、クラスの総合的な学習の時間で取り組んでいることを発表したりした。この経験から、自分たちも地域の方々と一緒に活動できることや自分たちの行動で地域を盛り上げられることを実感した。

4年生 「総合的な学習の時間」 「自分たちで考えるユニバーサルデザイン」

本実践では、様々な立場の人になってみんなが過ごしやすいするために自分たちに何が考えられるか考える活動をしてきた。活動では、社会福祉協議会の方と盲導犬と生活している方にお会いし、お話を伺うことで様々な視点があることに気づき、新たな課題意識や様々な立場の人に対する思いをもつことができた。また、UDを追究したオリジナル商品を開発している企業の方のお話を聞き、商品を試してみることができて、身の回りのものがUDかどうかを考えてみたり、自分たちだったらどのようなデザインのものを開発するかを想像したりすることができた。さらに、グループで自分の案を共有することでよりよくしようと意見を伝え合う姿も見られた。

4年1組 「総合的な学習の時間」 「旭活性化委員会 Ver2 『あさまる』」

本実践は、昨年度の6年生の「鶴見西口活性化」活動に刺激を受け、自分たちで学校をよりよくしたいという思いから活動が始まった。情報を発信していくことが活性化に繋がると考え、鶴見の情報を発信するポータルサイト「これつる」の編集長に思いや情報発信の工夫を伺った。この活動を広めるために、はまっこ未来カンパニープロジェクトにも参加している。情報を発信する場をつくる体験を通して、学校内外の関わりを強めるためには、学校や地域のために力を尽くしている方と協力し、その思いを理解、共感することが大切であることに気づき、その結果、学校を創る一員であることを自覚することができた。

5年生 「国語科」

「新1年生の保護者に向けて、旭小のいいところを



5年 取材対象を広げて、インタビューをする姿

スピーチで紹介しよう!

本実践では、保護者への事前アンケートをもとにスピーチの内容を設定した。本当に伝えたい相手からリアルな声を受け取ることで、よりスピーチの質を高めたいという思いや、自分のスピーチで人の心を動かしたいという意欲を引き出すことができた。また、養護教諭や児童支援専任教諭、1年生担任や児童へと取材を重ねる中で、自分で文章の構成を見直したり、友達と互いのスピーチを見合ったりし、聞き手のニーズに合うスピーチの構成になっているか話し合う姿も見られた。この経験で身に付いた力や人との関わりで深まった学びを生かして、よりよいスピーチの完成を目指し、新1年生保護者説明会に参加してスピーチを行った。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働 により引き出すことができた価値

(1) 地域とのつながりをもつ

3年生の有志で「あさひキッズ愛護会」という団体を立ち上げ、まちのためにできることをしようという活動を行った。7月には地域の公園で行われた「たなばたま祭り」の企画・運営に携わり、12月には「イルミネーションイベント」を同公園で行った。どちらも「地域とつながりを広げよう」という趣旨で行った。

(2) 地域とつながることで引き出した価値

活動を通して子ども達は「自分もたくさんの人とつながることができた」「自分の思いを形にすることができた」等の価値を見出すことができた。一緒に活動してくださった地域の方からは、「子どもの力に驚かされた。私たちももっと頑張ろうと思った。」「挨拶をしてくれる子が増えたことで、つながりを感じた。」「もっと一緒にできることはないかを考えたいと思った。」というお声を頂き、一緒に取り組むことで、よりまちのためにできることを「一緒に」考えていくという意識が強まったと感じた。

3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

(1) ESDの視点を入れることで見えたもの

本校では、今までにESDについて深く考えた経験がある教師が少なかった。そのため、ESDに取り組んではいるが、意識できずにいたり、ESDを積極的に取り入れたりすることが

難しいという課題があった。そのためにも、研究授業の指導案にESDの視点を示し、ESDを意識化することから始めた。ESDの視点から具体化した子どもの姿を示し、目指す姿を選択できるようにして、負担感なく意識化できるようにした。また、ESDの視点を指導案に示すことによって、授業に取り入れやすい視点と取り入れにくいと感じている視点が明確となった。今後は、教師の意識化とともに、教師たちがどのような方策で子どもの思考や行動を価値付けていくかということにも重点を置いて取り組んでいきたい。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 重点研究

教員一人ひとりの「違い」を前提とした授業づくりを行った。教員それぞれが設定した「課題」を共有した上で、学校教育目標を達成するための研究授業を行った。

指導案検討の際には、共同研究者として講師を招き、一緒に単元構想を練った。その際に、「違い」を前提として、個人が設定した課題を達成するために、大切にしたい思いを共有し、自分らしく学校教育目標の具現化ができるように研究を進めた。これによって授業者に寄り添った授業づくりを行うことができた。また、一人ひとりの違いを前提とすることで、その人が大切にしている価値を知ることができ、新しい視点を得られることができたと考えている。

横浜市立本牧南小学校

学校教育目標「元氣いっぱい やさしさいっぱい 何でもチャレンジ南っ子

～ふるさと本牧を担う子どもの育成～



ESDを通して育成したい資質・能力

「課題解決力」「確かな学力と丈夫な体」「地域や社会とのつながりを大切にできる心」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体

学校教育目標とESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

- ・自ら問題を解決しようとする、実践力のある子ども
- ・知識・技能の基本を習得し、健康な体をつくる子ども
- ・地域等の人とつながりやものを大切にすること
- ・社会の変化に関心をもつ子ども



○校内教職員向け ESD 研修会

(ESD 推進委員長が実施)

○重点研究における授業の充実

- ・学級経営の充実・問題解決的な学習の充実
- ・子ども同士の対話を大切に授業
- ・言語活動の充実

○学校図書館の機能の拡充

学校図書館を「読書センター」「学習・情報センター」として学年・教科等の横断的活用を重要視。子どもたち・教職員にとって重要な情報が集まる「情報発信基地」として SDGs に関することを多角的多面的に発信。

（令和5年度子どもの読書活動優秀実践校

文部科学大臣表彰）

○AI ロボット「LOVOT」の導入

子どもたちの人権的な心を育む入り口として、学校図書館にAI ロボット「LOVOT」を常設。

○今までの「シトラスリボンプロジェクト」とアクセシブルな本の普及を目指す「りんごプロジェクト」を令和5年度からスタート

3年生 総合的な学習の時間
～本牧のまち にこにこ 大作戦～

「シトリンプロジェクト」をベースに総合的な学習の時間でふるさとを思いやりを表現

(1)りんごプロジェクトとの出会い

文部科学大臣表彰をきっかけに、学校図書館では読書バリアフリーへの関心をさらに高め、SDGs 情報発信基地としての機能を充実させる取組をスタートした。その導入として、アクセシブルな本の普及を目指す「りんごプロジェクト」の講演会を実施した。



(2)まちたんけん

子どもたちは、老人ホーム・幼稚園・市立図書館への訪問を通して、自分たちが多くの人に支えられていることに気づくことができた。



(3)中区ブックフェスタへの参加

～来てみて知って本牧南小学校図書館
シトリンプロジェクトははじめました～
ふるさと「本牧」のまちから発信する学校図書館の紹介と3年生が総合的な学習の時間から学んだ思いを発表した。



りんごの棚



2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 地域や企業との協働

子どもたちが地域や企業の方と連携・協働しながら学習できるよう日々工夫を重ねてきた。下の表にあるように、全学年で地域や企業の方と関わる機会を意図的につけている。

1年	年長さんと楽しむぞ大作戦（生活科） ・横浜本牧駅、近隣保育園・幼稚園 他
2年	本牧のまち たんけんたい（生活科） ・本牧市民プール、八聖殿 他
3年	本牧のまち にこにこ大作戦（1組）（総合） ・リアンレーヴ本牧 他 のり名人になろう！（2組）（総合） ・須藤海苔店 他
4年	地域で受け継がれてきたもの（社会科） 作戦 530（総合） ・資源循環局 他
5年	食べて運動 5-1オリジナル SDGs（総合） ・横浜中央卸売市場、八聖殿 他
6年	Let's 本牧 LOVE32 ～めざせ！スタブレ動画 No.1～（総合） ・市営バス本牧営業所、第一金属工業
個別	野菜を育て、おいしく食べよう！（生活科）

八聖殿郷土資料館 館長 相澤さん



本牧のまちの歴史をよく知る相澤さんとの交流を通して、子どもたちはまちへの愛着を深めたり、まちのよさに改めて気付いたりすることができた。（6年 総合的な学習の時間）

(2) 地域との関わりから得た価値



児童参加型の地域防災拠点訓練

教科学習だけでなく、行事においても積極的に地域と関わる機会を作った。地域と関わることは、「人と出会う・つながる」ことでもあると言える。様々な人の営みに触れ、その人たちの思いや願いに共感したり、感動したりする経験は、子どもたちにとって大きな価値がある。

3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

重点研究推進の視点から

(1) 問題解決的な学習の充実

どの学習においても、子どもたちの「どうしてだろう。」といった問いや「やってみよう。」「調べてみたい。」という思いや願いをどう引き出すか、日々試行錯誤している。子どもたちの主体的な学びを実現するために、今後も研究を深めていきたい。

(2) 子ども同士の「対話」の充実

(1)で述べた問題解決的な学習を積み重ねる中で、最も重要になってくるのは、「対話」であると考える。中でも本校が目じたのは、子ども同士の対話である。「聴き合い」をキーワードにして、お互いの考えをじっくり聴き、それに反応することを大切にしてきた。それにより、他者の意見も取り入れながら、よりよく問題解決を図る力が身に付くのではないかと考えている。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 教職員一人ひとりの「自分ごと」が向上

夏の校内ESD研修で、教職員一人ひとりがVUCA（予測不可能な時代）における理想の学校像を考え、それをICTを活用して全体で共有した。それによってESDに対する理解が深まり、当事者意識が高まるとともに、持続可能な社会の創り手を育成するための学校の役割について具体的なイメージをもつことができた。

(2) 学校全体の「ESD意識」が向上

本校のESD発信基地が学校図書館であることから、全校児童がSDGsやインクルージョンについて日常的に触れることができ、その理解や意識が高まってきた。(1)の教職員の当事者意識の向上と相まって、教科等学習の内容だけでなく、様々な教育活動をESDの視点で見直したり価値づけたりする様子が見られるようになってきた。

横浜市立新井中学校

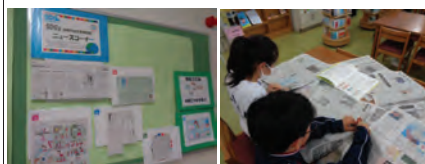
学校教育目標「自立・共生・学び合い」

- ① 自分のよさを知り、なりたい自分を見つけます。(知)
- ② 相手のよさを認め、励まし合い、地域と共に生きる人を育てます。(徳・公)
- ③ 命の大切さを知り、持続可能な社会を共に創る心と体を育てます。(体・公)
- ④ 思いやりのある、親切的な行いを実践し、社会に貢献できる人を育てます。(開)

ESDを通して育成したい資質・能力

「共に生きる力」「想像する力」「実践する力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体 地域学校協働本部は連携・協働のパートナー



図書館前のSDG s 掲示板。初めは時間がかかりましたが、今では、手早くSDG s に関連する記事を探すことができるようになりました。



少し時期遅れに植えたヒマワリの苗ですが、夏休み明けには、見事に咲き誇りました。



今年は、グリーンサポーターの力と時間を合わせての活動はできませんでしたが、学校の花壇を手分けして整備することができました。右下の写真は、来年度に向けて、個別支援学級の生徒がヒマワリの種を選別しているところです。

図書委員会

図書委員会での具体的な取組として、SDG s 関連図書の購入、展示、推薦ポップの作成がある。また、図書委員の生徒が新聞から、SDG s 関連した記事を選び、SDG s シールによって示したものを掲示することにより、生徒に周知していく活動を行っている。

環境保健委員会

地域学校協働本部と連携して、校内の緑化に日々努めてきた。今年度は、季節ごとに花壇の植え替えを行い、色とりどりの植物は生徒、保護者、地域の方を楽しませた。

個別支援学級

環境保健委員会で育てたヒマワリの種を来年度の栽培用に採取した。また、メダカやウーパールーパーの飼育を行い、命の大切さを学びながら、環境問題について考えている。

総合的な学習の時間

SDG s と関連したビデオを視聴し、持続可能な社会に向けての意識を高めた。

2 地域や企業、NPOなどの連携・協働により引き出すことができた価値

本校では地域学校協働本部でもあるNPO法人「A・S・C・C」(新井スクールサポート・コミュニティ・コーディネーター)が、学校と地域を結ぶ学校の応援団として様々な活動を行っている。ASCCの活動は、本校の持続可能な教育活動に大きく貢献しているものであり、今回は、ASCCとの連携・協働で行った自分づくり(キャリア)教育に焦点を当て、生徒の感想や、引き出した価値を紹介する。

○職業体験(2年)

セブン&アイ・ホールディングス伊藤研修センターにおいて、2年生が職業体験を行っている。職業体験から、企業を通して、循環型社会や持続可能な活動に向けての価値観を学ぶことできた。

(生徒の感想から)

「ドローンを使って買い物困難者の支援を行ったり、食品ロスへの取組で売れ残った食品を肥料にして野菜を作る循環型農業を行ったりしていることを初めて知った。」

「企業理念のひとつである「誠実」というところが、お客様に対する様々な工夫となっていることに気付いた。」



○マナー講座(3年)

講師の方から、マナーや面接の心構えなど、卒業後も必要となることを学ぶことができた。



○夢・応援プログラム(小6・1年)

離乳食作り、薬局調剤体験、空調機設備体験、ドローン体験などを含めて8つの職業体験を小中合同で行いました。体験の楽しさだけでなく、働くことの意義についての気づきが見られた。



3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

- (1) 緑化運動では、花を植えたというだけでなく、地域の方や個別支援学級と連携することで、継続していける活動とした。
- (2) 自分づくり(キャリア)教育では、体験に對しての感想だけでなく、ESDの視点でも振り返る場面を増やす必要性を感じた。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

本校では、ESDに取り組むことが、学校教育目標達成のための手立てのひとつとなっている。

2年生職業体験では、食品ロス削減と循環型農業への取組が、また、小6と中1の夢・応援プログラムでは、空調機設備体験を通じて二酸化炭素排出抑制の企業努力やドローン体験を通じた社会課題解決の取組が「持続可能な社会への貢献(体・公)」「思いやりをもち社会に貢献できる人(開)」に結びついている。

さらに、小6と中1が共に学ぶことで、学年を超えたコミュニケーションをしたり、3年生の面接練習の中で、アドバイスをし合ったりすることは、「自分のよさを知る(知)」「相手のよさを認め、共に生きる人(徳・公)」に結びついている。

今後も、ESDの視点をもって、様々な教育活動を見直していきたい。

横浜市立南希望が丘中学校
学校教育目標



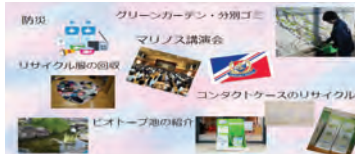
～挑戦・発信・錬磨～

- 主体的に考え、伝える力と課題を解決する力を高める。【知】
 - 人を思いやり、自分や周りを大切にすることを育てる。【徳】
 - 様々なふれあいを通し、豊かな心と体を鍛える。【体・開】
- ESDを通して育成したい資質・能力
- 課題解決力・発信力・コミュニケーション力
(「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」)
 - 自己肯定感・協働・挑戦する気持ち
(「学びに向かう力、人間性等」)



1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) は連携・協働のパートナー

1年間の取組内容



学校保健委員会で各委員会が発表しました

「防災」

まず、SDGsの目標である「①貧困をなくそう」「⑥安全な水とトイレを世界中に」「⑩住み続けられるまちづくりを」「⑱気候変動に具体的な対策を」と防災の関連について学び、「はまっこ防災プロジェクト」のアニメーションを視聴した。

アニメーションでは、実際に横浜で大地震が起きるという内容で、生徒達は「いつか自分が大きな地震を体験するかもしれない」と実感することができた。そのうえで、「(1)地震の歴史と現在(2)地震のしくみ(3)家庭・学校・外出先に潜む危険と備え(4)地震の時の避難(防災マップ)(5)地震の時にとる行動(6)地震と被害」のテーマでそれぞれ自分が興味をもったことを調べ、まとめ、発表を行った。1年生は新聞づくりを行い、3年生はGoogleスライドでまとめた。

次にHUGゲームを行った。HUGゲームを通して、災害時要援護者への配慮をしながら体育館割りを考え、炊き出し場や仮設トイレの配置などの生活空間の確保など、出来事に対して思いのまま意見を出し合ったり、話し合ったりしながら避難所の運営を学んだ。



2 地域や企業、NPOなどの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) ペーパーファイル製作

ステーキホルダー交流会にて、株式会社 kitafuku さんと出会い、その後の交流の中で、協働できることはないか話し合い、「クラフトビールペーパーファイル」を作成することになった。

生徒たちは早速、全校にデザインを募集して投票を行った。たくさんの投票の中から4点のデザインを選んだ。今年度も「企業と一緒に何かできるんだ！」が実現できたことで、来年度は「何ができるのか」「何かしたい」と思っていることが価値だと考えている。



(2) 旭区農業体験

5月から11月まで、保健委員会の代表の生徒たちが農業体験に参加した。苗植えから始まり、つる返しや草取り、畑見学、食育講座、さつまいも収穫、料理教室と地域の様々な方たちと交流を深め、たくさんのことを教わりながら、普段なかなかできない貴重な体験を通して農業について学ぶことができた。

生徒は、「野菜や果物の一つ一つが農家の方たちの丁寧な作業を経て、私たちの口に届いているのだなと思いました」「食の原点を知り、食の大切さ、ありがたさを知りました」といった感想をもつとともに「無駄なくすべて食べられるものなんだ」ということも知り、SDGsとのつながりを感じていた。

3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

SDGsへの取組について、南希望が丘中学校が大切にしていることは、「みんなで考え、みんなで行動する」である。

3年目になる「服のチカラプロジェクト」、2年目になる「レッドカップ販売」や「コンタクトレンズケースの回収」、そして今年度行った「文房具

の回収」。これらの活動は、ただ「行う」だけでなく、まずはみんなで「知る」「考える」ことから始め、それを踏まえてみんなで「行動」している。推進校として3年目を迎えた今年度も、このような姿がたくさん見られた。

そして、今年度はその取組が、さらに学校内、学校外へ「広がり」はじめた年にもなった。

まず、生徒会の各常任委員会では、年間の活動目標をSDGsの達成につながる目標を設定した。「ホールスクール」による取組へ、一歩踏み出すことができた。

また生徒会本部が、中学校ブロックで行った横浜子ども会議で、学区の小学校2校へ「服のチカラプロジェクト」の協力を呼び掛けたところ、両校ともにプロジェクトに参加することになり、子ども服の回収ボックスを両校に設置することができた。南希望が丘中学校のSDGsの取組の一つが、小学校の児童や保護者にも伝わったと感じている。また、地域にも「南希望が丘中学校は、SDGsに取り組んでいる。」ということが徐々に広がり、レッドカップ販売や文房具の回収に、協力してくれる地域の方々が増えてきている。

さらに、ステーキホルダーとの連携・協働の一環として、今年度はペーパーファイルを作成した。昨年度のエコバックと同様に、デザインは生徒から募集し、今年度も価値のある取組ができた。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

SDGs達成に向けた取組は、学校内だけで完結するものでなく、取組を進めていけばいくほど、学校外の人たち、つまり「社会」と繋がっていき、それによって関わる生徒たちの学びもより広く、そして深くなっていく。そこで必要なのは、生徒たちが関わる範囲をより「広げる」ことである。今年度の南希望が丘中学校の取組は、そのスタートの年になったといえる。

来年度は、今年度以上に様々な人たち、そして「社会」と繋がり、生徒たちの学びがより「広く」「深まる」よう、SDGs達成に向けた取組を進めていきたいと考えている。

横浜市立豊田小学校

学校教育目標「豊かにかかり、じっくり考える キラッと☆かがやく豊田っ子」

ESDを通して育成したい資質・能力

「問題を発見する力」「試行錯誤する能力」「協働的に行動する姿勢」「好奇心」「他者を理解する態度・自己を理解する姿勢」「伝え合うことで自分の考えを深化させる力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) は連携・協働のパートナー



季節に合った食べ物は何かな。



自分に合っためあてをきめるぞ!



横濱アイス工場のアイスクリームはこんなにおいしんだな。

私たちの考えた大豆のアイスクリームを絶対、商品化するぞ!!



命を大切にするためには、どんな考えが必要だろう。

生命のかけがえのなさについて一人ひとりが真剣に考えていましたね。



2年生「学級活動」

「旬な食べ物を知り、え(いようゲット!)っ(よくて元気になる)グ(ッド)な体になる食べ方をきめよう。」

本実践では、夏野菜、冬野菜を育てた経験と日々の給食の摂り方について、掛け合わせて食育学習につなげた。生活科では自分の育てたい野菜を育てるために、調べ学習をした。給食では、どの子も自分の食べる量ができる量がわかり、苦手なものも一口食べたり、なめてみたりしている。野菜ごとに育てる時期が違うことから、野菜には「旬」があることを知り、旬の野菜が体にもたらす良さを栄養教諭からクイズやアクティビティを通して学んだ。それをもとに一人ひとりが自分の課題を見つめ直し、めあてを立てた。

この活動に向かう過程でも、食への意識を高めたり、日々の給食から行事食へ派生したり、SDGsの「2 飢餓をゼロに」という別な価値の絵本にも興味を示し、自分たちができることを考えたりする姿も見られた。生活科としてはSDGsの「12 つくる責任 使う責任」の項目も意識できた。食のテーマに向かっていくだけでなく子どもの視野も広がった。給食ではめあてを意識しながら食べ、家族に伝える姿もあった。

3年生「総合的な学習の時間」

「われら、横濱ダイズスターズ！」

国語科で「すがたをかえる大豆」を学習して、子ども達は、大豆が姿を変えて(加工されて)、身近な食品として食べられていることに興味、関心をもった。

横濱アイス工場長沼工場の見学をきっかけに「大豆のデザートを作ってみては。」という意識が高まった。きなこや枝豆アイスなど6つのグループに分かれ、大豆を使ったアイスクリームのプレゼンテーションを行い、横濱アイス工房の方と協働して新製品の開発を行った。

6年生「特別の教科 道徳」

6年生は、最高学年として児童会活動のリーダーとなる。今年度の学年経営方針を考える際、児童一人ひとりの思いやりの心をさらに育みたいという思いを教員同士で確認した。そうした考えのもと、道徳科では、よりよく生きようとする心情を育てるために、生命のかけがえなさに気付く自分を見つめ直す機会となるように学年で学習を進めてきた。

本授業では、ESDの視点として＜構成概念＞公平性＜能力・態度＞批判的に考える力、多面的・総合的に考える力との関連を意識することで、生命の尊厳や、どのように生きていきたいかを考えることを大切にしたい。また、同じ話であっても、人それぞれに違う経験や身近環境を通して、様々な角度から生命について考えていることに気付いていた。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

3年生の総合的な学習の時間では、地域の企業である小野ファーム、横濱アイス工房と連携・協働を進めた。

今までも関わりがあり、横濱アイス工場のアイスクリームが給食のデザートに出ることはあったが、今回の取組では、児童たちが考えた大豆アイスクリームのプレゼンテーションを行い、その提案が本当に商品化されるという学習展開につなげることができた。そのことにより、児童たちの本気度が格段に上がり、自分たちの考えたアイスクリームが採用されるよう、一生懸命に調べ、提案資料を作り、発表する姿が見られた。

また、提案が採用されるように、グループで協力してロイロノートで大豆に関するアンケートを作成したり、他のグループとは違うその材料の特性を徹底的に調べたりする姿がみられた。

上記の児童たちの様子は、学習カードでつかむことができた。例えば、納豆アイスグループでは、納豆アイスクリームを採用してもらうために、納豆の課題である、においやねばねば感をクリアしようと意欲的に調べたことが分かった。納豆のにおいを抑えるためには、フリーズドライ製法があることを知り、その方法で納豆のにおいを抑え、アイスクリームとして商品化することができるという案にまとめた。

また、納豆のにおいを抑えた上で、納豆特有のねばねば感については、そのねばねば感をトルコアイス風にすれば、そのまま生かせるという提案に至ったことがわかった。

このようにして、児童たちは、企業の商品開発に直接関わることで、社会参画の意識が芽生えたといえる。

納豆 アイス グループ
(いいところ)納豆のネバネバや、
においが嫌いでも、ドライ納豆に
すればおいしく食べれるところが
いいと思いました。

3 ESDの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1) 昨年度(1年目)は、教師たちがESD自体を学ぶことから始めた。講師の先生方に講演して頂き、ESDの基本を教えて頂いた。また、授業研究の教科を生活・総合的な学習の時間に定めて1年目の研究を行っていた。その中で、ESDのどのような要素が入っているのか、児童たちの学習活動の中でどのような価値を引き出すことができるかを模索していった。

(2) ESD推進研究2年目の今年度は、教科等を定めることなく、いろいろな教科等でESDの価値を引き出すことに取り組んだ。その取組を通して、特別の教科道徳などいろいろな教科等にESDの視点が含まれていることを実感することができた。また、講師の先生方からは、普段の授業で教師がESDの視点を意識して学習を進めることが大切だということを教わった。

(3) 今年度、教科等の幅は広がったが、育成を目指す構成概念や能力・態度は、まだまだ偏りがあるといわざるを得ない。この構成概念や育てたい能力・態度を整理して、系統的に積み重ねて指導していく必要があると感じた。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

前述のように、研究の教科等を広げることにより、普段の様々な授業の中でESDの視点を意識できるようになった。例えば、講師の先生から、特別の教科道徳は従来からESDの視点が含まれていることを教わり、道徳の授業をはじめ普段のいろいろな教科等でもESDの視点で授業を行う意識が学校全体で高まった。このことにより、児童達も普段から行っている委員会やたわり活動、ユニセフ募金などにもESDの視点で考える姿勢が広がっている。

横浜市立鉄小学校

学校教育目標「人とかがわり 創り出す 笑顔あふれる鉄小 ～まちにふれ、土に親しみ、人から学び、ともにのびゆく鉄の子～」

ESDを通して育成したい資質・能力

「周りを巻き込んで、他者とともに学ぶ姿勢」「広い視野で物事を見て、自分で判断する力」

「異質な他者への寛容な態度」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) シャブラニールは連携・協働のパートナー



ワークショップの様子



バングラデシュのストリートチルドレンの暮らしについて学ぶ様子

6年生 「総合的な学習の時間」

「自分たちにできること」

本校は、地域にも自然環境にも恵まれた学区に位置していて、子どもたちも地域に根付いた生活をしている。学区には農地も多く、入学から卒業までの間に米や梨など、地域の協力者とともに年間を通して多くの野菜を作っている。その活動を通して、人から学び、ともにのびゆく力を育成したいと考えている。

6年生は、平和スピーチコンテストの学習で世界の国々の貧困や児童労働などの問題を目の当たりにして、自分たちにできることは何かを考えて実践に取り組んできた。

活動ではまず、平和スピーチコンテストの学習で、世界の人々の様々な暮らしや社会問題について知り、自分たちの身近な課題や暮らしを変えていくことが世界平和につながるということに気づくことができた。そこで、児童労働に課題意識を持ち、認定 NPO 法人 シャブラニール＝市民による海外協力の会の方のワークショップを通して、バングラデシュの社会課題や児童労働について知ることができた。

ワークショップののち、自分たちにできることについて模索し始めた。①寄付 ②バングラデシュの児童労働について知ってもらう活動 ③フェアトレード商品の販売活動 などの様々な取組について話し合っていた。募金やフェアトレード商品の販売活動は、自分たちのお金を動かすことから、一度はできるものの持続可能かどうかで考えると疑問が残った。よくよく調べてみると、洋服を送る支援をしている団体もあるが、受け取れなくなった洋服の処理や配当など、現地の問題も散見された。

話し合いを重ねる中で、家庭にある日用品を換金して現地支援に回す「ステナイ生活」の取組に参加することを決定した。また、全校児童に伝える活動をし、鉄小学校として取り組むことにした。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 学校教育目標との関連

本校では、「人とかがわり 創り出す 笑顔あふれる鉄小 ～まちにふれ、土に親しみ、人から学び、ともにのびゆく鉄の子～」という学校教育目標を掲げ、地域の方々とともに、子どもたちを中心に、保護者、地域、教職員が丸となって学校教育目標達成に向けて力を尽くしてきた。特に、総合的な学習の時間、生活科の学習では、地域の方々とともに、稲作や梨、多くの野菜の栽培を通して、30年以上の長きにわたり実践を積み重ねて来た。子どもたちは、人とのかかわりを通して新たな視点に気づき、学びが深まっていくことを知っている。世界平和に向けて自分たちにできることを模索する中で、NPOの方と連携していくこと、自然な流れだった。

(2) 第三者視点から当事者へ

児童労働などの解決に向けて、実際に取り組んでいる人の話が聞きたいと考えた。インターネットや、本、雑誌などにある情報は第三者の視点で描かれていたからだ。シャブラニールの方によるワークショップを通して、バングラデシュのストリートチルドレンの生の声を知ることができた。自分たちの日常を振り返り、バングラデシュの子どもたちのそれと比較するというものだった。第三者的視点で取り組んでいた子どもたちは、「自分たちでもできることをしなきゃ」と、当事者側に引き寄せられた。

どのような取組ができるのか、現地のみなが必要としていることは何か、シャブラニールの方の授業を通して多くのことを学ぶことができた。



3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

(1) 自分たちの自己満足になっていないか

自分たちにできることを探し、調べ学習や話し合い活動を経て、募金や衣類の寄付、フードバンクなどの活動に参加したいと、方向性が決まった。しかし、「持続可能か」「本当に効果があるか」という視点で考えると、長続きしないものばかりだった。

「皆さんにできること、続けられること、何でもいいです。考えてみてください。」NPOの方のこの言葉で、いつも「自分たちの力で持続可能かどうか」という視点に立つことができた。様々な活動を調べ、話し合ったことから「ステナイ生活」に参加することと、バングラデシュの児童労働の問題を知ってもらうことをしていこうということとなった。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 「誰一人取り残さない」を共有

自分たちの学年だけでなく、全校に広げる計画を立てることで、一人ひとりが自分事としてとらえることができた。南アジアの状況や6年生の取組について伝える資料を作る際には、誰が見てもわかるようする見せ方や、少しでも協力しようと思ってもらえるような工夫など「だれ一人取り残さない」という考え方を共有することができた。それは、この学習の中だけではなく、他の教科や領域、日常生活の中にも波及している。

1月の「ステナイ生活(不用品回収)」を実施後、持続可能な社会のつくり手育成に向けて、意欲を高めていきたい。

横浜市立並木中学校

学校教育目標「共生 ～仲間とともに高め合える人～」

ESDを通して育成したい資質・能力

道徳や特別活動、各教科との関連性を重視しながら、問題解決的・体験的学習に取り組み、持続可能な社会に向けて、問題解決能力やコミュニケーション能力を育成することを旨とする。

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体 環境学習 は連携・協働のパートナー



【1 学年環境学習】



【1 学年福祉体験学習】



【2 学年平和学習】



【2 学年職場体験学習】

「共生 ～仲間とともに高め合える人～」のという学校教育目標から

- 気づき、考える力
- 先を見据えて行動する力
- 発信する力・伝え合う力

という育成したい資質・能力を設定した。それを、「総合的な学習の時間」を核として、道徳や特別活動、各教科との関連性を重視しながら、問題解決的・体験的学習に取り組み、持続可能な社会に向けて、問題解決能力やコミュニケーション能力を育成することを旨とした活動を行っている。

○総合的な学習の時間

【1 学年】

目標	環境や福祉の目標に視点を置き、身近なSDGsの取組を知ることで、課題を自分事と捉え、将来自分はどうのように目標達成に貢献できるかを考えることができるようにする。
具体	環境学習（横浜環境保全） 福祉体験学習（金沢スポーツセンター） 人権作文・国際平和スピーチコンテスト

【2 学年】

目標	人権や平和、経済や産業の目標に視点を置き、働くことの意義や持続可能な経済成長が実現できる社会に向けて自分ができる取組を考えたり、職場体験を通して感じたこと自分の進路選択に生かしたりすることができるようにする。
具体	平和学習/校外学習（国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館） 職業講話/職場体験学習（地域企業・高等専修学校） 人権作文・国際平和スピーチコンテスト

【3 学年】

目標	誰もが安全・安心に暮らせるまち、伝統や文化の継承の目標に視点を置き、修学旅行や調べ学習を通して学んだことを積極的に発信できるようにする。
具体	修学旅行（木場潟公園東園地） 進路学習 人権作文・国際平和スピーチコンテスト

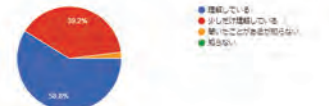
2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

【平和学習の振り返り】

【入学前】「SDGs」とはなにが理解していましたが、31 件の回答



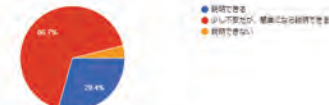
【2年前期】「SDGs」とはなにが理解していましたが、31 件の回答



【入学前】「SDGs」とはなにが説明できましたか、30 件の回答



【2年前期】「SDGs」とはなにが説明できましたか、31 件の回答



【これまで中学校での学習を通して、SDGsへの興味・関心は高まりましたか、【2年前期】31 件の回答



【これまで中学校での学習を通して、SDGsへの理解は深まりましたか、【2年前期】31 件の回答



【これまで中学校での学習を通して、SDGsに関する行動をしたいという意識は高まりましたか、【2年前期】31 件の回答



3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

本校は3年前からSDGsに関連付けた学習を始めた。今回は、2年生の取組にフォーカスをして、平和学習後に「SDGsへの理解・説明」、「学習を通しての考え」の変容をみるためにChromebookを活用して学年全員にアンケートを実施した。

4 学校全体（ホールスクール）でESDを取り組むことによって引き出すことができた価値

アンケートの結果から、1年生で学んできたSDGsへの理解が生徒の意識の中では深まっているように感じる。生徒たち自身に「行動宣言」という形で、自分に何ができるのかを考えさせた。学習直後は、行動を起こそうとする姿勢が見受けられた。今後、後期の職場体験学習後にアンケートを実施し、育成を目指す力と生徒の実際の乖離を縮めていきたい。

今後2年間で、さらに学びを充実させ、そこから生徒がどのような価値を見出していくのかを研究していきたい。

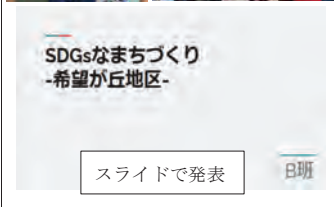
横浜市立希望が丘中学校

学校教育目標「人を愛し、人に愛されながら、夢や目標をかなえるために」

ESDを通して育成したい資質・能力

「課題解決能力」「仲間と協働する力」「世界の問題や課題に目を向ける力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) 福祉厚生委員会は連携・協働のパートナー



福祉厚生委員会

【フードドライブ活動】

福祉厚生委員会が中心となって、周知活動、当日の回収活動、結果報告を行った。特に周知活動では、ポスターだけではなく、PR動画を作成し昼食時に流した。集めた食料品は「資源循環局」によって回収され、フードバンクに寄付された。生徒たちからは、周知方法への反省点が多く上がった。

【服のカプロジェクト】

昨年度のESD推進校児童生徒交流会の情報等をもとに、今年度から「UNIQLO」の「服のカプロジェクト」に参加した。事前授業は、家庭科にて衣生活の授業をしていた一年生を対象に行われた。実際に届けられた服を着ている姿や服を必要としている人たちの声を聴いた生徒たちからは「誰かの役に立つのなら協力したい」というような意思や「難民」の存在に関心を向ける姿勢が見られた。

その後、福祉厚生委員会が中心に周知活動や回収活動、服の整理・梱包作業を行った。周知活動では、フードドライブ活動で出た反省を生かし、宣伝期間や回数を増やし、PR動画の内容を端的でわかりやすくキャッチーなものにする工夫を行った。また、チラシを配布するだけでなく、配ったチラシの注目してほしい部分を各クラスで説明し、自分で線を引いてもらい参加意識を高めた。

当日は、中学生だけではなく小学生や地域の方々も多く参加した。宣伝の効果もあり、最終的に1,957着の服が集まった。また、この活動を「横浜ケーブルビジョン」に取り上げていただき取材も受けた。前回の活動の反省をもとに、よりよい活動を自分たちで作ろうとする姿勢が見られた。

3年生 総合的な学習の時間

3年生の総合的な学習の時間で、「これから先、生きていく社会が持続可能であるための、自己の生き方・社会との関わり方を理解する」という単元目標のもと、「理想の希望が丘地区」について各学級でSDGsの視点を交えながら、調べ学習を行った。

まずは地域の特徴を捉えるために、班ごとに希望が丘地区の良いところや課題をまとめた。また、旭区の人口推移についても触れることで、今後の希望が丘地区の状況を予想し、そこから課題設定・探究・まとめ発表と行った。

地域の魅力を理解し、住み続けられる理想の街にしていけるために、SDGsの視点をもち一人ひとりが前向きに取り組む姿勢が見られた。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 当事者意識の芽生え

教職員による説明ではなく、UNIQLOの職員による出張授業を受けた。普段学校では出会えない大人からの説明だったことで、生徒はいつも以上に真剣に話を聞いていた。また、UNIQLOの職員から、ボランティアに参加することの意義や必要性、どのように役立つかを直接聞くことで「自分も協力しよう」「力になれるかもしれない」といった当事者意識が授業後のアンケートから見る事ができた。

(2) 活動範囲の拡大

中学校の中で活動することがほとんどだったが、「服のカプロジェクト」や「フードドライブ活動」を通して、地域の方とのつながりが生まれてきた。生徒の話し合いの中で、周辺の小学校や地域の方々が出てくるようになり、地域の一員としての意識をもつ第一歩を踏み出し、良いスタートが切れていると感じた。

3 ESDの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1) 活動の振り返りを次につなげるよう促す

「服のカプロジェクト」や「フードドライブ活動」のように、取組が異なっても周知の方法や話し合いの進め方は同様である。そのため、振り返りの際に、次の活動の計画を立てさせるようにした。定例の委員会活動日は月に一度しかないため、活動への意欲が冷めないうちに話し合いをさせることで、より具体的な改善方法が出せた。

(2) 各教科等との関連を図る

今年度から、各教科等の単元とSDGsの目標を関連付けて授業を行うようにしたため、委員会での活動も授業との関連を図るよう心掛けた。例えば、「服のカプロジェクト」は家庭科

の衣生活に関する授業と関連付けた。一年生に、「自分のクローゼットの中身を衣替えし、要らない衣服と必要な衣服を分ける」ことを夏休みの課題として出していたため、それに合わせて夏休み前に出張授業を行い、内容をリンクさせた。授業と関連づけることで、よりSDGsが自分たちの身近にあることや、自分たちの行動が課題解決につながっていると認識させることができた。

(2) 縦割りでの活動

仲間と協働する力を養うために、委員会活動では、学年の壁を越えて活動に取り組みさせた。準備の段階から学年バラバラに席を組ませ、互いの意見を受け入れ、協力して活動を進める姿が見られた。下級生は小学校での活動を参考に意見し、上級生はそれをくみ取りつつ、上級生としての視点で話を進めることで、横のつながりだけでは生まれなかった新たな気付きを生み出すことができた。今後も学年問わず、他者と協働して課題解決する力を育てていきたい。

4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 生徒のSDGsへの関心の高まり

今年度から、各委員会の年間目標にSDGsの目標を紐づけて活動を進めた。今までは生徒会本部のみが、SDGsを意識した活動をしていたが、全委員会が紐づけたことにより、SDGsの認知度や関心が高まる様子が見られた。今年度は、福祉厚生委員会が中心となって全校に向けての活動を行ったが、来年度は他の委員会の活動も全校に広げていきたい。

(2) 教科等横断的な活動の広がり

家庭科や保健体育科など様々な教科等の学びを委員会活動に結びつけて考え、学びを深めることができた。学んだことを目の前の課題解決に生かしていく力を育てていきたい。

横浜市立義務教育学校緑園学園
 学校教育目標「真のグローバル人材に 自主 協働 創造」
 ESDを通して育成したい資質・能力
 「協働する力」「課題解決する力」

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体(例) 三浦市立三崎中学校 は連携・協働のパートナー



野球部 部員による活動の意義づけ



食育サポーター 食とSDGs



8年生 「総合」 「海の豊かさを守る 地域のSDGs」
 昨年度(7年次)より3年計画で取り組んでいる実践。7年次は「緑園地域のSDGs」8年次は、「海の豊かさを守る」を中心テーマとして取り組んでいる。自然教室の行程中に三浦市立三崎中学校との交流を組み込んだのが特長である。昨年度末に共通のテーマを設定し、オンラインによる交流を行った。それを受けて、本年は対面によるポスターセッションを行った。準備段階では、地域の方や近隣にあるフェリス学院大学の学生の前で発表して、アドバイスや意見交換などを行った。また、義務教育学校の特色でもある、前期課程児童への発表も行い、校内での異学年交流にも生かした。
 この成果を学校運営協議会で報告をし、地域の活性化委員会内にあるSDGs部会と連携をすることとなった。緑園地域のSDGsを通して、生徒と地域の大人とが緑園地域の課題解決に向けて意見交換を行うことで、自分たちの考えが生かされる有用感を得ている。

野球部 「自分たちの活動について考えよう」
 野球部顧問が部活動でもESDについて取り組めないうかを考え、生徒主体の活動として取り組んだのが「野球部SDGsミーティング」である。日頃行っている活動をSDGsの観点から見直すと、どんなことが見えてくるかを顧問が部員に考えさせることで、部員自身が自分たちで活動に新しい価値を見出すという試みである。SDGsを身近なものとして捉えるのに非常に有効であった。この試みを学校運営協議会で報告することで、地域との連携が生まれた。使われなくなった野球道具の寄付(不平等をなくす)のお願いや、明治大学女子野球部・日本大学女子野球部との交流会への児童参加(ジェンダー平等)などは、多くの関心を集めることができた。

食育サポーター 「食の観点から考えよう」
 食育実践推進担当とESD担当とで協働した企画。本校の教職員が日めくり形式の掲示物を作成し、その後、他校の教職員とも協働して掲示物を作成・共有し、各校で掲示した。掲示物によって、生徒の意識を高めた後、校内で「食育サポーター」を生徒から募集し、教職員からインタビュー形式で食とSDGsとの関連性について情報を収集。その後、掲示物を作成して学年のフロアに掲示している。生徒たちは教職員それぞれの回答から多面的な見方・考え方に触れることができていた。

2 地域や企業、NPOなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 本校の現状
 開校2年目となり、教育活動の中身を充実させたいという教職員の機運が高まってきている。そのなかで、本校の教育活動の柱の一つである「ESD」活動を充実させるため、教職員一人ひとりと面談を通して「一人1SDGs」に挑戦することにした。学年や授業に加え、部活動や委員会活動など、それぞれの校務分掌において”Act Locally”が自分たちの身近なところにあることに気づくとともに、地域とつながる視点をもつなど活動の幅が広がっている。

(2) 連携することによる変容
 昨年度より先行実践していた8学年は他の中学校や大学との連携結果を学校運営協議会で報告をし、地域との連携につなげている。

しっかりと目的意識をもって地域との打ち合わせに臨むと、多くのメリットがあることに気づいた。特に企業や大学側は地域との連携を強く意識しており、児童生徒と関わる機会を探しているため、建設的な意見交換につながることが多い。生徒にとっては「普段接する機会のない身近な大人」と関われる機会であり、貴重な成長の場となっている。また、学校だけではお願いしづらいことも地域が率先して行ってくれるなど、教職員の意識向上にもつながっている。



(大学生との意見交換会の様子)

野球部では生徒達とのミーティングを通して、地域の方々に「使わなくなった野球道具の寄付のお願い」を行った。経済的な事情による競技機会の不平等をなくすため、集まった道具を部で使うのと同時に、海外への寄付にもつなげようと考えている。普段行っている活動に新しい価値を見つけることにつながっている。

3 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

(1) 「自分にもできること」を目指す。
 本校には強力な推進者がいるものの、周囲が受け身の姿勢になっていたり、「自分にはあそこまでできない」と思っていたりする様子が見られた。そこで、今年度は一人ひとりの意識向上を目標に、自分にできるESDを考えてもらうこととした。SDGsへの意識が向上し、SDGsについて触れる教職員が増えれば、生徒もSDGsに触れる機会が増えていく。教職員の成長が子どもの成長につながってきている。

(2) 「生徒が成長する姿」をイメージする
 アイデアを実行に移すまでには多くの課題がある。しかし、課題ばかりを挙げては先には進まない。アイデアを積極的に認め、実現できる方向に考えていくことが重要である。中でも一番大事なことは、生徒がどのように成長できるかを分かるようにすることである。本校の取組の一つにペットボトルキャップアートの制作がある。前期課程の児童に、生徒がキャップを集める意義を説明し、一緒に制作するというものである。表現力や協働する力の育成がイメージとして分かるため、教職員からの協力もスムーズに得られたESDの実践である。



4 学校全体(ホールスクール)でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 課題解決力、協働する力の育成につながる
 生徒の振り返りからは、地域や異学年との交流によって、課題に対して広い視野で思考すること、異なる立場の人たちと協働することの大切さに気付いたことが読み取れる。

(2) 自己有用感の育成につながる
 生徒の考えや意見が地域の方や大学生、企業の方に共感されることが多くある。その経験が次への活動意欲につながっている。

第2章

社会に開かれた教育課程における連携・協働の意義調査研究報告書
複雑性に向き合い、学びと協働の往還による探究モードへの挑戦

社会に開かれた教育課程における連携・協働の意義¹

複雑性に向き合い、学びと協働の往還による探究モードへの挑戦

佐藤真久

横浜市 ESD 推進コンソーシアム・コーディネーター／
東京都市大学大学院 環境情報学研究所 教授

1. はじめに

これまでも長い間、「学び」と「協働」という言葉は使用されてきている。しかしながら、VUCA 社会（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の高い社会）に対応し、持続可能な社会を構築する時代において、「学び」と「協働」は異なる意味を持って使われることが増えてきた。パラダイムの転換とは、このように、言葉や行動の意味づけが変わるということであり、日々使用している用語の意味が変わることを自覚する必要がある。本稿では、まず、今日的状況において求められる「学びのシフト」と、「協働のシフト」について、筆者が深く関わってきた「国連・ESD の 10 年」（2005-2014）とその後継プログラム（グローバルアクション・プログラム：GAP、ESD for 2030）における知見や、さまざまな協働取組事業における知見に基づいて、考察することとしたい。その後、求められる「学びと協働の連動性」について、(1) 社会的学習（social learning）に関する理論研究、(2) 学びと協働の往還による探究モード（生涯探究社会）に関する論考に基づいて、考察を深めることとする。最後に、これらの「学びのシフト」、「協働のシフト」、「学びと協働の連動性」に関する考察を踏まえ、2017 年に横浜市教育委員会において開発された「横浜市 ESD モデル」の意味合いを深めることとしたい。

2. 求められる「学びのシフト」

2-1. 正解のない／複数ある問いとともに向き合う学び

これまでの「学び」は、知識や技能を習得することが目的であった。これからは、習得してきた知識・技能を、実社会において活用・発揮することが求められている。社会との関わりの中で自身の資質・能力を育成していくこともまた重要であろう。さらには、未知な状況に挑戦し、失敗を通して自分のものとするような取組や、様々な教科の見方・考え方を活用して、社会を見る視点を育て、視座を高める取組も必要だろう。これまでの共通の与えられた答えを追求するのではなく、正解のない、正解が複数ある問いとともにある時代において、現時点での自身の内省からの答えを生み出し、他者との対話、他者とのコミュニケーションの中で最適解を更新していく取組もまた重要であると言える。

¹ 本稿は、[佐藤真久・広石拓司（2018）『ソーシャル・プロジェクトを成功に導く 12 ステッパーコレクティブな協働なら解決できる！SDGs 時代の複雑な社会問題』、みくに出版]、[佐藤真久・広石拓司（2020）『SDGs 時代からソーシャル・プロジェクトの担い手へー持続可能な世界に向けて好循環を生み出す人のあり方・学び方・働き方』、みくに出版]に基づき、大幅な加筆修正をしている。

2-2. 求められる学びのプロセス～「国連・ESD の 10 年」の知見に基づいて

「学びのシフト」においては、筆者が深く関わってきた国内外の「持続可能な開発のための教育」（ESD）の議論と経験を活かすことができる。UNESCO（2011）は、「ESD における重要な学習プロセス」として、(1) 協働と対話のプロセス、(2) 全体システム（ホールシステム）として参画するプロセス、(3) カリキュラムの刷新を行うプロセス（教授と学習ともに）、(4) 行動的で参加型学習のプロセス、を提示している。さらには、「ESD における重要な学習として」、(1) 批判的投げかけ、(2) 自身の価値観を明確化、(3) より積極的に持続可能な未来を描くこと、(4) 体系的思考、(5) 応用的学習による対応、(6) 伝統と革新の間に見られる論理体系の構築などを可能にする学び、を提示している（UNESCO、2011）²。さらに、佐藤（2020）は、「国連・ESD の 10 年」の知見として、(1) 持続可能性にかかる諸側面（環境、社会・文化、経済）の統合的思考の構築、(2) 異なる学習アプローチ（ABOUT：知識・技能伝達、IN：体験、FOR：態度・行動、AS：省察・内発性）の連動性、(3) 社会的学習（協働しながら学び合う）、(4) 個人変容と社会変容の学びの連関、(5) 地球市民としての自覚、(6) 持続可能な社会の構築に向けた実践におけるものの捉え方（ESD 4 レンズ：統合的、文脈的、批判的、変容的レンズ）、(7) 変容を促すコミュニケーション力、を提示している。

2-3. 持続可能な社会の構築に資するものの捉え方～ESD 4 レンズ

前項の指摘の一つにもあるように、UNESCO は、「国連・ESD の 10 年」の経験を通して、持続可能な社会の構築に向けた実践におけるものの捉え方として、ESD4 レンズ（統合的、批判的、文脈的、変容的）を提示している（UNESCO、2012）³。統合的レンズ（integrative lens）は、課題・資源・時間・空間・人といったものを、つなげ、関連付けることを意味する。従来、別々であったものをつなげることにより、新たな課題の設定や、問題の統合的・同時的な解決に資するといえるだろう。批判的レンズ（critical lens）は、課題の再設定や捉え直し、意味付け、学びほぐしを意味する。今までの課題設定や捉え方を疑い、多様な角度から捉え直し、意味付けることにより、対象が異なるように見えることを可能にしている。文脈的レンズ（contextual lens）は、身近な文脈（歴史や地域）、地域・世界の文脈を活かすことを意味する。変容的レンズ（transformative lens）は、個人・組織・社会の変容を意味する。このように、持続可能な社会の構築に向けた実践におけるものの捉え方は、これまで分断化されたもの、要素として取り扱ってきたものを見直し、固定化されたものの設定や捉え方を見直し、表層的な捉え方に背景や文脈を組み入れることで見直し、変えれない・変わらないと捉えてきたものを見直すことにも貢献するだろう。

2-4. 他者との関わり・協働を前提とした資質・能力の獲得～持続可能性キー・コンピテンシー

「国連・ESD の 10 年」はその 10 年が終了するものの、後継プログラム（GAP、ESD for 2030）を通して、継続的に知見が蓄積されてきている。その一つとして、UNESCO は、2017 年に『持続可能な開発目標のための教育－学習目的』（UNESCO、2017）⁴を発表し、その文書の中で、持続可能な社会の担い手に求める資質・行動様式として「持続可能性キー・コンピテンシー」を提示した（図 1）。「持続

² UNESCO, 2011, ESD, an expert review of process and learning, UNESCO, Paris.

³ UNESCO, 2012, Shaping the Education of Tomorrow, 2012 Full-length Report on the UN Decade of Education for Sustainable Development, UNESCO, Paris.

⁴ UNESCO, 2017, Education for Sustainable Development Goals, Learning Objectives, UNESCO, Paris.

可能性キー・コンピテンシー」は、論理的思考やコミュニケーション能力など、従来の資質能力を否定するものではなく、むしろそれらを基礎的なコンピテンシーとして位置づけている。さらに「持続可能性キー・コンピテンシー」(図1)は、全ての獲得プロセスにおいて、他者との関わり、協働を前提としている点を踏まえる必要がある。社会での他者との関わり、協働的な取組を通して、多様な主体とのコミュニケーションを深め、統合的・多義的に考え、行動すること自体が、社会変容に貢献するだけでなく、自身の「持続可能性キー・コンピテンシー」を高めることにもつながるため、社会変容と個人変容の連動を促す好循環が生まれるといえよう。



図1：他者との関わり、協働を前提とした資質・行動様式
～持続可能性キー・コンピテンシー (UNESCO, 2017)

3. 求められる「協働のシフト」

3-1. 実施目的に対応した「多様な協働形態」の構築と「協働のしくみ化」

「協働」という言葉が、これまで長い間、使用されてきている中で、今日の VUCA 社会に対応し、持続可能な社会の構築を目指すためには、「協働のシフト」もまた求められている。これからの社会に求められる協働の姿として、佐藤・広石 (2018)⁵、佐藤・広石 (2020)⁶に基づいて表1を作成した。表1のとおり、実施目的に対応して「多様な協働形態」を構築しつつ、協働の多義性を踏まえることが、多様な主体との協働を可能にすると言えるだろう。さらには、プロセスとしくみ(ガバナンス)に配慮し、活動結果(アウトプット)のみならず成果(アウトカム、インパクト)を生み出すための実施段階と技術(ツール)にも目を向けていくことの重要性が指摘されている。今日では、公民連携(PPP)、コレクティブ・インパクトや、マルチステークホルダー・パートナーシップなどの協働の形態も報告されており、より、実施目的と状況、ニーズに合わせた協働形態の構築が期待される。

⁵ 佐藤真久・広石拓司 (2018) 『ソーシャル・プロジェクトを成功に導く 12 ステップ・コレクティブな協働なら解決できる！SDGs時代の複雑な社会問題』、みくに出版

⁶ 佐藤真久・広石拓司 (2020) 『SDGs時代からソーシャル・プロジェクトの担い手へー持続可能な世界に向けて好循環を生み出す人のあり方・学び方・働き方』、みくに出版

表1:これからの社会に求められる協働の姿

- **実施目的に対応した多様な協働形態**—これまでの協働は、ある明確な目的に基づいて実施する事業協働(共催や後援、実行委員会、企画立案、情報交換など)の形態を有していたが、これからの協働は、これらの「事業協働」に加えて、今後は、「戦略協働」(共有目的を実現するために戦略的に協働を行う形態)、「政策協働」(共有目的を実現するために行政と政策的に協働を行う形態)も必要とされている。戦略協働、政策協働は、共有されたビジョンに基づいて、中長期を通して実施される協働の形態(星見型の協働)であるといえよう。戦略協働、政策協働は、これまで主流であった自治体による自治(団体自治)を超えて、多様な主体が参加、参画、行動、協働を可能にする地域住民による自治(住民自治)にも貢献するといえよう。
- **協働の多義性**—協働は、これまで社会変容の手段として位置づけられてきた(手段としての協働)。しかしながら、協働には、多様な主体がかかわり続けることによる認知バイアスの克服や学びの促進、チーム学習の深化、社会的関係性の構築、主体形成をも可能にするという目的性も有している(目的としての協働)。さらには、SDGsにおいて指摘されている「誰一人取り残さない社会づくり」を考える際には、多様な主体を巻き込む参加の場としても有効であり、社会包摂的社会、社会包容的社会に資する参加の権利も有している(権利としての協働)。このような、協働の多義性を踏まえることを通して、協働の取組を多角的に理解し、多様な主体との連携を可能にするにもつながるだろう。
- **プロセスの透明性とオープンさ**—これまでの協働は、主に組織内や同質性の高い関係者の間で行われることが多く、情報共有や意思決定、行動範囲は限定的であった。これからの協働においては、多様な動機に基づく、異質性の高い協働が実施、展開されることを踏まえ、プロセスの透明性とオープンさが求められる。そして、それらを全体的にしくみ化し、VUCA社会に対応できるような順応的協働ガバナンス⁷の構築が求められている。参加の誘発や、透明性の確保、運営制度の設計、協働プロセスへの配慮、中間支援機能を組み入れた場のデザインが必要とされている。
- **価値を創り、参加と変容を促す技術の役割**—これまでの技術は、効率性アップやコスト削減、情報収集や発信のツールとして取り扱われてきた。今日の技術は、価値を創り、参加と変容を促すツールとして機能している。生成 AI、デジタルプラットフォームや社会メディアを活かすことを通して、場所や時間を超えた創造的な共同作業(例:市民科学アプローチ)を可能にするといえよう。
- **協働の段階への配慮**—これからの協働を実施するにあたり、(1)問題解決の前提を整える協働(現状認識の共有、協働の枠組の更新など)、(2)問題解決の運営基盤を整える協働(パートナーの発見、参加の誘発、目標の共有、運営制度の設計など)、(3)問題解決の推進力を強化する協働(関係性の改善力の強化、社会的学習、チェンジ・エージェント機能など)、(4)成果を生み出し、定着させる協働(資金や人材の確保、効果的運用、活動結果と成果の評価、しくみづくりを通じた社会への定着)を提示している。協働という言葉が長く使われてきている今日において、協働の概念や、運営基盤、協働の推進強化策、成果を生み出し定着させるしくみづくりなど、これまでの協働と、これからの協働に関する議論を深めるとともに、協働の実施段階への配慮(上述、(1)から(4)が該当)が求められているといえよう。

佐藤・広石 (2018)、佐藤・広石 (2020) に基づき筆者作成

3-2. 協働を通して他者の動機と取組を理解し合う「星見型の協働」へ

そして、VUCA 社会に対応し、持続可能な社会の構築をしていくためには、これまで協働をしてこなかった主体とも力をもち寄る「異質性の高い星見型の協働」が重要であると言える。その際、十分

⁷ 順応的協働ガバナンスにおいては、[佐藤真久・島岡未来子 (2020) 『協働ガバナンスと中間支援機能—環境保全活動を中心に』、筑波書房]に詳しい。

配慮が必要なのは、協働に取り組む様々な主体には、学校の有する動機とは異なる動機があることを理解する必要があるだろう（図2）。これまで学校が関わる協働取組は、「児童生徒の未来」に貢献する主体とのみ協働をしてきたことが否めない。学校が目線であれば、「児童生徒の未来」を主な動機において捉えるのは当然ではあるものの、「児童生徒の未来」のみに貢献する取組は、あくまで学校主体の取組であり、関わる全ての主体の動機を尊重した協働取組ではないと言うこともできよう。地縁組織が「地域の未来」、NPO/NGOが「当事者への寄り添い」、企業が「事業採算性とビジネスモデル」を主な動機にしているように（図2）、VUCA社会に対応し、持続可能な社会の構築においては、異なる動機もまた重要であることを理解する必要があるだろう。このように、異質性の高い異なる主体と協働をするということは、他者目線を理解し、尊重することが求められていると言える。これは、決して、学校が他者と協働をしにくくなるというものではない。むしろ、学校自体が他者目線をもつこと（異なる動機を理解すること）は、児童生徒の人生を豊かにすることに資するものになる。言い換えれば、児童生徒が、将来、社会において一翼を担い、持続可能な社会という「揺れる星」（※明確な社会像がなく、他者とのコミュニケーションによる最適解の更新が必要なため）を目指しながら、力を持ち寄る協働（異質性の高い星見型の協働）を実施・展開する際に必要不可欠な目線を養うことに貢献すると言える。さらには、児童生徒自身のライフステージにおいて、多層的な役割（ライフロール）を有した「ライフキャリア」⁸を機能させるきっかけになるともいえよう。このような他者目線を理解することは、学校にとっても、教職員にとっても、児童生徒にとっても、社会問題や他者を内部化させ、自分ごと化させることに貢献するだろう。

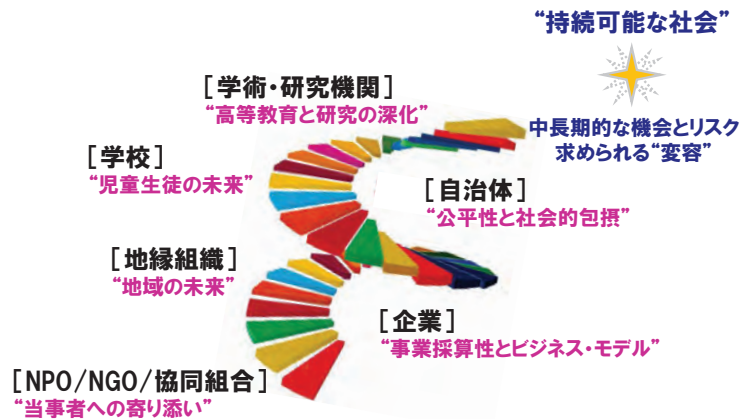


図2：VUCA社会に対応し、持続可能な社会の構築に取り組む様々な主体が有する異なる動機

⁸ 「ライフキャリア」とは、職業人だけでなく、家庭人や市民、学生など、社会における役割がいくつもある重なる層として位置付けるキャリア観。ライフステージには様々な局面が存在し、社会ではそれに応じた参加・貢献のあり方があるという考え方。持続可能な社会の構築には、ライフステージに合わせた多層的な役割を認識し、状況に応じた社会への参加、貢献のあり方が求められている。詳細は、[Super, D. E. & Šverko, B. (Eds.) (1995) Life roles, values, and careers: International findings of the Work Importance Study. Jossey-Bass/Wiley.]を参照されたい。

4. 求められる「学びと協働の連動性」

4-1. 協働しながら学び合う～社会的学習^③

Didham と Ofei-Manu (2015)⁹は、「社会的学習」の概念には、3段階の広がり・深まりがあった点を指摘している（図3）。1960年代には、教室の中だけで学ぶのではなく、実社会において実際の事例を観察・模倣することで、自身の行動をよりよくする大切さが指摘された（社会的学習^①）。その後、1990年代になると、社会環境の変化に対応するために社員同士が学び合いを続ける「学習する組織」など、組織マネジメントの向上として注目されるようになった（社会的学習^②）。さらに、2000年代からは、新しい、予想外の、不確実かつ予測不可能な状況下（VUCA社会）において、外部の人や組織とともに協働をしながら、学び合っていくプロセスが社会的学習の役割として重視されるようになってきている（社会的学習^③）。社会的学習^③では、関わる主体が、協働の開始段階から合意形成をするのではなく、持続可能な社会という「揺れる星」を見ながら、互いの力を持ち寄り協働し、互いに学び合うことを通して、共通の理解を深めていくアプローチを採用している。地域におけるまちづくりのように、複雑な社会問題に取り組む中では、予想外の問題の広がりや当初の考えでは解決できない状況にぶつかることも少なくない。このような時に、「協働をしながら学び合う」といった「学びと協働の連動性」を高めるプロセスがあれば、課題に対する理解や解決策の更新、信頼関係の構築、変化の加速を進めることができるだろう。

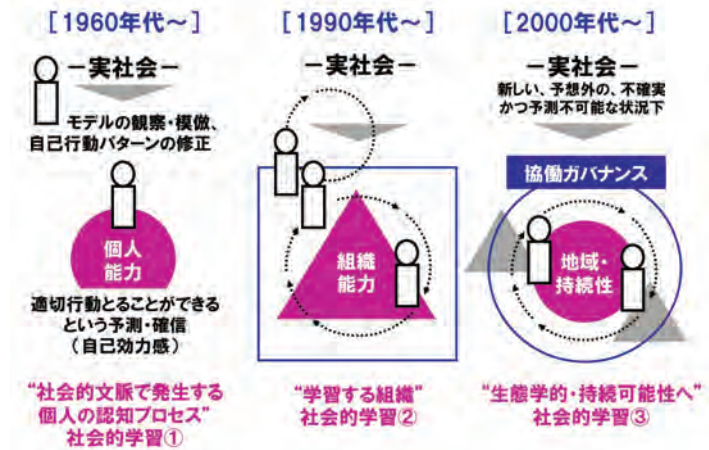


図3：社会的学習の歴史の変遷（佐藤、2018）¹⁰

⁹ Didham, R. J. & Ofei-Manu, R. (2015) Social Learning for Sustainability: Advancing community-based inquiry and collaborative learning for sustainable lifestyles. In/ V. W. Thoresen, R. J. Didham, J. Klein, & D. Doyle (Eds.), Responsible Living: Concepts, education and future perspectives, 233-52. Cham: Springer.

¹⁰ 佐藤真久 (2018) 「コレクティブな協働を実践するための協働ガバナンス」、『ソーシャル・プロジェクトを成功に導く12ステップ』、みくに出版、76-86.

4.2. 複雑性に向き合い、学習と協働の往還による探究モードへの挑戦

さらに、佐藤（2022）¹¹は、学習と協働の連動性を高めた総合的な探究プロセスを通して、課題解決・価値共創を目指す「生涯探究社会」の構築が今日求められている点を強調している（図4）。これまでの教科に基づく個人の学びを主とした取組（第三象限）を基礎としつつも、より複雑性に向き合い、学習と協働の連動性を高める取組（第一象限）が求められていると指摘している。

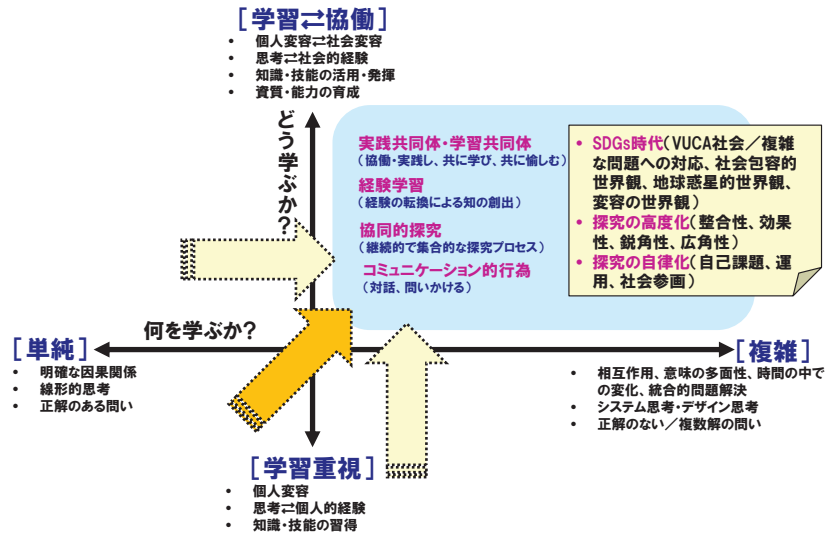


図4：複雑性に向き合い、学習と協働の連動性を高める総合的な探究プロセス
佐藤（2022）¹²に基づき一部加筆修正

5. 横浜市ESDモデル（2017）を活かした「学びと協働の連動性」

前節までは、今日的な状況下における「学びのシフト」、「協働のシフト」、「学びと協働の連動性」に関して考察をしてきた。横浜市教育委員会は、2017年に「国連・ESDの10年」の経験を活かし、UNESCOの「ESD4レンズ」に基づく学校全体の統合アプローチとして、「横浜市ESDモデル」を提案している（横浜市教育委員会、2017）¹³。本節では、前節までの考察を活かし、「横浜市ESDモデル」の意味合いを考察することとした。

¹¹ 佐藤真久（2022）「SDGs時代の教育改革、人事改革、地域における人づくり」、田村学・佐藤真久編著『探究モードへの挑戦—高度化・自律化をめざすSDGs時代の人づくり』、人言洞、1-22。

¹² 佐藤真久（2022）「SDGs時代の教育改革、人事改革、地域における人づくり」、田村学・佐藤真久編著『探究モードへの挑戦—高度化・自律化をめざすSDGs時代の人づくり』、人言洞、1-22。

¹³ 横浜市教育委員会（2017）『見直す、つなげる、変わる、地域で、世界へ』、ESD推進のための教職員研修資料

5.1. 主体的・協働的な授業づくり・学校づくり

横浜市教育委員会（2017）の示す「横浜市ESDモデル」では、主体的・協働的な授業づくり・学校づくりにおいて、カリキュラム・デザインと学校運営の別個のものとして捉えず、その相互の連関を強めることの重要性を指摘している（図5）。カリキュラム・デザインにおいては、ESDの視点を加えることで、単元づくりや教材づくりの充実を図ることの重要性を指摘しつつ、学校運営においては、子どもも先生もさらに活気づける学校全体としての取組として、学校の活性化を図ることの重要性を指摘している。そして、それら相互をつなげる上でも、ESDの視点が重要であるとし、学校の特色や取組をESDの視点で捉え直すことが、相互の取組の連動性を高めることになると指摘している。

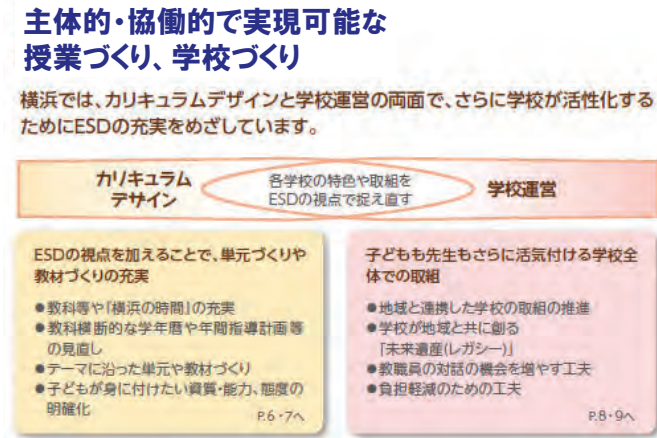


図5：横浜市ESDモデル〜カリキュラム・デザインと学校運営の統合化（横浜市、2017）

5.2. 「ESD4レンズ」を通した見直し活動

「横浜市ESDモデル」では、ESDの視点を加える、ESDの視点で捉え直すことにおいて、UNESCOの「ESD4レンズ」を活用し、平易な言葉として言い換えている。つまり、(1)見直す（批判的レンズ）、(2)つなげる（統合的レンズ）、(3)変わる（変容的レンズ）、(4)地域で、世界で（文脈的レンズ）を使用し、日々の取組を見直す活動として紹介をしている（図6）。図6のタイトルからも読み取れるように、これまで取り組んできた日々の実践を、「ESD4レンズ」を活かすことで、個人の変容と組織の変容と、社会の変容を連動させるといった見直し活動であることが読み取れよう。

ESDを考える、キーワード

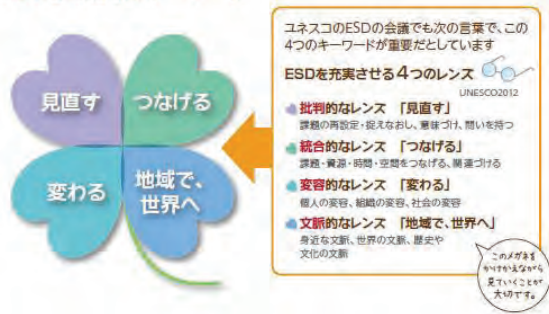


図6：横浜市 ESD モデル～ESD 4 レンズを通した見直し活動（横浜市、2017）

5.3. 個々の取組の連動性を強化する「学校全体アプローチ」（ホールスクール・アプローチ）

さらに「横浜市 ESD モデル」では、学校において分断化された取組を「ESD 4 レンズ」で見直すことを通して、統合的に取り組む学校全体アプローチ「ESD フローラ」（※フローラは花を意味する）を提案している（図7）。本稿で取り扱う、社会に開かれた教育課程としての協働の場づくりも、ただ地域と協働（学社連携）をすればいいのではなく、学校運営や、カリキュラムの編成・実践との連動性を高め、図7のように学校全体アプローチのなかで位置づけることが重要であろう。そして、これらの取組の連動性が、学びのテーマを多様化させ、学校の活性化にも資するものになると言える。

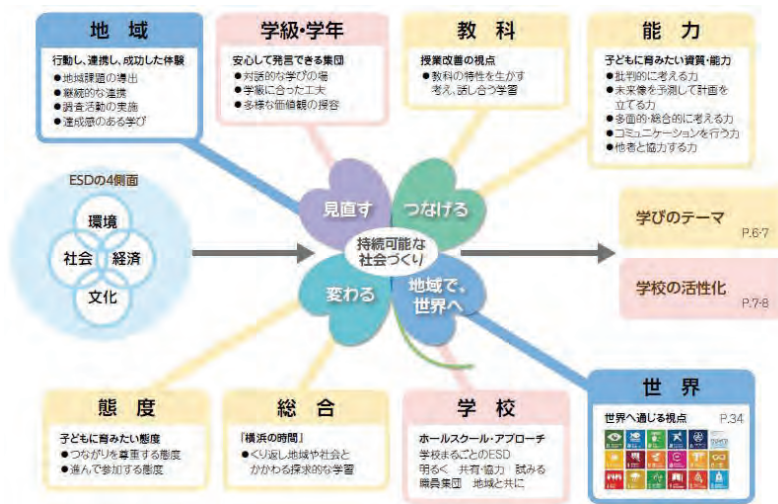


図7：横浜市 ESD モデル～ESD フローラ（横浜市、2017）

5.4. SDGs を学習ツール／協働ツールとして活かす動的な取組へ

学校全体アプローチの推進においては、図7に示すとおり、持続可能な開発目標（SDGs：2016-2030）も、地域と世界をつなげ、学校における取組を豊かにさせる学習ツール／協働ツールとしての役割をもつ。SDGs を学習ツールとして捉えると、様々な学習活動において、「ESD 4 レンズ」を活かすことを通して、学びのテーマをつなぎ（統合的）、多様な目標で見直し（批判的）、地域や日本、世界で直面する課題との接点を深めることを通して意味づけ（文脈的）、社会の変容と個人の変容を促すこと（変容的）に資するであろう。また、SDGs を協働ツールとして捉えると、多様な主体の共通言語であることは、互いの興味・関心を分かち合い、持続可能な社会の構築に向けた力を持ち寄るきっかけとなる。そして、これまでの個々の取組を SDGs ヘタグ付けをする取組を超え（目標対応型）、多様なテーマ、多様な主体に基づく取組が相互に関連をしていくことに気づき（複雑性の発見）、自身も他者も自分ごと化を促しながら、互いに関わり、協働し、持続可能な社会の構築にむけて動的・包括的な取組へとシフトをしていくことが可能になるだろう（図8）。SDGs はまさに、国際的な開発目標としての意味を有しながらも、学校が地域や世界とのつながりを促し、学習のツールとして、協働ツールとして、統合的問題解決・価値共創のツールとしての役割を有していることが理解できる。

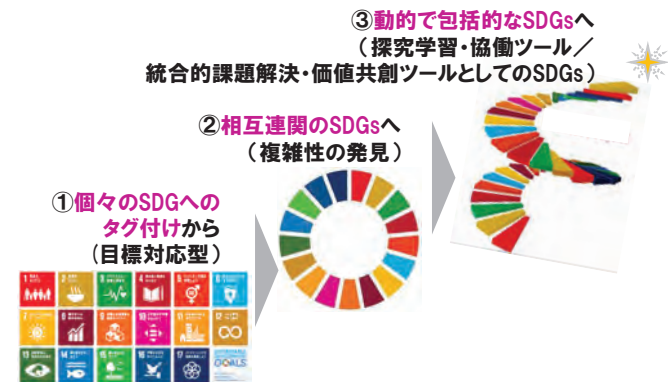


図8：SDGs を学習ツール／協働ツールとして活かす動的な取組へ

6. おわりに

本稿では、まず、今日的状況において求められる「学びのシフト」、「協働のシフト」、「学びと協働の連動性」について考察を深めてきた。ESD に向き合うということは、変容を促すことを意味する。それは、具体的には、これまでの「学び」と「協働」の意味をあらためて捉え直し、さらには「学びと協働の連動性」を高めることを意味しているといえよう。横浜市教育委員会において、2017年に開発された「横浜市 ESD モデル」は、学校と地域と世界をつなげる統合アプローチであり、そのアプローチには、「学びのシフト」と「協働のシフト」、「学びと協働の連動性」の意味合いが組み込まれている。引き続き「横浜市 ESD モデル」を活用しつつ、「学びと協働の連動性」を高めた探究的な取組の実践、実践に基づく知見の蓄積が求められているといえよう。

第3章

横浜市教育委員会としてのESD推進コンソーシアム活動

- 2023年度横浜市ESD推進校ステークホルダー交流会
- 2023年度横浜市教育センター研究発表会
「社会に開かれた教育課程における連携・協働の意義」
- 2023年度横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会

SDG s 達成の担い手育成 (E S D) 推進校 ステークホルダー交流会 season 2

SDG s 達成の担い手育成 (E S D) 推進校 ステークホルダー交流会

1 概要

E S D 推進事業としてこれまで、推進校の教員による情報交換会を定期的に行っていたり、児童生徒のオンライン交流報告会を年に数回開催したりしてきた。今回は新たな試みとして、地域や社会の課題解決に向けて、様々なステークホルダーが連携・協働する見通しをもったりきっかけをつくったりする機会の創造を目的とし、学校と企業等が交流・対話をする場を設定した。

2 日時・場所

令和5年7月31日(月) 10:00~12:00 YOXO BOX (横浜市 スタートアップ成長支援拠点)

3 参加校と参加人数

- | | |
|-----------------|------------------------|
| ・相沢小学校 (教職員1名) | ・西本郷中学校 (教職員2名) |
| ・幸ヶ谷小学校 (教職員2名) | ・南希望が丘中学校 (教職員3名 生徒4名) |
| ・市ヶ尾中学校 (教職員1名) | ・東高等学校 (教職員2名 生徒3名) |
| ・小田中学校 (教職員1名) | ・その他 (教職員等6名) |

4 参加企業等

- ・株式会社 StockBase (備蓄食やノベルティを有効活用するマッチングプラットフォーム)
- ・株式会社 kitafuku (アップサイクルプロダクト「クラフトビールペーパー」の製造開発など)
- ・NPO 法人 AEA 横浜支部 (英語学習支援等を通じたグローバル人材育成)
- ・横浜市 温暖化対策統括本部 (カーボンニュートラルエデュケーション)
- ・大塚製薬 (医薬品・食品の製造・販売) (見学のみ)



5 当日の内容

(1) 前半 10:05~11:10

企業等によるポスターセッションを15分×4回行い、学校からの参加者が4つのブースをまわった。セッションは、企業等のコンパクトなプレゼンテーションから始まり、意見交流では生徒や教職員が口火を切って感想や意見を述べ、活発な交流が行われた。

(2) 後半 11:20~11:55

前半の発表を受けて生徒同士・大人同士の意見交流を行った後、学校と企業等がSDG sを軸に課題解決をしていくための相談や意見交流を行った。参加者が交流会の目的を共有し、連携・協働の価値や必要性に気付いて、お互いに積極的に関わりをもとうとする姿が見られた。



1 概要

夏休み期間中に実施したステークホルダー交流会に参加したスタートアップ企業とは違う企業の参加を募り、地域や社会の課題解決に向けて、様々なステークホルダーが連携・協働する見通しをもったりきっかけをつくったりする機会の創造を目的とし、学校と企業等が交流・対話をする場を設定した。

2 日時・場所

令和5年12月26日(火) 10:00~12:00 YOXO BOX (横浜市 スタートアップ成長支援拠点)

3 参加校と参加人数

- | | |
|----------------------|------------------------|
| ・みなとみらい本町小学校 (教職員1名) | ・南希望が丘中学校 (教職員2名 生徒4名) |
| ・市ヶ尾中学校 (教職員1名) | ・東高等学校 (教職員2名 生徒3名) |
| ・西本郷中学校 (教職員1名 生徒3名) | ・その他 (事務局職員5名) |

4 参加企業等

- ・株式会社ぐるり (史跡巡りの位置情報型 音声ガイド・情報サービス)
- ・hab 株式会社 (子ども専用相乗りタクシーアプリの開発・提供)
- ・株式会社 Lively (孤独を解消するライブコミュニケーションサービス LivelyTalk の提供)
- ・五十鈴ビジネスサポート株式会社 (植物の端材とプラスチックを混合させたアップサイクル)

5 当日の内容

(1) 前半 10:05~11:10

前回同様、企業によるポスターセッションを15分×4回行い、学校からの参加者が4つのブースをまわった。セッションは、企業等のコンパクトなプレゼンテーションから始まり、意見交流では生徒や教職員が口火を切って感想や意見を述べ、活発な交流が行われた。



(2) 後半 11:20~11:55

前半の発表を受けて、学校と企業等がSDG sを軸に課題解決をしていくための相談や意見交流を行った。前回以上に、今回も参加者が交流会の目的を共有し、互いに関わりをもとうとする姿が見られた。中には、中学校同士で意見交流をする場面もあり、お互いの学校での取組や何に課題意識をもっているのかを自然な会話の中でやり取りしていた。また、高校生からは「校内で企業の話聞く機会はあったが、歳の近い起業をした人と話ができて、すごく刺激を受けた。」という振り返りがあり、社会課題の解決と起業を結び付けた生き方に触れることで、自身のキャリアを考えることにもつながった。



2023年度 横浜市教育センター研究発表会 「社会に開かれた教育課程における連携・協働の意義」

第4期横浜市教育振興基本計画（2022-2025）
柱2「ともに未来をつくる力の育成」施策2「持続可能な社会の創り手育成の推進」



日時 2023年12月11日（月）9：45～12：00（受付9：20～）
会場 横浜花咲ビル 3階301研修室（200名）／オンライン（200名）

- ▶第1部 横浜市立SDG s達成の担い手育成（ESD）推進校の実践報告とグループ協議
「地域・企業・NPOなどとの連携・協働に重点を置いたカリキュラム・デザイン」
【報告】みなとみらい本町小学校 南希望が丘中学校 東高等学校
- ▶第2部 講演
「社会に開かれた教育課程における連携・協働の意義」
【講師】東京都市大学環境学部 教授 佐藤 真久 氏（横浜市ESD推進コンソーシアムコーディネーター）
- ▶第3部 質疑応答とグループ振り返り及びまとめ
「社会に開かれた教育課程の実現に向けて必要なこと」

- 横浜市立学校の管理職及び教職員は研修管理システム Leaf からお申し込みください。
研修コード（集合／オンライン）：23ki4231a/23ki4231b
- 横浜市立学校以外の方は、次の URL または、右の二次元コードからアクセスをしてお申込ください。
<https://forms.gle/Sx9UFGSKC5Wu5GZSA>
- オンライン参加を希望された方には、後日ZoomミーティングID・パスワードをお送りします。
オンライン参加の場合は、実践報告及び講演を視聴いただけます。グループ協議・振り返りにつきましては、オンラインの方で行えるよう準備いたしますので、画面をONにしてご参加ください。通信状況や機器の不具合等でご迷惑をお掛けする可能性もありますので、ご承知おきください。
- 申込み期限 2023年12月6日（水） 参加人数に上限があるため、期日前に申し込みを終了することもあります。

主催 横浜市教育委員会 後援
お問合せ 小中学校企画課 045-671-3265 ESD 活動支援センター
E-mail ky-esd@city.yokohama.jp 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター



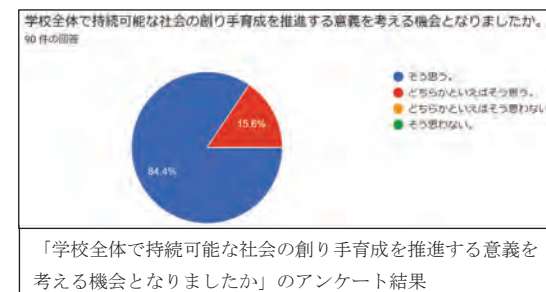
2023年度 横浜市教育センター研究発表会

第4期横浜市教育振興基本計画（2022-2025）

柱2「ともに未来をつくる力の育成」施策2「持続可能な社会の創り手育成の推進」

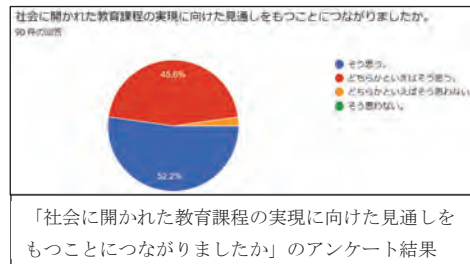
「社会に開かれた教育課程における連携・協働の意義」

- 1 目的
 - ・教育活動の目的と手段を持続可能な社会の創り手育成の視点で見直すことで、学校全体で持続可能な社会の創り手育成を推進する意義を考える。
 - ・地域・企業・NPOなどと連携・協働することによる児童生徒や教職員、関係者等の変容を共有し、その価値を認識することで、社会に開かれた教育課程の実現に向けた見直しをもつ。
 - ・参加者同士の意見交流を通して、各学校の持続可能な社会の創り手育成の充実につなげる。
- 2 日時・参加方法・人数
令和5年12月11日（月）9：45～12：00 横浜花咲ビル301研修室（70名）／オンライン（50名）
- 3 参加者
市立学校管理職及び教諭 市外学校管理職及び教諭 ESD関係者
- 4 当日の内容
(1) 第1部
「地域・企業・NPOなどとの連携・協働に重点を置いたカリキュラムデザイン」をテーマに、みなとみらい本町小学校の小正校長、南希望が丘中学校の内田校長、東高等学校の大山校長に登壇していただき、座談会形式で各校の連携・協働の取組の目的や実現するために試行錯誤したこと、今後の展望をお話しいただいた。この座談会とその後のグループ協議を通して参加者からは、「小中高、大学、地域の方々が集まった研修の意義は大きい。いい学びの機会となりました。」といった振り返りがあり、アンケートの「学校全体で持続可能な社会の創り手育成を推進する意義を考える機会となりましたか」という質問項目の結果も「そう思う」が84.4%、「どちらかといえばそう思う」が15.6%で、肯定的な回答で100%となった。



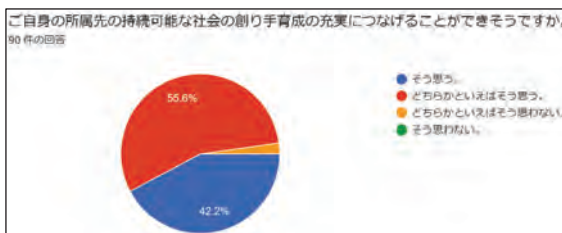
(2) 第2部

「社会に開かれた教育課程における連携・協働の意義」テーマに、東京都市大学教授・本市 ESD 推進コンソーシアムコーディネーターである佐藤教授にご講演いただいた。この講演を通して、参会者からは、「重要性は理解したし、納得のいく講演でした。行事を増やすという感覚ではなく、精査していくという感覚を持ちたく、そのためのマネジメントの重要性を感じています。」といった振り返りがあり、アンケートの「社会に開かれた教育課程の実現に向けた見通しをもつことにつながりましたか」という質問項目の結果も「そう思う」が 52.2%、「どちらかといえばそう思う」が 45.6%で、肯定的な回答で 97.8%となった。



(3) 第3部

「ハマッコラボ・よこはまの未来の作戦会議から見てきた連携・協働の意義」をテーマに、政策局共創推進室共創推進課の養田係長、市民局地域支援部市民協働推進課の金子課長にご報告いただいた。その後、本研究発表会の目的に対応した Google フォームのアンケートに参会者は回答した上で、「各校で社会に開かれた教育課程の実現に向けて必要なこと」をテーマにグループで振り返りを行った。最後に、東洋大学教授・本市 ESD 推進コンソーシアム委員の米原教授と東京大学大学院教授・本市 ESD 推進コンソーシアム委員の北村教授に本研究発表会についてご講評いただいた。報告やグループ振り返り、講評を通して参会者からは、「学校が地域の核となり、持続可能な社会に向けて連携、協働していくことの意義、意味を感じることができました。より高い視座から、自分の仕事を見つめ直すことができました。」といった振り返りがあり、アンケートの「ご自身の所属先の持続可能な社会の創り手育成の充実につなげることができそうですか」という質問項目の結果も「そう思う」が 42.2%、「どちらかといえばそう思う」が 55.6%で、肯定的な回答で 97.8%となった。

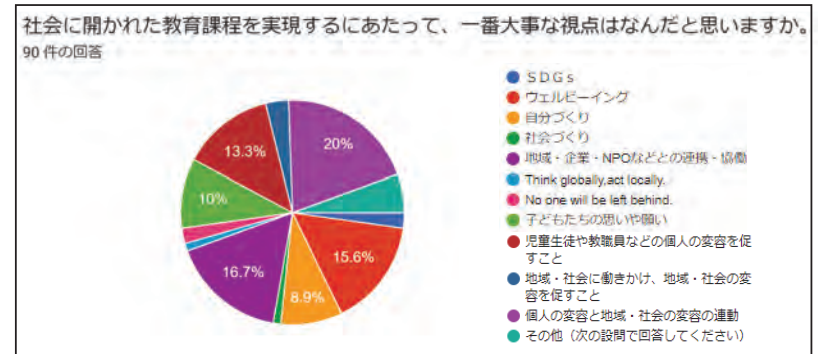


「ご自身の所属先の持続可能な社会の創り手育成の充実につなげることができそうですか」のアンケート結果



5 まとめ

参会者からは、「協働と参加、学習と協働の連動性、佐藤先生の講演が事例発表と連動しており、秀逸であった。横浜の教育の力を感じた。」といった振り返りがあった。また、アンケートの「社会に開かれた教育課程を実現するにあたって、一番大事な視点は何だと思いますか」という質問項目の結果は、回答結果に大きな偏りが無かった。この結果から、それぞれの学校の児童生徒の実態、地域の実態を踏まえて「社会に開かれた教育課程」の実現を考えた時に一番大事な視点は多様で、それを実現するためのアプローチの仕方も様々であることが明らかになった。



「社会に開かれた教育課程を実現するにあたって、一番大事な視点は何だと思いますか」のアンケート結果



横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会（児童・生徒の部）

1 目的

- ・今年度の学習活動のまとめとして発表を行い、自分たちの活動を振り返ると共に、他校の活動やSDGsについて多様な考え方を知る
- ・意見交流を通して、実現したいことを地域・企業・NPOなどの他の人と一緒に取り組むことの良さを感じ、これからの活動や自分の行動について考えるきっかけにする。

2 日時・場所

令和6年1月27日（土）9：40～12：00 日本丸メモリアルパーク 第1・2会議室

3 参加者とその人数

- ・ESD推進校の児童・生徒（旭小学校、羽沢小学校、本牧南小学校、みなとみらい本町小学校、大門小学校、三保小学校、荏田西小学校、南希望が丘中学校、西本郷中学校、市ヶ尾中学校、東高等学校、計11校約80名）
- ・よこはま子ども国際平和プログラムピースメッセンジャー（3名）
- ・保護者（約40名）
- ・市内学校教職員（約30名）
- ・ESD関係者（大学、他自治体、ユネスコ協会、各教育研究会、民間企業、私立学校、計約10名）

4 当日の内容

(1) ポスターセッション

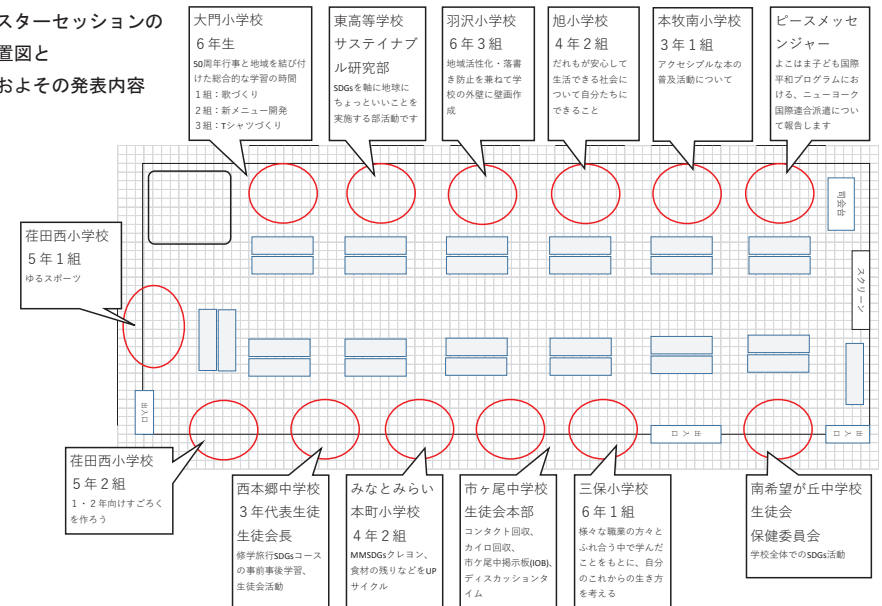
今年度の活動について発表し合うことで、自分たちの活動を振り返ると共に、他校の活動やSDGsについての多様な考え方を知ることが目的とした。各校で発表する児童生徒を前半・後半でグループ分けし、1回20分のセッションを2回繰り返した。自分の発表がないセッションでは、子どもたちは興味・関心のある発表を、自由に聞いて回った。

ESD推進校の多くは、学級・学年・委員会から数名が代表者として参加していた。初めて会う人の前でも大きな声で堂々と説明したり、聞き手を集めるために明るく周囲に声掛けをしたりしていた子どもたちの姿が印象的であった。担当教員に話を聞くと、当日の発表にむけて、学級で何度もリハーサルを繰り返し、自分たちのこれまでの取組を、初めて聞く人にどうやったら伝わるか試行錯誤を重ねてきた学校が多くあったようだ。参加した児童生徒は、「ここにいない仲間とも一緒に準備をしてきた」という自信と、代表者としての責任感、そして仲間への思いを胸に、この場にいることが分かった。



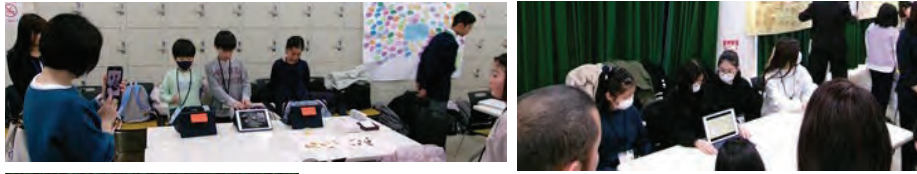
会場全体の様子

ポスターセッションの配置図とおおよその発表内容



～ポスターセッションの様子～



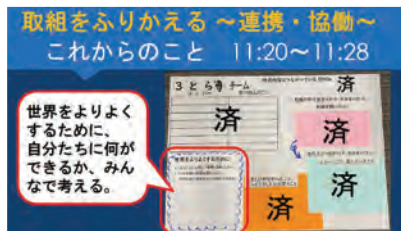
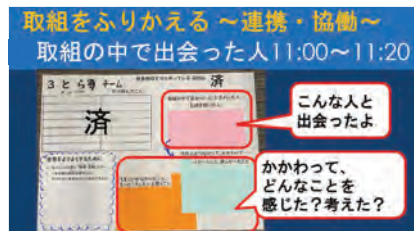
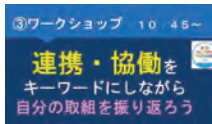


～ポスターセッション後の感想交流の時間～



(2) ワークショップ

ポスターセッションで発表した内容をふまえて、実現したいことを地域・企業・NPOなどの他の人と一緒に取り組むこと（連携・協働）の良さを感じ、今後の活動やこれからの自分の行動について考えるきっかけにすることを目的とした。



参加した児童・生徒を13グループに分け、中高生がファシリテーターとしてワークショップを進めた。中高生の参加者には事前に、「ワークショップの目的」や「ファシリテーターとしてお願いしたいこと」を、担当教諭を通じて伝えた。各校での事前指導もあったおかげで、中高生が目的をよく理解し、個性を發揮しながら話し合いを進めていた。異校種であったり異学年であったり、初めて会う人との時間に、最初は緊張した面持ちの児童生徒たちであったが、中高生のファシリテーターの活躍もあり、どのグループも今回のワークショップの目的を達成することができた。

児童・生徒が経験した連携・協働（ワークシートより抜粋）

<p>よかったこと・楽しかったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> 達成感 視野が広がった 人種をこえて楽しめた 活動を地域に広められた 改善することができた 本気で活動に取り組んだ 当事者の気持ちを知ることができた やりがいや良さを知ることができた 自分たちにできることがわかった 相談できる人がいることを知った 失敗からいろいろなことに気づけた 自分の力だけでは知れない新しいことや取組、考えや違う価値観を知れた 	<p>うまくいかなかったこと・もっとこうしたいと思うこと</p> <ul style="list-style-type: none"> 元気にしたかった人を元気にできなかった 緊張して声が出なかった 何を伝えたらいいかわからない 情報が伝わってなかった（伝えきれない時がある） 目的と違くなった 旬の時期がずれてしまうこと 時間がかかった もっとアドバイスをもらいたかった 地域のひととの交流を増やしたい 学校以外との関わりを増やしたい、もっと関わりたい
<p>もっとこんな風に「連携・協働」したい、こんな風に仲間を増やしたい、そのために自分たちには何ができるか</p> <ul style="list-style-type: none"> たくさんの人を知ってもらう 一緒に考える ちゃんと相手のことも考えて行動する 活動の幅をもっと広げる 学校だけでなく企業のまわりにも広めたい 横浜の魅力から世界につなげる 横浜から世界へ安心して暮らせる世界にしたい 興味が似ている人とつながりたい 色々な人の意見を聞き、交流する 今回みたいなイベントにいっぱい参加したい 大人を巻き込む 優しい心を広めていきたい 小さなことをコツコツと SDGsが達成できなかった時のリスクをしてもらう 大人でも関係なく意見を伝え合う あきらめずにたくさんの人に伝える 	

～ワークショップの様子～



5 振り返りとまとめ

(1) 児童・生徒の振り返りより

ポスターセッションについて

- ・同じようなとりくみやっている子もいたり、へ～そういうかつどうができるんだ～で思った。
- ・ニューヨークでかつどうしてこれを直したいっていう気持ちがつたわってぼくたちもやりたいと思いました。
- ・学校ででたことのない意見がたくさんあった。
- ・どの学校も学校単位で活動していて規模の大きさを感じた。

ワークショップについて

- ・リーダーをした中学生のようにはずかしがらずにはっぴょうしたりはなしあったりしたいです。
- ・学校やクラスで話し合いをしたい。
- ・たくさんの人たちと意見交換ができたので、それをふまえてのアイデアなどを持ち帰って、これからの生徒会活動につなげたいと思った。
- ・それぞれの学校ごとにSDGsに対する取組があることがわかった。自分の学校でもやってみたくらい取組に出会えた。
- ・ファシリテーターを経験し、物事を多角的に捉える力が十分でないと感じました。進学先ではより視野を広げ、多角的に捉えることを意識し、取り組みたいと思うことができました。

(2) 教職員の振り返りより

- ・この数年、児童生徒の部交流会はほとんどオンラインでした。久しぶりの対面開催で、子どもたちにとっても他校の仲間や大人（様々な立場の）と関わることの大切さを学ぶことができたと思います。
- ・児童が自信をもって、自分たちの活動を報告している姿や、その後の交流会で、自分達の活動に価値づけをしてもらい満足している姿を見ることができ、とても嬉しい気持ちになりました。活動をした後に、自分たちの活動が、社会のこんな部分につながるんだと意識づけすることの大切さを改めて学びました。
- ・生徒が頑張ってきたことを生き生きと語る姿を見て、成長を感じ、日々の探究への取組の大切さを改めて感じました。後半は、学校間の交流がしっかりでき、中高生が仕切中、小学生が堂々と意見を言っていたことが印象的でした。これも、協働だよなあ、と感じました。
- ・小学校の立場で参加した者にとっては、高校生、中学生のリーダーシップやファシリテート能力、発言内容に、自校での児童指導でどんな資質・能力を育てる必要があるのかを考えるきっかけとなったと思う。
- ・まだまだここに至る学習プロセスは教師主導だが、この発表の機会を得た児童が発信源となって、地域の現状から課題を見出し、他者の思いに心を寄せるマインドが広がることへの期待感がある。

(3) まとめ

当日の参会者の様子や、後日寄せられたアンケートの内容から、目的はおおよそ達成できたと言える。一方で、「他校の取組をもっと知りたかったのでこのような時程はどうか」という改善につながる前向きなアイデアが教職員から多く寄せられた。日々のESD推進に向けた取組や、今回の交流報告会における「目的」を共有できているからこそその声だと感じた。また、ワークショップでテーマにした「連携・協働」について、児童生徒が考えるには難しかったのではないかとという声もあった。児童生徒はある程度価値を感じているようだったが、これからも目的達成の手段として「連携・協働」の意義を実感できるような活動を推進していきたい。

当日の子どもの様子を見て、保護者は「家で見せる姿と違う」と言っていた。また、教員は「学校で見せる姿と違う」とも言っていた。他者と接すると、その人の別の側面が見えたり、その人が本来もっていた力を発揮したりすることができる。講評として東洋大学教授の米原あき氏は、「すでに児童生徒の皆さんを見ている大人の眼差しが尊敬の気持ちにあふれている」「意見や人々が集まって、異次元の考えやアイデアが浮かぶこと（コレクティブ・インパクト）」といった話をしながら、この会を「連携・協働」に絡めて価値づけをいただいた。子どもも大人も、全ての参会者にとって、これからの活動や自分の行動について考えるきっかけになった時間であった。



横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会（教職員の部）

1 目的

- ・教育活動の目的と手段をESDの視点で見直すことで、社会における学校教育の役割を考える。
- ・地域・企業・NPOなどと連携・協働することによる児童生徒や教職員、関係者等の変容を共有し、その価値を認識することで、社会に開かれた教育課程について理解を深める。
- ・参会者同士の意見交流を通して、各学校のESDの充実につなげる。

2 日時・場所・人数

令和6年1月27日（土）13:30～16:45 日本丸メモリアルパーク 第1・2会議室（60名）

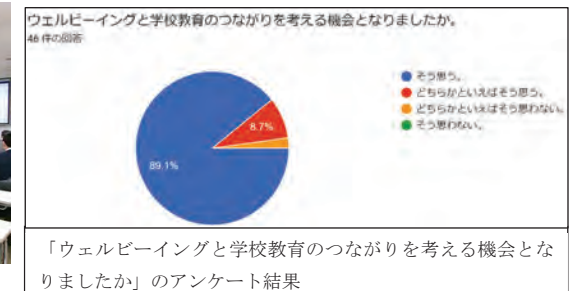
4 参加者

市内学校教職員 市外学校教職員 ESD関係者 企業等関係者

5 当日の内容

(1) 講演

「わたし」と「わたしたち」のウェルビーイング実現にむけた学校教育の可能性」をテーマに、東洋大学教授・本市ESD推進コンソーシアム委員である米原教授にご講演いただいた。講演後には、「私のウェルビーイングと学校教育のつながり」をテーマにグループ協議を行った。講演とその後のグループ協議を通して参会者からは、「子どもたちのために学校としてできることは何か、ウェルビーイングに向けて何ができるか等考え続けることや、考えたことをもとに対話することの大切さを改めて感じました。」といった振り返りがあり、アンケートの「ウェルビーイングと学校教育のつながりを考える機会となりましたか。」という質問項目の結果も「そう思う」が89.1%、「どちらかといえばそう思う」が8.7%で、肯定的な回答が97.8%となった。



(2) 連携・協働実践報告

「地域や社会の課題解決に向けて、学校と企業が連携・協働する意義」をテーマに、南希望が丘中学校の高倉教諭と株式会社 kitafuku の松坂代表取締役、東高等学校の市川主幹教諭と株式会社 StockBase の関代表取締役に実践報告していただいた。これらの学校と企業は、7月31日に実施した「ステークホルダー交流会」で連携・協働のきっかけを作り、本交流報告会では、学校と企業との連携・協働のそれぞれの具体やメリット、連携・協働したことによる変容や今後の展望をお話いただいた。実践報告後には、「地域や社会の課題解決に向けて、取り組みそうなこと」をテーマにグループ協議を行った。実践報告とその後のグループ協議を通して参加者からは、「お一人お一人の前向きな考え方や取組に感銘を受けました。また、小中学校の先生方の取組が高校につながっているという事例を伺えたことも心に響きました。」といった振り返りがあり、アンケートの「学校と地域・企業・NPOなどが連携・協働する価値を認識することにつながりましたか。」という質問項目の結果も「そう思う」が93.5%、「どちらかといえばそう思う」が4.3%で、肯定的な回答で97.8%となった。

「連携・協働するメリット」

南希望が丘中学校 × 株式会社 kitafuku	中学生の素敵なアイデア
社会課題の解決を生徒が実感	
高校生のわくわく	起業や社会課題の解決のハードルを下げる
東高等学校 × 株式会社 StockBase	

学校と地域・企業・NPOなどが連携・協働する価値を認識することにつながりましたか。
46件の回答

そう思う。	93.5%
どちらかといえばそう思う。	4.3%
どちらかといえばそう思わない。	0%
そう思わない。	0%

「私たちのウェルビーイングの実現に向けて、取り組みそうなこと」のアンケート結果

(3) 振り返り・まとめ

本交流報告会の目的に対応した Google フォームのアンケートに参加者は回答した上で、「学校教育を通して「わたし」と「わたしたち」のウェルビーイングを実現するために大事なこと」をテーマにグループで振り返りを行った。最後に、東洋大学教授・本市 ESD 推進コンソーシアム委員の米原教授に本交流報告会についてご講評いただいた。グループ振り返りや講評を通して参加者からは、「個人だけでは分からないことがあり、様々な視点から考えるためにも、多様な他者との対話が大切だと思った。」「ウェルビーイング一つとっても、企業と学校が求める内容が異なりますが、異なるフィールドで生活しているからこそ、価値の共有ができ、未来社会造りを目指す上で、双方の連携・協働が一番大事だと感じた。」といった振り返りがあり、アンケートの「ご自身の所属先のよりよい社会（持続可能な社会）の創り手育成の充実につなげることができそうですか。」という質問項目の結果も「そう思う」が58.7%、「どちらかといえばそう思う」が37.0%で、肯定的な回答で95.7%となった。



ご自身の所属先のよりよい社会（持続可能な社会）手育成の充実につなげることができそうですか。
46件の回答

そう思う。	58.7%
どちらかといえばそう思う。	37%
どちらかといえばそう思わない。	0%
そう思わない。	0%

「ご自身の所属先のよりよい社会の創り手育成の充実につなげることができそうですか」のアンケート結果



5 まとめ

参加者からは、「『偶然の出会い』は決して偶然ではなく、様々な方の思いや考え、行動の結果生まれたもの。点と点がつながるのも偶然ではなく、やはり思いや考えがなければつながらない。」「ウェルビーイングのエイジェンシー的捉え、今日一番の収穫でした。」といった振り返りがあった。また、アンケートの「学校教育を通してウェルビーイングを実現するために、一番大事な視点はなんだと思いますか。」という質問項目では、「自分にとって大切な価値を見つけ、実現したい生き方を問いつけること」という回答が26.1%で一番多く、次に「多様な他者と対話し続けること」という回答が13.0%、「社会における学校教育の役割を問いつけること」という回答が10.9%と続いた。これらの結果から、「問いつける」「対話し続ける」ことが本交流報告会のテーマである「わたし」と「わたしたち」のウェルビーイング実現にむけた学校教育の可能性のキーワードになるのではないかと考えられる。

学校教育を通してウェルビーイングを実現するために、一番大事な視点はなんだと思いますか。
46件の回答

自分にとって大切な価値を見つけ、実現したい生き方を問いつけること	26.1%
多様な他者と対話し続けること	13%
社会における学校教育の役割を問いつけること	10.9%
社会に開かれた教育課程についての再構築を問いつけること	8.7%
持続可能な社会の創り手育成を問いつけること	0%
学びづくり (キャリア) 教育を問いつけること	0%
地域・企業・NPOなどとの連携・協働を問いつけること	0%
児童生徒や教職員、関係者等の実容を問いつけること	0%
地域・社会に目を向け、地域・社会の実容を問いつけること	0%
個人と組織・社会の両方を問いつけること	0%
社会有い状態にするために何を問いつけること	0%
教育が自分のウェルビーイングを大切にしているか問いつけること	0%
多様な価値や生き方を問いつけること	0%
潜在能力 (ケイパビリティ) を問いつけること、進捗状況を問いつけること	0%

「学校教育を通してウェルビーイングを実現するために、一番大事な視点はなんだと思いますか」のアンケート結果

地域が変わる、ミライを変える教育 Reform セッション
第4回「ENGINE」in Nagoya

1 概要

「ENGINE」は、学校教育に関わる教職員やキャリア教育コーディネーター、行政、地域の企業・団体、その他地域の関係者が集まり、これからの学校や教育について学び合い、一歩踏み出すきっかけの場となることを目指しているプラットフォームである。今回のテーマは「多様な価値との「対話」を通じて成長を続ける喜びを。」であり、分科会の講師として、横浜市におけるESDの取組について話をしてほしいとの依頼を受けた。

2 日時・場所

令和5年6月11日(日) 10:00~16:30、名古屋市立大学 桜山キャンパス

3 当日の内容 (発表スライドより抜粋)

横浜国立大学におけるSDGs達成の担い手育成(ESD)
～はまっ子未来カンパニープロジェクトによる地域・社会との連携・協働～

横浜市教育委員会事務局 小中学校企画課
渡辺 聡 (Watanabe Toru) 岡本 真 (Okamoto Satoru)

本日の流れ 学校が地域や企業、NPO団体等と連携・協働して、地域や社会の課題を解決することの価値に気付く

- 横浜市教育委員会の取組
 - SDGs達成の担い手育成(ESD)
 - はまっ子未来カンパニープロジェクト
 - 地域・企業・NPOなどとの連携・協働
- 情報交換会
 - 質疑応答①&アンケート入力
 - グループでの感想交流
 - 質疑応答②

横浜国立大学小中学校のESDの取組状況

小学校(単位:校) 1=2+3+4 中学校(単位:校)

1. 国でESDへの取組を促している。
2. 学校でESDについて取組むことと推進している。
(注1) 一部の小学校や中学校、資料館においてESDの取組が実施されている。
3. 一部の小学校や中学校、資料館においてESDの取組が実施されている。
(注1) 一部の小学校や中学校、資料館においてESDの取組が実施されている。
4. ESUについて取組むことと推進している。

はまっ子未来カンパニープロジェクト 趣旨・目的

地域社会や企業等と連携した教育活動を通して、次の資質・能力を育成し、各校の教育課程における「自分づくり」(キャリア)教育の充実を図る。

- 「チャレンジ精神、実行力、協働性、創造性、リーダーシップ」。(総業精神に係る資質・能力)
- 自分自身も持続可能な社会の創り手であることに気づき、社会を良くしようとする態度

地域・企業・NPOなどとの連携・協働

地域・企業・NPOなど 連携・協働

No one will be left behind.
地域・社会に働きかけ

交流報告会(10月及び1月下旬~2月上旬) 個人の変容

【小学校1年】 他校の取組を知り、自分たちの学校に活かすことに挑戦しました。
【中学校1年】 自分たちの学校に活かすことに挑戦しました。

学習発表会 はまっ子が横浜の未来を語る会

【第1部】 会場参加校の取組発表会
各学校からの発表(5分×5校)
指導講評(推進委員)

【第2部】 「はまっ子が横浜の未来を語る会」
会場、オンラインでの意見交流
指導講評(推進委員)

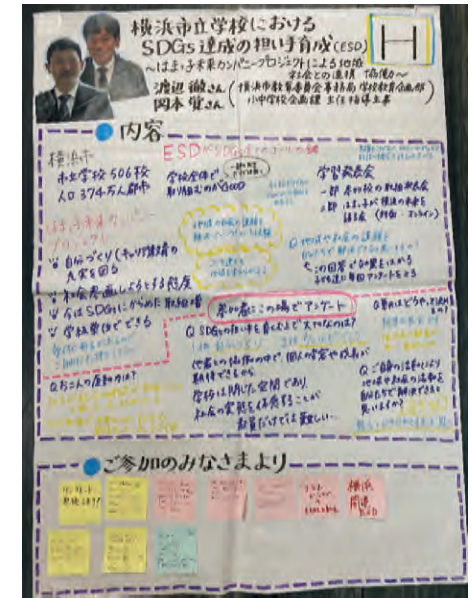
ESDとはまっ子を一体的に推進

横浜教育庁、学習状況調査 質問紙(2022~)

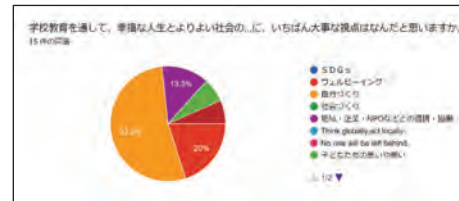
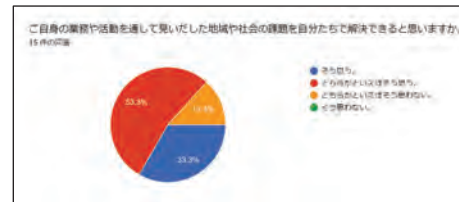
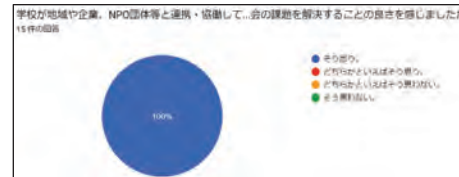
小学校1~6年生 中学校1~3年生

学習を通して見いだした地域や社会の課題を自分たちで解決できると感じています

4 当日の様子



5 参加者からの声



「パンフレット熟読します！」

「お二人構成のお話とてもおもしろく為になりました。すごいなー、という一言。」

「地域・社会と教育機関の連携・協働をあたりまえにしたい!!」

「社会づくりと自分づくり、総合的な学習の時間と特活などなく一緒にできない現状を思い出しました。我が校も課題となっています。そういうことを共有できたことも勇気付けられました。」

「複雑に問題がからんでいる教育行政にどろくさく取り組むお二人の姿に感銘を受けました。」

「コラボレーションの大切さを知った」

「とても素晴らしい取組なので、教員が無理なく計画できるサポートが手厚くなるといいなあ、と思いました。」

「横浜の取組、面白いです。地域とのつながりから、子どもたちの未来の広がりを感じました。」

第9回 群馬県ユネスコスクール研修会
(兼 第12回 藤岡市ユネスコスクール研修会)

1 概要

群馬県ユネスコ連絡協議会・ユネスコスクール委員会では、藤岡地方ユネスコ協会の主管とし、ESD や SDGs、ユネスコスクールの理解と実践の質的向上を図ることを目的に、研修会を開いている。今回は、第一部の講演の時間に、「横浜市立学校における SDGs 達成の担い手育成 (ESD) ～はまっ子未来カンパニープロジェクトによる地域・社会との連携・協働～」という演題で話をしてほしいとの依頼を受けた。対象は、学校教職員、教育委員会関係者、ユネスコ協会会員、一般の参加者である。

2 日時・場所

令和5年12月12日(火) 13:20～16:40、地域づくりセンター藤岡

3 当日の内容 (発表スライドより抜粋)

横浜市立学校におけるSDGs達成の担い手育成(ESD)
～はまっ子未来カンパニープロジェクトによる地域・社会との連携・協働～
横浜市教育委員会事務局 小中学校企画課
渡辺 徹 (Natanabe Toru) 岡本 寛 (Okamoto Satoru)
神村 絵織 (Kamimura Eori)

本日の流れ
1 横浜市教育委員会の取組
・SDGs達成の担い手育成(ESD)
・はまっ子未来カンパニープロジェクト
・地域・企業・NPOなどの連携・協働
2 情報交換会
・質疑応答①&アンケート入力
・グループでの感想交流
・質疑応答②

横浜市立小中学校のESDの取組状況
小学校(単位:校) 1+2+3+4
中学校(単位:校)

はまっ子 参加校数・取組数
参加校数
参加校数と取組数
参加校数と取組数

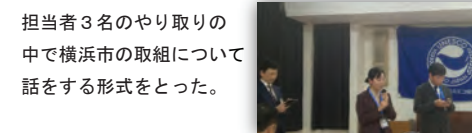
地域・企業・NPOなどの連携・協働
地域・企業・NPOなど
連携・協働
地域・社会に働きかけ
地域・社会の受容を促す

ステークホルダー交流会(7月31日10:00~12:00)
YOXO BOX(横浜市 スタートアップ成長支援拠点)

学習発表会 はまっ子が横浜の未来を語る会
2月13日(水) 13:30~15:15
会場 横浜みなとみらいセンター

学習発表会 はまっ子が横浜の未来を語る会
第2部の様子

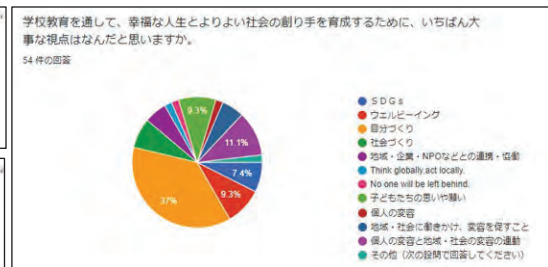
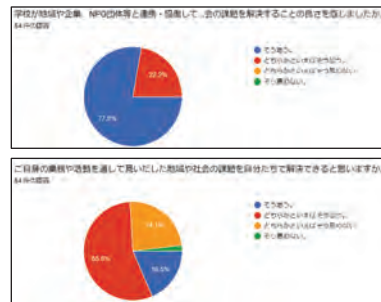
4 当日の様子



担当者3名のやり取りの中で横浜市の取組について話をした形式をとった。

← 講演内に、感想交流の時間も確保し、参会者の方にもアウトプットする場を大切にしました。Google Form を使った感想の共有は初めてだった方も、積極的に回答していた。

5 参加者からの声



「横浜市の先進的な取組と自校の取組の基本は同じだと実感した。違いもわかり、今後に生かしたい。」
「8年目を迎えた横浜市教委のSDGsへの取組が、わかりやすい説明により自分なりに理解できた。とりわけ、チーム(3人の担当者)による実践発表、スマホを導入した質疑応答、はまっ子推進委員会が有効に機能し事業者と学校のつなぎ役になっていることなどが印象的だった。」
「『連携・協働』について、組織的に熱意をもって生徒の『自分づくり』のために進めていくことが大切であるとわかった。教育委員会が全面的にバックアップしていることに驚きを感じた。」
「横浜市の取組を聞いて、規模や校数は全く違うが、持続可能な社会の担い手としてどう生きていくかという点は、藤岡市でも変わらないと感じた。今やっている取組も方向性は同じだと思った。」
「横浜市教委の取組では、地域・企業の連携、協働の在り方で新しい視点を与えていただいた。学校と企業のマッチングはすばらしかった。ゴールはどこなのか、どこを目指すのが明確だった。人とかわりながら社会に参加していくこと、目的と手段を明確にして、学校の教育活動を通して子供を育てていきたい。」

本市のESDの推進事業について

令和4年度実践報告書より

第1期（2016～2018年度）

2016年度の文部科学省の「グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業」に採択され、横浜市教育委員会として、横浜市ESD推進コンソーシアム（以下、コンソーシアム）を組織し、横浜市立学校でのESDの推進を始めた。本市のESD推進校（以下、推進校）の特色は、資料1に示したユネスコスクールのみでの活動だけでなく、教育委員会が主体となって推進校を指定し、推進を図ってきた点である。

資料1

横浜市立学校のユネスコスクール加盟校

2010年 永田台小学校

2012年 市ケ尾中学校

2013年 幸ヶ谷小学校

2018年 東高等学校

2021年 三保小学校（キャンディーデート）

2022年 みなとみらい本町小学校

本市におけるESDの黎明期においては、「持続可能な開発のための教育」をどのように解釈して、学校教育に位置付けるかということや、推進校を増やすことに注力してきた。そのために、学校と教育委員会だけでなく、大学や行政、企業やNGO・NPOなどの関係者でコンソーシアムを組織し、年に数回、会合を開き、方向性を確認したり、各学校の取組を支援する方を検討したりしてきた。

数年間は、毎年1月に行われる、コンソーシアムの交流報告会に参加する教職員から、「ESDの概念が広すぎて何をしたら良いか分からない。」「また新しいことを始めることに負担感がある。」「環境教育と何が違うか分からない。」「などの声があり、実践者によっても捉え方が異な

り、学校へどのように浸透させていくかが課題と感じられることも多くあった。そのため、1年目の推進校をスタート校と位置づけ、負担感がないように、他の推進校のグッド・プラクティスを実践できるように支援をしたり、校内での授業研究会や研修会に指導主事を派遣したりして、教職員との対話を通してESDの概念の理解を深めることを続けてきた。これらの取組は現在も続けている。

このような試行錯誤の中でも、初年度に作成した「ESD推進のための教職員研修資料」は大きな成果と言える。この研修資料では、ESDを「カリキュラムデザイン」と「学校運営」の2つの視点で捉えなおすことを大きなコンセプトとしている。

ESDを考えるキーワードとして、UNESCO2012のESDを充実させる「4つのレンズ」批判的レンズ、統合的レンズ、変容的レンズ、文脈的レンズをそれぞれ、①「見直す」②「つなげる」③「変わる」④「地域で、世界へ」という学校で理解しやすい言葉に置き換えることを試みた。換言すると、ESDは何か新しい教育活動に取り組むことではなく、これまでの教育活動を見直し、教科等や学校行事や委員会活動等の関連性を意識すること、そのことによる新たな価値の発見や気づきによる変容が起こること、学校や地域の身近な課題解決と地球規模の課題とのつながりに気づくこと（Think globally Act locally）などの重要性を示すことができた。また、ホールスクールアプローチ¹の重要性や自己変容が社会変容につながるというESDの基本的な考え方について発信する資料ともなり、校内研修でも活用された。

さらに、「能力と態度」、「学級・学年と学校全体（職員室も含む）」、「教科と総合的な学習の時間等」、「地域と世界」といったように、対概念を対比させ、関連性を図ることによって、オーバ

ーロード状態のカリキュラムの精選や分掌、担当、教科等の専門などに細分化されやすい学校の教育活動を、ホールスクールアプローチとしてESDを通して見直すきっかけを示唆する内容となっている。

また、第1期の前後に起こった世界的な潮流や本市の教育政策の動向もESD推進にあたっては大きな原動力となった。

2015年に国際連合で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」のインパクトは大きい。前述の通り、ESDは学校教育の中で何を実践するかが見えにくい部分があったが、17のゴールの視覚化されたイメージとともに、学校教育だけでなく、企業の活動を含む社会全体の中で意識され始めたことも、ESD推進の必要性を考える一助となっていることは言うまでもない。

さらに、2018年に策定し、およそ10年間の横浜の教育の方向性を示す「横浜教育ビジョン2030」（以下、ビジョンとする）において、横浜の教育が目指す人づくりを「自ら学び 社会とつながり ともに未来を創る人」と位置付けたことにも触れたい。ビジョンでは、目指す人づくりについて、「複雑で変化の激しい時代、解が一つではない課題にも柔軟に向き合い、持続可能な社会の実現に向けて、自分たちができることを考え、他者と協働し、解決していくことが重要」としており、このことはESDの推進の重要性を示している。ほぼ時を同じくして、中央教育審議会答申（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」2016年12月21日）において、第2章 2030年の社会と子供たちの未来の冒頭で、「予測困難の時代に、一人一人が未来の創り手となる」²と学習指導要領改訂に向けた強いメッセージが記された。答申を受け、学習指導要領が改訂され、前文及び総則に「持続可能な社会の創り手」の育成が必

要ということが明文化されたことは言うまでもない。

第1期の中で、もう一つ指摘しておきたいことは、「教職員の働き方」について、ESD推進校で先進的に取り組まれていた点である。昨今、持続可能な教職員の働き方について国を挙げて取り組まれていることであるが、2016年の段階で、推進校の中で、既に身近な課題として共有され意識化されていた。教職員の職業的使命ともいえるべき「子どものため」という視点は疑う余地がないが、それだけではなく、「持続可能な働き方」という視点も持ち合わせていて、教職員自身のやりがい、時間的にも精神的にも保障し、「持続可能なもの」にしていく必要があるという議論が既に起こっていたことは、推進校の教職員に先見性があったと言っても過言ではないだろう。また、学校経営というと管理職が行うものという意識が強い中で、推進校の教職員は、学校教育目標の実現のために、自分がどのように学校経営に参画していくかという視点も持ち合わせており、教科等の学習にとどまることなく、既にホールスクールアプローチの萌芽が見られたことは特筆すべきことである。

第2期（2019年度～現在）

2019年度からは、文部科学省の事業が「SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業」に変更されたが、本市はこの事業に引き続き採択され、中でも「教育（学習）効果の評価・普及」というテーマで推進を行ってきた。

第2期にこのテーマでESDを推進するに当たって、私たちが最も大切にしてきたことは、単にESDの教育効果の尺度をつくることやその手法のみを開発することだけを目的にしなかったことである。

そもそも教育（学習）の評価自体が見えにくく、可視化しづらいものという認識に立ち、な

¹ 「ESD for 2030」においても、その優先行動分野の二つ目に「機関包括型アプローチ」として組織全体でESDを推進することが有効であると提言されている。ユネスコは、学校全体としてESDに取り組むことを、「ホールスクールアプローチ：Whole School Approach」と呼んでいる。

² この点に関して、前回答申（2008年1月7日）では、これらかの社会像を「知識基盤社会」と位置づけ「このような社会では自己責任を果たし、他者と切磋琢磨しつつ、一定の役割を果たす」ための学力（基礎的基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等）の育成に重きが置かれていた。

ぜ、「評価」を行うかという目的に着目して検討を行ってきた。評価 (Evaluation) の原義は「価値を引き出す」(Extract-value) ということを基底として、これまでの本市での ESD 推進と ESD 推進による変容の視覚化 (ESD に取り組むことによさ=価値を引き出す) を関連付けて、研究を推進してきた。

例えば、SDG4 のアイコンには「質の高い教育をみんなに」と書かれているが、「質の高い教育」という文言は受け取り方によっては多様な解釈が可能である。そこで、原典の外務省和訳に当たると「すべての人々に包摂的かつ公正で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」³ (傍点は加筆) とある。例えば、識字率などのように比較的測定可能な目標を掲げているわけではなく、ESD が求める、ターゲット 4.7⁴ の実現などは、そもそも測定 (評価) することが難しいことを指摘しておく必要がある。

2019 年度からのミッションは「教育効果の評価」ではあったが、あえて「ESD に取り組むことの価値 (よさ)」として、学校の文脈で理解できることを目指した。このことは、ESD が大切にしている「変容」を視覚化する手法 (評価手法) の開発にとどまらず、学校教育目標やその実現にむけて育成したい「資質・能力」との関係を整理し、「ESD に取り組むことの価値」について教育活動全般を通してどのように実現していくか (ホールスクールアプローチ) という視点を捉え直すことである。換言すれば、これまで取り組んできた教育活動を目的と手段の関係から、見直し、価値づけるという視点で取組を進めてきた。

2020 年は COVID-19 が世界的に拡大をして、日本でも約 3 ヶ月間もの間、全国規模での学校一斉休業を余儀なくされた。再開後も通常の学

校運営が難しい中でも、推進校の中から、「コロナ禍で活動が制限されている中でも自分たちの考えや行動を積極的に発信、広げていこうとする子どもの意識や行動力の高まりが感じられた」という声が開こえてきたことに、数値だけでは測りしれない ESD を推進してきた強み (価値) を改めて感じるようになった。この時期は、ICT 機器を活用して、オンラインでの交流や集合開催とオンラインで同時開催するハイブリット方式を利用した教職員や児童生徒の交流を試行錯誤しながら進めてきた時期でもあった。年度末に会場集合で実施していた、児童生徒の交流報告会についても、オンラインを用いて数日に分けて開催することができた。この取組は、現在でも改善を重ねて実施しており、2022 年度は 10 月と 1・2 月に 2 回開催することができた。(詳細は本書第 3 章を参照)

ESD 推進による変容の視覚化の手法についての推進校の取組としては、「持続可能な社会づくり」の構成概念 (例) や ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度 (例) をもとにした年度始めと年度末に行うアンケート調査や、児童生徒の記述をテキスト・マイニングなどの手法を用いた調査などがあげられる。この取組は学習活動の中で児童生徒の変容を教師が視覚化するだけでなく、生徒会活動の振り返りの中で生徒自身が変容を視覚化して、自分たちの活動の改善に取り組んでいる中学校もあった。

横浜市立みなとみらい本町小学校では、「みなとみらいを創る子」という学校教育目標を掲げ、開校当初 (2018 年度) から、参加型形成的評価である「協働型プログラム評価」に取り組んでいる。この評価手法はいわゆる、説明責任を果たすための「総括的な評価」ではなく、実践を行う前や実践途中に実施され、その実践がもっと良くなるためにはどうしたらよいかという、開

発や改善に資する内発的な評価である。この評価に取り組むことにより、上位の学校教育目標と具体的な教育活動とがロジックで結びつき (目的と手段のつながり)、教職員だけが個々の教育活動を理解しているだけでなく、「協働型プログラム評価」自体が、保護者や地域等との異なる当事者間での理解を深めるコミュニケーション・ツールとしての役割を果たしている。また、効果という何%などという「数値化されたもの」に偏る傾向があるが、このような既存の指標にとらわれず、「自分たちの実現したい価値」をどう具現化していくかを関係者が議論を積み重ねることが重要で、指標は必ずしも数字ではなくてもよい。現在は、この評価手法を学校運営協議会での実施したりや学級運営の視点でも導入されたりしている。(詳細は本報告書第 2 章を参照)

2020 年には、推進校の児童生徒と教職員に、東京大学大学院による「ESD に対する知識・態度・行動」に関する質問紙調査を行っている。⁵ この調査によって、「ホールスクールアプローチ」による ESD の取組が積極的に進められていることが児童生徒の知識・態度・行動に対してポジティブな影響を及ぼしていることが明らかになった。一方で、この調査結果では、子どもたちの学びが深まるなかで、世の中には難しい問題があることを理解し、自分はまだ知らないことが多いということを謙虚に受け容れてしまう意識が働いているといった可能性があり、結果については検証の必要性がある。つまり、児童生徒が熟考するプロセスを通して、表層的に見ていた社会課題は、解決が難しく時に無力感を感じることもあるかもしれないことを質問紙調査は示唆している。教師自身が考えている児童生徒の変容と、児童生徒個人の回答との「ズレ」にしっかりと着目し、その理由を分析して教師が個人を理解することが必要なことも重要な視点として捉えることができた。

この傾向は教師にも当てはまり、ESD に関する研修をより多く受けている教師ほど、ESD を実践するための知識や教授法について十分な理解ができていないと感じていると調査結果から分かってきている。この点は重要な指摘で、何かの実践や活動に取り組んだことによって調査結果が必ずしも右肩上がりに数値が伸びる訳ではないということである。

最後に、今後の展望を示してまとめとする。現在策定されている、第 4 期横浜市教育振興基本計画の大きな柱である「持続可能な社会の創り手の育成」では、2 つの事業を一体的に推進していくこととした。2 つの事業とは、「SDGs 達成の担い手育成」と「キャリア教育」(本市では自分づくり教育と呼んでいる。) のことである。個人がいくら幸せであっても、その社会が公正で持続可能な社会でなければ、真の幸福な人生は実現しない。事業の一体化には、社会づくりと自分づくりの両立をめざす意図が含まれている。本市ではこれまで別の事業として推進してきたが、次年度以降は事業の一体化の推進を図りたい。

また、本市で実施している学力・学習状況調査「生活・学習意識調査」に新たな質問項目として、「学習を通して見いだした地域や社会の課題を、自分たちで解決できると思いますか。」を加えた。この質問項目を新設した意図は、これからの学校教育は、「〇〇力の育成」といった、その時々での社会の要請による人材育成にとどまることなく、児童生徒とともに「あるべき社会像」を構想することが必要で、その社会は児童生徒自身で実現できるという意味を含んでいる。

今後とも、社会変容を標榜する ESD の実践に、新しい価値創造や価値共創の可能性を追究していきたい。

³ Goal 4 Ensure inclusive and equitable education and promote lifelong learning opportunities for all

⁴ 2030 年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

⁵ 2020 年度 ESD 推進校 22 校に対する調査を実施した。概要については、2020 年度横浜市 ESD 推進コンソーシアム実践報告書第 3 章を参照されたい。

本年度のSDGs達成の担い手育成（ESD）推進校

横浜市立永田台小学校	横浜市立本牧中学校
横浜市立幸ヶ谷小学校	横浜市立小田中学校
横浜市立市ヶ尾中学校	横浜市立中川西中学校
横浜市立東高等学校	横浜市立相沢小学校
横浜市立みなとみらい本町小学校	横浜市立旭小学校
横浜市立三保小学校	横浜市立本牧南小学校
横浜市立羽沢小学校	横浜市立新井中学校
横浜市立恩田小学校	横浜市立南希望が丘中学校
横浜市立荏田西小学校	横浜市立豊田小学校
横浜市立大門小学校	横浜市立鉄小学校
横浜市立中和田中学校	横浜市立並木中学校
横浜市立西本郷中学校	横浜市立希望が丘中学校
横浜市立西柴中学校	横浜市立緑園義務教育学校
横浜市立中尾小学校	

(2023年度指定 27校)

本報告書の執筆・作成協力（第2章）

東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授 佐藤 真久
(横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター)

編修・発行 横浜市教育委員会事務局学校教育企画部小中学校企画課
横浜市ESD推進コンソーシアム



横浜市では、
「SDGs 達成の担い手育成推進事業」
と
「自分づくり(キャリア)教育」
を一体的に推進しています。

「はまっ子未来カンパニープロジェクト」
（「自分づくり(キャリア)教育」を
推進する取組の1つ）